

年 報

annual report

2024

トヨタ博物館
TOYOTA AUTOMOBILE MUSEUM

富士モータースポーツミュージアム
FUJI MOTOSPORTS MUSEUM

トヨタ博物館 富士モータースポーツミュージアム 2024年報

目 次

トヨタ博物館 館長からのご挨拶

1

I : 1年間の学芸・企画活動

1. 2024年世界自動車博物館会議 日本大会	2
2. 企画展「日本のクルマとわたしの100年」	16
3. 新たな活動の柱！ オートモビル カウンシルへの出展	26
4. 夏休み乗車体験展示「夏の思い出 レア車に乗って記念撮影しよう！」	30
5. ちいさな図書室	31
6. エントランス展示 ①堺市ヒストリックカーコレクション連携展示 ②ラリージャパン連動ラリーカー展示	32
7. ディーノ 246GTS (1973年 イタリア) の修復について	33
8. 「クルマづくり日本史」の研修活用	36

II : 館運営活動

1. クルマの図書室 リニューアル	39
2. 来館者800万人達成 記念セレモニー＆記念WEEK開催	48

III : 資料編

1. 活動サマリ (2024年度)	50
2. 来館者データ (累計及び2024年度)	51
3. 取材記録 (2024年度)	52
4. 車両貸出実績 (2024年度)	53
5. 社外イベント出展 (2024年度)	53
6. 寄贈車両実績 (2024年度)	54
7. オーナーズミーティング (2024年度)	54
8. エントランス展示車両 (2024年度)	55
9. 教育普及 (2024年度)	56
10. 車両整備実績 (2024年度)	57
11. 図書室活動実績 (2024年度)	60
12. 活動年表 (2024年度)	62

富士モータースポーツミュージアム 館長からのご挨拶

65

IV : 1年間の活動

1. The Golden Age of Rally in Japan	66
2. 富士ファンクルーズ「1960年代から90年代の日本の名車」開催 ～世界自動車博物館会議 日本大会との連携企画～	78
3. 常設および企画展示車両に連携したトークイベントによる コアファン獲得とFMMの認知向上	81
4. 地域行事と富士スピードウェイ関連イベントとの 連携を通じた認知向上と来館促進	88
5. 展示車両の動態保存に向けた取り組み	93
6. 富士モータースポーツミュージアム 来場者10万人達成 & 感謝WEEK開催	98

V : 資料編

1. 来館者データ (開館から2024年度)	100
2. 車両貸与者 (2024年度)	101
3. 活動年表 (2024年度)	103

VI : 資料

1. 運営組織・施設概要	104
--------------	-----

はじめに：館長からのご挨拶

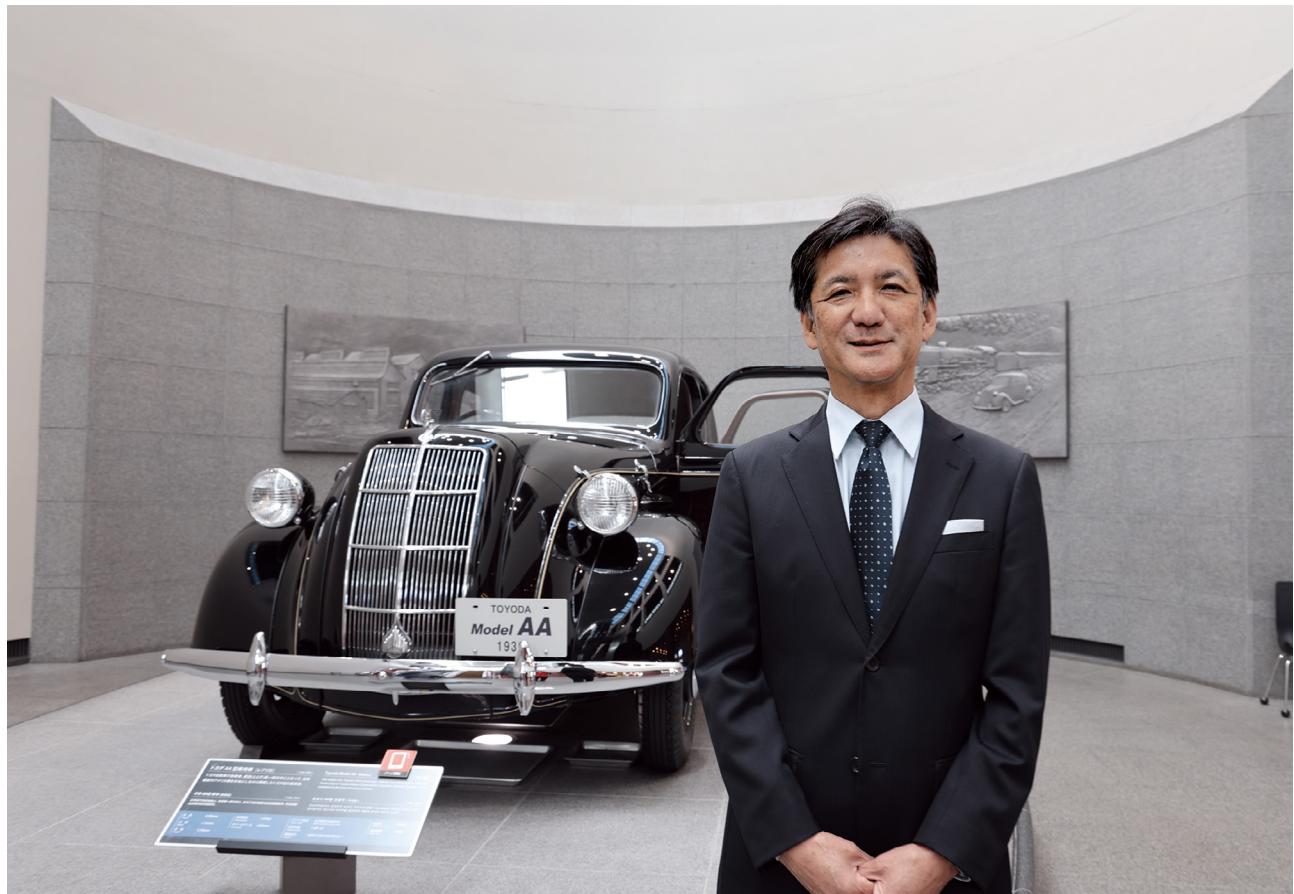
日本のクルマ文化の着実な醸成に向けて

トヨタ博物館 館長 神原 康裕

2024年10月、国立科学博物館様・日本自動車工業会様・自動車メーカー各社様など多くの皆様から多大なご協力をいただき「世界自動車博物館会議」が開催されました。過去15回は欧米での開催、今回アジアで初めての開催となり、日本のクルマ文化を考える大変良い機会になりました。これまで日本のクルマ文化は必ずしも高く評価されていませんでしたが、ポップカルチャーの影響・車の品質・独自のデザインが評価され、海外では1980・90年代の日本の旧車が人気となっていることや日本の自動車メーカーのヘリテージ活動等が紹介され、日本のクルマ文化が一歩一歩着実に醸成されていると感じています。

当館におきましても今年度は通年の活動であるヘリテージカーの収蔵・展示、クルマ文化に触れる場づくりに加え、11月の図書室リニューアルやトヨタグループ・社内関係各部とヘリテージ活動の強化に取り組んできました。今後も、今回の世界自動車博物館会議にてお世話になりました世界・日本の自動車関係の皆様と連携強化し、お客様に喜んでいただけるような企画を検討していきたいと思います。

最後になりますが、2025年1月には1989年の開館以来、累計来館者数が800万人を越えました。日本国内のみならず海外からお越しいただきました800万人全てのお客様とこれまで当館を支えていただきました多くの関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



I : 1年間の学芸・企画活動 1

2024年世界自動車博物館会議 日本大会

期間：2024年10月29日(火)～11月1日(金) 場所：トヨタ博物館

谷中 耕平 / 藤井 麻希(学芸・企画1グループ) / 土館 泰裕(学芸・企画2グループ)

1 日本開催の経緯と想い

世界自動車博物館会議(World Forum for Motor Museums、以下WFFMM)は、欧州のThe European National Museums と米国のThe National Association of Automobile Museums が中心となり、「世界の自動車博物館が直面する様々な問題や課題をグローバルな視点で捉え、歴史遺産とも言える各種車両への情熱を共有する人々と出会い、知識を交換する機会を提供する」ことをミッションとして、英国土立自動車博物館の実質的オーナーであるモンタギュー卿の提唱で1989年に発足し、以降隔年で開催されている会議体である。過去イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、オーストラリア、アメリカで計15回開催されてきたが、2020年にWFFMMの事務局からトヨタ博物館に対し、2024年の第16回会議の日本開催についての打診があった。

過去、日本の自動車は世界で販売、愛用されているにも拘わらず、「自動車文化」という面では海外からも国内でも必ずしも評価されているとは言えなかった。従来欧米のみで開催されていた当会議がアジアで初の開催となり、近年国内の自動車メーカーにおいてパーツの復刻やレストア事業といったヘリテージ活動が盛んになっている状況も踏まえると、日本のものづくり、クルマづくり、クルマ文化を国として海外にアピールする好機であり、進めることになった。

2 推進体制

本会議は博物館の世界会議であり、実施に際してはオールジャパンの体制を敷いた方がよいが、日本には国立の自動車博物館が無いため、文化庁傘下の全国科学博物館協議会のもとで進めることと、自動車メーカーとしても、トヨタ自動車だけではなく日本国内全14社の二輪および四輪メーカーが協力し、参加主体として進める体制が望ましく、更にWFFMMが今後も日本で開催される際のサステナブルな仕組みとして、下記2本の柱でWFFMMの体制を整えた。

一つ目の柱：文化庁傘下の全国科学博物館協議会内にWFFMMの日本開催実行委員会を設置する

二つ目の柱：経済産業省傘下の一般社団法人日本自動車工業会(以下自工会)の会員企業14社に上記実行委員会のメンバーになっていただく

なお、国内二輪、四輪メーカーだけではなく、博物館としての知見が豊富な国立科学博物館、名古屋市科学館、トヨタ産業技術記念館にも実行委員会メンバーになっていただくこととした。



図1 WFFMM推進体制

国内二輪・四輪メーカーの具体的なWFFMMの実行委員会メンバーは次のとおりである。(五十音順)

いすゞ自動車(株)、カワサキモータース(株)、スズキ(株)、(株)SUBARU、ダイハツ工業(株)、トヨタ自動車(株)、日産自動車(株)、日野自動車(株)、本田技研工業(株)、マツダ(株)、三菱自動車工業(株)、三菱ふそうトラック・バス(株)、ヤマハ発動機(株)、UDトラックス(株)

今回のWFFMMの日本開催実行委員長は、トヨタ博物館館長(当時) 布垣直昭(トヨタ自動車(株)社会貢献推進部)としたが、ノウハウの蓄積等を考え、次回以降の日本開催に向けたサステナブルな体制とすべく、副実行委員長に、国立科学博物館館長 篠田謙一氏、日産自動車(株)グローバルブランドエクスペリエンス部部長 安藤駿介氏、本田技研工業(株)コーポレートブ

□モーション部チーフエンジニア 朝日嘉徳氏、マツダ(株)総務部部長 谷本康成氏になっていただいた。

*所属、役職は会議当時のもの

3 開催概要と全体スケジュール

WFFMMの本会議は10月30日、31日の2日間、トヨタ博物館にて開催されたが、会議前の10月26日～29日の間に日本のクルマづくりの歴史を事前学習する場として、本田技研工業(株)、日産自動車(株)、マツダ(株)の協力のもと、WFFMM会議の参加者が3社の展示施設を見学いただける事前オプショナルツアーを用意した。

また参加者だけでなく、実行委員会メンバーおよびスポンサー各社様との親交を深める場として、名古屋市のトヨタ産業技術記念館を見学後、ウエルカムパーティーを開催した。

本会議後は会場を富士モータースポーツフォレストに移し、サーキット走行体験やウエルカムセンター、ルーキーレーシングガレージを見学し、モータースポーツを通したいいクルマづくりの取り組みの紹介と、富士モータースポーツミュージアムを見学し、世界と日本のモータースポーツの歴史を紹介した。

最後の締めのイベントとして、富士スピードウェイホテルにおいてフェアウェルパーティーを開催、本大会の総括を行い、出席者は親交を深めた。

(1) オプショナルツアー

オプショナルツアー：10月26日(土)～29日(火)	
日本の自動車メーカー系博物館をめぐる旅～ホンダ～日産～マツダ～トヨタ～	
10月26日(土)	ホンダコレクションホール見学
10月27日(日)	日産ヘリテージコレクション見学
10月28日(月)	マツダミュージアム見学
	広島・宮島観光
10月29日(火)	トヨタ産業技術記念館見学

(2) ウエルカムパーティー

ウエルカムパーティー：10月29日(火)	
16:00～18:00	ウエルカムパーティー

(3) 会議

10月30日(水) *敬称略 所属、役職は会議当時のもの

時間	内容	他プログラム
9:10	世界自動車博物館会議 議長挨拶 WFFMM Michael Penn議長	
9:25	実行委員長挨拶 布垣 直昭、トヨタ博物館館長	
9:40	基調講演：なぜ日本で自動車産業が栄えたのか? 自動車産業の進化：過去、現在、そして未来 藤本 隆宏、特定非営利活動法人 日本自動車殿堂会長	
10:15	質疑	
10:35	休憩	

時間	内容	他プログラム
	テーマ：海外での日本の旧車人気とは	国内二輪、四輪 メーカーの車両 展示・走行披露
10:55	アメリカのラッド・エラを彩った日本車たち Derek E. Moore, Lane Motor Museum Curator of Collections	
11:15	イギリスにおける日本の自動車文化 Jon Murden, National Motor Museum, Beaulieu Chief Executive	
11:35	質疑	
11:55	昼食	
	テーマ：デジタルの活用例、リアルとの使い分け	トヨタ博物館 図書室/貴重資料 室ツアー
13:00	拡張する企業博物館の価値 相川 貴之, いすゞ自動車株式会社 広報部 部長	
13:20	AIの動向 一モーターミュージアムの変革 Wim Van Roy, World Forum for Automobile Museums Chairman	
13:40	質疑	
14:00	休憩	
	テーマ：博物館運営の工夫・悩み	
14:20	遺産価値の再評価 Luca Hoare, Haynes Motor Museum Curator	
14:40	博物館運営の工夫・悩み 朝日 嘉徳, 本田技研工業株式会社 コーポレートプロモーション部 エキスパートエンジニア	
15:00	質疑	
	本日のふりかえり 鈴木 芳一, UDトラックス株式会社 UDエクスペリエンスセンター センター長	
15:20	トヨタ博物館 自由見学	

10月31日(木)

時間	内容	他プログラム
テーマ：日本の自動車メーカーのヘリテージ活動		
9:15	日産のヘリテージ活用について 安藤 駿介, 日産自動車株式会社 グローバルブランドエクスペリエンス部 部長	
9:35	「CLASSIC MAZDA」レストアサービスおよび復刻部品の企画/開発について 谷本 康成, マツダ株式会社 コーポレート事業本部総務部 部長	
9:55	質疑	
10:15	休憩	
テーマ：クルマが文化になりえた背景		
10:35	アメリカの自動車文化入門 Leslie Kendall, Petersen Automotive Museum Curator	国内二輪、四輪 メーカーの車両 展示・走行披露
10:55	自動車が「文化」となる、その将来の展望について Sébastien de Baere, Autoworld Museum Managing Director	
11:15	質疑	
11:35	昼食	

時間	内容	他プログラム
	テーマ：アジアにおける自動車文化形成と自動車博物館の役割	
12:40	アジアにおける自動車産業 Jaja Ishibashi, Toyota Motor Asia (Singapore) Pte. Ltd. General Manager	トヨタ博物館 図書室/貴重資料 室ツアーリ
13:00	オーストラレーシアのコレクションについて Colin Kiel, Australasian Motor Museums Association Chair	
13:20	質疑	
13:40	昼食	
	テーマ：100年前の大変革考察と未来へのメッセージ	
14:00	イギリスの自動車産業:歴史は繰り返されるのか? Stephen Laing, British Motor Museum Head of Collections & Engagement	
14:20	100年前の大変革と未来へのメッセージ Matt Anderson, The Henry Ford Curator of Transportation	
14:40	質疑	
15:00	昼食	
15:15	大会の講評 Wim Van Roy, WFFMM Vice chairman	
15:25	実行委員会からの挨拶 栗原 祐司, 国立科学博物館 副館長	
15:40	トヨタ博物館 自由見学	
16:50	トヨタ博物館からのプレゼント企画(デジタル花火)	
	記念撮影	

(4) 富士モータースポーツフォレスト他見学・フェアウェルパーティー

11月1日(金)・2日(土)

時間	内容
14:00	富士スピードウェイにて走行体験
14:30-17:00	富士モータースポーツフォレストウエルカムセンター、ルーキーレーシングガレージ見学 富士モーターミュージアム見学
18:00-20:00	フェアウェルパーティー

4 発表概要

(1) 大会・発表テーマ

本大会のメインテーマは、「温故知新(Hindsight Insight Evolution)」とし、自動車博物館が、歴史・文化を学び、未来を考える施設であるということを改めて確認し、提案する意味を始めた。またWFFMM本体からは会議テーマ要素として、「Culture & Heritage」「New Trends & Digitization」「Community」「Operation」「Mobility & Future」「Japan-like(日本らしさ)」を織り込んでほしいとの要望があり、事務局での議論の末、次の8テーマに固めた。基調講演は「何故、日本で自動車産業が栄えたのか」。発表は次の7テーマで、「海外での日本車の旧車人気とは」「デジタルの活用例、リアルとの使い分け」「博物館運営の工夫・悩み」「日本の自動車メーカーのヘリテージ活動」「クルマが文化になりえた背景」「アジアにおける自動車文化形成と自動車博物館の役割」「100年前の大変革考察と未来へのメッセージ」であつ

た。ファシリテーター、発表者は実行委員メンバーの二輪、四輪メーカーが参画し、WFFMM本体からの発表推薦者・希望者も含め、基調講演1本と発表14本を実施し、発表後はテーマごとに議論も行った。

(2) 日本大会特有の2つのテーマ発表内容抜粋

発表のうち、本会議特有のテーマとなった、「海外での日本の旧車人気とは」と「日本の自動車メーカーのヘリテージ活動」について以下に要約する。

① 海外での日本の旧車人気とは

Lane Motor MuseumのDerek E. Moore氏は、「Japanese Cars of America's Rad Era」というタイトルで、なぜ1980年代や1990年代の日本車が今、ヨーロッパやアメリカで人気なのか、日本車コレクター53人による調査をもとに発表を行った。日本車は1950年代後半に米国市場に導入され、70年代以降関心を集め、80年代と90年代には燃費やサイズ、品質、値段でアメリカ人のニーズを満たし人気を博した。アンケート調査の回答者のうち、最も多い所有者年代は30代で、日本のポップカルチャーへの興味が高いことがわかった。所有理由はスタイルやデザインの良さが最多で、利用目的はショーやイベント参加が多かった。調査結果から、日本車の優位性はポップカルチャーの影響や品質、独自のデザインに起因し、旧車人気の上昇が示唆された。

National Motor Museum, BeaulieuのJon Murden氏は、「Japanese Car Culture in the UK: A New Chapter for its Motor Museums?」というタイトルで、日本車とその文化がイギリスのモーターファンに与えた影響について語った。1980年代、ホンダ、日産、トヨタなどの日本の自動車メーカーはイギリスに拠点を設立し、進出した。これらの工場はヨーロッパで最も生産性が高く、現在、イギリス自動車生産の47.7%を占めている。日本車に携わった人々は特別な愛情を抱き、英国の大衆文化の一部として認識されている。このため、英国における日本車の役割は、クラシックカーとしてのノスタルジアの価値を高めている。1990年代以降、アニメや映画、ゲームを通じて日本文化への関心が高まり、個人輸入されたJapanese Domestic Market(以下JDM)高性能車も注目されている。映画『ワイルド・スピード』やゲーム『グランツーリスモ』を通じ、JDM車は若い世代の憧れとなった。ナショナル・モーターミュージアムは50周年を迎え、日本車の意義を認識し、若い自動車愛好家にアプローチを図っている。

② 日本の自動車メーカーのヘリテージ活動

日産自動車(株) グローバルブランドエクスペリエンス部 部長の安藤駿介氏は、日産のヘリテージ活用について発表を行った。ヘリテージは企業の歴史やブランドの思いを体現し、信頼を構築する重要な要素である。日産は新型車の発表や周年イベントにヘリテージを活用し、ストーリーを重視している。日産ヘリテージコレクションは神奈川県座間市にあり、最新モデルを展示する「ヘリテージゾーン」も設置されている。2022年には1961年以降のニュースリリースをデジタル化し、約500台の収蔵車両のうち280台が公開されている。コロナ禍前には年間23,000人が訪れたが、歴史情報提供には課題が残る、とした。

マツダ(株) コーポレート事業本部総務部 部長の谷本康成氏は、「CLASSIC MAZDA」レストアサービスおよび復刻部品の企画/開発について、発表を行った。「CLASSIC MAZDA」は、古い車を大切にする文化を育成するために2016年に始まったオーナー向けレストアサービスである。対象の「初代ロードスター」は、ユーザーとの感情的な結びつきが強く、幅広い支持を得ている。作業は申込後、書類審査と現地確認を経て決定し、基本は3ヵ月で完了する。部品供給には純正部品サプライヤーだけでなく他のサプライヤーも協力しており、日本のインテリア部品修復業者の不足も判明。ユーザーとの5回の交流を通じて新たな絆が育まれ、第2弾として3代目RX-7の試験的修復も進行中。今後、古い車の修復にとどまらず、日本の自動車文化を世界に発信し、持続可能な社会に貢献する意向が示された。

各セッションの発表後には、ファシリテーターと発表者2名が壇上で議論し、参加者からの質疑も行われた。海外における日本車の旧車人気については、その背景や現状の受け止め方など新たな知見を得ることができ、日本の参加者やスタッフにとって非常に興味深い内容であった。また、日本の自動車メーカーのヘリテージ活動については、ヨーロッパやアメリカで同様のレストアサービスが行われていないのか、車を世界に貸し出すことがあるのかなど、多くの質問が寄せられ、海外参加者の関心の高さが伺えた。

最後のセッションである「100年前の大変革考察と未来へのメッセージ」については、British Motor MuseumのStephen Laing氏、The Henry FordのMatt Anderson氏から発表があった。それぞれイギリス、アメリカの自動車の歴史を振り返りながら自動車文化の広がりについて話され、最後にふさわしいアカデミックな内容で締めくくることができた。

(3)評価

テーマと発表について、これまで世界自動車博物館会議に参加したことのある複数の参加者に会議直後に会場で直接ヒアリングを行った。コンテンツを詰め込み過ぎたのではないかという懸念があったが、その点を確認したところ、「そんなことはない、とてもよかったです」「全くそんなことはない」という回答が得られた。「間違いなく、これまでで一番良かった会議であった」と述べてくれた人を数名いた。

ただし、発表については良かったものの、同時進行のプログラムである車両走行・展示への参加者数が少なかったこと。またトヨタ博物館自体の見学時間も限られており、全てを見ることができなかった参加者や、そもそも文化館の存在に気付かなかつた参加者もいたことなど、会議全体のプログラムや案内方法については反省すべき点があった。



写真1 メイン会場でのセッションの様子



写真2 メイン会場で発表を聞く参加者の様子

5 その他プログラム

(1) 事前ツアー

日本の自動車メーカー系博物館をめぐる旅 ～ホンダ-日産-マツダ～

このプログラムは、「欧米の多くの自動車博物館関係者にとって日本訪問は一生に一度の体験」、「会議だけでなく日本の歴史文化にも触れる機会を」という、世界自動車博物館 前会議のMichael Penn議長の声をもとに企画された。ホンダコレクションホール、日産ヘリテージコレクション、マツダミュージアムを訪問するとともに、それぞれの地域の観光もセットにしたこのプログラムには30名が参加した。

ホンダコレクションホールは、モビリティリゾートもてぎ内に位置していることもあり、二輪レースを観戦しながら昼食の提供ができた。また、Honda Jetの内覧や新しいモビリティであるUNI-ONEの乗車体験もあった。歴代のF1車両展示もあり、二輪車両のデザインが日本建築を参考にしている点などの説明もあった。創業者の本田宗一郎氏の夢や、そこから広がるホンダの多様な事業について、世界の博物館関係者に再認識していただく機会となった。

日産ヘリテージコレクションでは、展示車両の数やダットサン、歴代のフェアレディの展示があった。そこでは欧州の博物館での日本の旧車展示やレストアに関する相談が参加者から持ちかけられるなど、日本の旧車の魅力が世界に認められている様子や、日本製の旧車維持について欧米での関心の高まりが伺えた。

マツダミュージアムは、工場の敷地内にあることもあり、工場の生産ライン、ヤードやプライベートの港も視察でき、物流含め生産工程をトータルで体感できた。また助光館長から、「ロードスターの顔は下から見ると笑顔に見える。広島から世界の平和を願ってつくられた車である」との説明があった。マツダミュージアムのある広島では、世界遺産である原爆ドーム、広島平和記念資料館、宮島を訪れ、日本の歴史や平和への思いにも触れる機会を提供できた。



写真3 ホンダコレクションホール



写真4 日産ヘリテージコレクション



写真5 広島観光

(2) ウエルカムパーティー

会議初日のイベントとして、ウエルカムパーティーが名古屋市のトヨタ産業技術記念館で開催され、国内外から約120名の参加者が出席した。同館は、トヨタ自動車の創業者である豊田喜一郎の生誕100年を記念して1994年に開館した。この館は、トヨタグループの発祥の地である名古屋市西区に位置し、2023年には35万人の来場者を迎える、インバウンド客も多く訪れる名古屋の代表的な観光スポットとなっている。

パーティー前に開催されたトヨタ産業技術記念館のツアーには55名が参加し、繊維機械館では、参加者はトヨタ生産方式の二本の柱の一つである「自働化」の考え方とそのメカニズムが創業当時の自動織機に既に組み込まれていたことについて説明を受けた。また自動車館では、国産自動車の開発にこだわった豊田喜一郎の思いを原点としたトヨタのクルマづくりの歴史と現在について紹介された。特に、事前ツアーでホンダ、日産、マツダの博物館を訪れた参加者にとって、トヨタのクルマづくりの歴史に関する知識が加わり、本会議に向けた日本の自動車メーカーについての学びの場となつた。

ウエルカムパーティーには、国内外の参加者に加えて多くのスポンサー企業の方々も参加した。布垣実行委員長の挨拶に続き、朝日副実行委員長(本田技研工業(株))による乾杯が行われ、懇談の時間を経て、今回の会議で新議長に就任した世界自動車博物館会議のWim Van Roy氏の挨拶で締めくくられた。



写真6 ウエルカムパーティーの会場



写真7 実行委員会メンバー



写真8 Wim Van Roy氏

(3) 車両展示・走行

10月30日、31日の講演と並行して、トヨタ博物館内の駐車場において、日本の二輪、四輪自動車メーカー13社による36台の車両展示と17台の車両走行を実施した。36台の内訳は、二輪車が13台、四輪車が23台で、1938年～2024年まで幅広い年代の車両である。

時代を代表する二輪車、四輪車を各社が選定し、展示車の歴史的意義や車両選定理由を説明し、車両走行では各社2日間で異なる車両を走行させたり、車両への乗車体験やエンジンルーム公開など、各社様々な工夫があった。

車両展示は、日本初開催の世界自動車博物館会議 日本大会の中で、参加者に日本車の歴史を知っていただくと共に、出展メーカー間の連携を深める場にもなつた。



写真9 屋外展示



写真10 車両走行



写真11 担当スタッフ

表1 展示車両・走行車両一覧

ダットサン 17型フェートン DATSUN 17 Phaeton	A classic blue and white open-top sedan.	ニッサン スカイラインGT-R N1耐久 NISSAN SKYLINE GT-R N1 Endurance	A modern red and white racing version of the Skyline GT-R.
ホンダ RA271 HONDA RA271	A white open-frame racing car.	ホンダ T360 HONDA T360	A light blue pickup truck.
マツダ オートザムAZ-1 MAZDA Autozam AZ-1	A red and green two-door hatchback.	マツダ RX-7スピリットR タイプA MAZDA RX-7 Spirit R Type A	A silver RX-7 with a black roof.
スズキ スズライトSS SUZUKI Suzulight SS	A light-colored two-door sedan.	スズキ 初代ジムニー SUZUKI Jimny LJ10	A yellow open-top Jimny.
ダイハツ ハイゼットキャブ DAIHATSU Hijet Cab	A light-colored pickup truck.	ダイハツ シャレードG10ラリーカー DAIHATSU Charade G10 Rally Car	A yellow and black rally car.
スバル レオーネ4WDエstateバン SUBARU Leone 4WD Estate Van	A green station wagon.	スバル インプレッサ22B-STiバージョン SUBARU Impreza 22B-STi Version	A blue Impreza with gold wheels.
三菱 パジェロ MITSUBISHI PAJERO/MONTERO	A black SUV.	三菱 ランサー エボリューション MITSUBISHI Lancer Evolution	A red Lancer Evolution.
いすゞ 117クーペ ISUZU 117 Coupe	A white two-door sedan.	いすゞ D-MAX Crew Cab 4X4 ISUZU D-MAX Crew Cab 4X4	A red D-MAX pickup.
日野 コンテッサ900スプリント HINO Contessa 900 Sprint	A teal two-door sedan.	日野 コンマース HINO Commerce	A grey van.

トヨタ AB型フェートン TOYOTA Model AB Phaeton		トヨタ 2000GT "ボンドカー" TOYOTA 2000GT "Bond Car"	
トヨタ セラ TOYOTA Sera		トヨタ AXV-II(コンセプトカー) TOYOTA AXV-II(Concept Car)	
UDトラックス Quon GW UD TRUCKS Quon GW		ホンダ RC142 HONDA RC142	
ホンダ カブ号 F型 HONDA Cub F		ホンダ スーパーカブ C100 HONDA Super Cub C100	
カワサキ 650 W1 KAWASAKI 650 W1		カワサキ 900 スーパー4 (Z1) KAWASAKI 900 super4 (Z1)	
カワサキ 500 メグロ K2 KAWASAKI 500 MEGURO K2		カワサキ GPZ900R (Ninja) KAWASAKI GPZ900R (Ninja)	
ヤマハ YA-1 YAMAHA YA-1		ヤマハ DS6-C YAMAHA DS6-C	
ヤマハ RZ250 YAMAHA RZ250		ヤマハ YZF-R1 YAMAHA YZF-R1	
スズキ ダイヤモンド フリー SUZUKI Diamond Free		スズキ Hayabusa 25周年記念モデル SUZUKI Hayabusa 25th anniversary model	

(4) 図書室ツアー

車両展示、走行と同様に、講演と並行して、図書室、閉架書庫、貴重資料室を案内し、トヨタ博物館における図書や資料の保管と活用方法について紹介するツアーを催行した。

リニューアル工事を実施したばかりの「クルマの図書室」は、今回の見学会参加者が最初の来室者で、蔵書数およびそれぞれのコーナーの特徴について紹介した。

閉架書庫(通常非公開)では、主な保管資料と管理方法について紹介した。特に自動車カタログは約12万点の蔵書があり、それらの管理方法について説明したり、蔵書の収集および保管方法や、書架から本を取り出す際の工夫など、実務についての解説も行った。その上で、図書や資料を保管していく上での問題点として、図書を管理する環境や人的被害について挙げ、そのための解決策として、次に案内する貴重資料室の設置意図を語った。

貴重資料室(通常非公開)では、1841年からの主に自動車雑誌を保管する資料室であることを説明し、その設置目的、原本を残すことの意義について伝えた。貴重資料室の書棚は、イギリス・フランス・アメリカ・日本の順に、それぞれの国で発行された雑誌を年代順に並べており、その書棚の前に設置するガラスケースに展示している代表的な雑誌について順番に解説した。中でも「La France Automobile」の1898年4月16日の表紙写真は、当館学芸員がフランスに渡り調査し、自動車の日本初渡来の年を特定した重要な資料であることを紹介した。日本の自動車雑誌の変遷については、その初渡来から時間を経ずに日本初の自動車雑誌が発刊されたことを説明し、その後に発刊された雑誌についてはその時期の自動車登録台数や出来事を照合しながら解説した。併せて、資料の修復に対する考え方や取り組みなどを実例紹介した。

ツアー終了後には参加者から修復や整理方法についての質問が寄せられた。



写真12 クルマの図書室での説明示



写真13 図書室ツアーの様子



写真14 図貴重資料室での説明

(5) 富士モータースポーツフォレスト、富士スピードウェイサーキット走行体験、富士モータースポーツミュージアム見学

11月1日には会場を富士モータースポーツフォレストに移し、富士スピードウェイサーキット走行体験、ウエルカムセンターとルーキーレーシングガレージ視察、富士モータースポーツミュージアム見学会を実施した。

富士スピードウェイサーキット走行体験では、バスに乗車したままサーキットを3周し、各車両には英語での解説員を配置、TGRコーナー、GRスーパークラーケンコーナー、ホームストレートなどコースの特徴を解説した。また車内では、富士スピードウェイホテル、ルーキーレーシングガレージ、RECAMP(コース100R内に2024年9月オープン)についてや、富士モータースポーツフォレストの今後の進化の方向性についても紹介した。

ウエルカムセンターでは、富士スピードウェイ60周年を機に富士モータースポーツフォレストに今後どのような施設ができる、進化していくか、ジオラマを使用し説明した。また、ニュルブルクリンクを走った車両の紹介とともに、豊田章男会長の「モータースポーツを起点としたもっといいクルマづくり」への想いを説明した。

ルーキーレーシングガレージでは、レーシングカーをメンテナンスしている状況を見学し、モータースポーツへの取り組みの理解を深めていただいた。

富士モータースポーツミュージアムでは、フォード博物館をはじめ国内外の自動車メーカーから借用した車両がどのように展示されているかお披露目した。モータースポーツの歴史と進化についてのストーリーや魅力とともに、日本発祥のモータースポーツのドリフト、世界のラリーで活躍する日本車、これからモビリティとモータースポーツの関係を含め紹介した。

また、富士モータースポーツミュージアム視察時間と並行して、同館2階のル・マン展示コーナーにて開催したFIVA(国際クラシックカー協会)殿堂表彰式では、マツダのロータリーエンジン開発を率いた山本健一氏が表彰された。1991年ル・マン24時間レース総合優勝を含め、会議参加者やマツダ関係者とともに盛大にその偉業を称えた。



写真15 富士スピードウェイサーキット走行体験



写真16 富士モータースポーツミュージアム視察



写真17 FIVA殿堂表彰

(6) フェアウェルパーティー

数日間にわたる世界自動車博物館会議の締めのイベントとして、フェアウェルパーティーを富士スピードウェイホテルボールルームにて開催し、講演者、聴講者、実行委員会メンバー約100人が参加した。

冒頭、WFFMM議長であるWim Van Roy氏が本大会を総括するスピーチを行い、我々は自動車遺産への愛によって結ばれたグローバルファミリーであり、ここで築いた橋がさらに強く、より結びついたコミュニティにつながり、自動車文化を保存するという共通の使命を推進していくという決意を語った。

続いて、多くの出席者と親交があり、多くの自動車博物館やイベントで収蔵車両を展示しているGino Macalusoヒストリックカー財団の会長である、Monica Mailander Macaluso氏からのビデオメッセージが放映された。

Macaluso氏はFIA委員の繋がりで豊田章男会長と知り合い、グローバルにモータースポーツ文化を醸成することで意気投合、Macaluso財団が所有するクラシックラリーカーをラリージャパンや富士モータースポーツミュージアムで展示する企画を進めていることを語った。

パーティー前の富士モータースポーツフォレストの見学、Macaluso氏のメッセージに続き、トヨタ自動車の豊田章男会長が登壇、自らの幼少期の体験からクルマやモータースポーツファンになったこと、クルマはただの移動手段ではなく人を自由に、また興奮させてくれるものであり、モータースポーツを他のスポーツと同じように魅力的なものにするために富士モータースポーツフォレストのプロジェクトに取り組んでいることをスピーチした。出席者からは「大変印象的だった」「もっと会長やトヨタのことを知りたい」といった感想を聞くことができた。

パーティーの最後は、布垣実行委員長が締めの挨拶を行い、日本のパーティーの風習である三本締めを実施、出席者は親交を深めながらも、今後のグローバルな自動車文化醸成を共に行っていく決起集会の場となった。



写真18 フェアウェルパーティー会場



写真19 トヨタ自動車(株) 豊田章男会長



写真20 会場の様子

6 その他

(1) 会場設営

トヨタ博物館での2日間は、発表等が行われるメイン議場としてクルマ館2階常設展示室に特設会場を設置した。展示車両を一部撤去し、発表者用のスクリーン(147インチ)、ステージ(W7,200×D2,400×H400mm)、音響設備、聴講用のメモ台付き椅子(155席)、同時通訳(英日)ブース(W1,800×D1,800mm)を設置した。電源について、メイン会場は既存の電源でまかなうことができたが、昼食会場とデジタル花火の電源が不足し、イベント用電源を設置する必要があった。また音響、照明、映像については、当初館内の既存設備を使用する予定であったが、準備をしていく中で国際会議に使用できるレベルではないと分かり、外注、費用の捻出が必要となった。



写真21 メイン会場設置前



写真22 メイン会場設置後

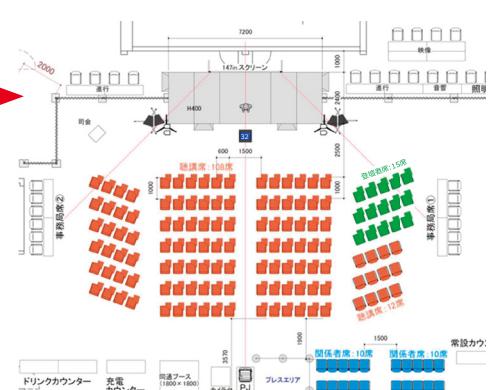
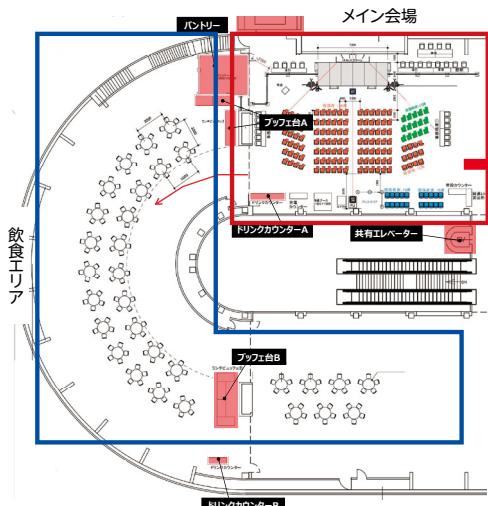


図2 メイン会場平面図



写真23 ステージ



写真24 ステージ袖の音響、照明、映像スタッフエリア

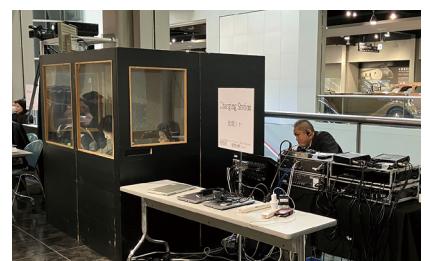


写真25 通訳ブース

(2) 同時通訳

同時通訳についてはインターングループに依頼した。事前に原稿を提供し、前日に通訳者と事務局が打ち合わせを行い、不明点を解消した上で通訳を実施した。メイン会場のみ使用とし、同時通訳レシーバーを120台準備した。同時通訳については、後日参加者から質が高かったとの評価をいただいた。

(3) 参加者サービス

①ケータリング

クルマ館2階に昼食エリアとして30卓(Φ1,200mm)150席(5席/卓)を設け、昼食にはアレルギー、ハラル、ヴィーガンに対応した食事を準備した。食事は名古屋観光ホテルに依頼した。参加者数名にヒアリングしたが「Food is excellent!」との評価をいただいた。



写真26 飲食エリアの様子



写真27 壁に各対応食事表記



写真28 ブッフェ提供の様子

②祈祷スペース

ムスリム(イスラム教徒)参加者のため、礼拝場所をクルマ館1階奥、足を洗うことができるバリアフリートイレの近くに、パーティションで仕切られた簡易の祈祷スペースを設置した。礼拝の方向を示す印を置き、祈祷用マットもあわせ準備した。

③プレゼント企画(デジタル花火)

トヨタ博物館の最終日に、プレゼント企画としてデジタル花火を実施した。投影場所はクルマ館1階の天窓のある吹き抜け部分で、事前に同時刻の視認性を確認したところ、16時50分頃は明るく、デジタル花火がうまく見えないことが分かった。そのため、急きよ天窓部分に暗幕を設置することにした。

当日はすべてのプログラムが終了後、参加者と運営スタッフがクルマ館1階に集まり、デジタル花火を鑑賞した。和太鼓による音楽とともに、実行委員会のメンバーのロゴや協賛社が映し出された後、日本の各地域の名所や風光明媚な風景写真が続き、最後にデジタル花火がいくつも打ち上げられた。参加者からは大きな拍手が沸き起こり、トヨタ博物館での最後を締めくくることができた。



写真29 協賛各社ロゴ表示

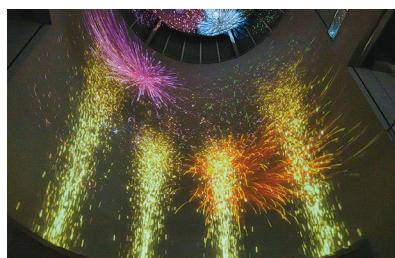


写真30 デジタル花火



写真31 WFFMM表示と富士山

7 参加者

17カ国から約200名が参加した。参加者の国と所属は以下の通りである。

表2 参加者の国と所属

国	所 属
Australia, オーストラリア	Ollies Garage & The Sir Henry Royce Foundation Australia, Ollies' Garage, The Motor Museum of Western Australia, 4Cs' Motor Museum
Belgium, ベルギー	Autoworld
Canada, カナダ	Canadian Automotive Museum
France, フランス	Musee National Automobile Mulhouse Schlumpf
Greece, ギリシャ	Hellenic Motor Museum
India, インド	Sudha Cars Museum
Isle of Man, マン島	Isle of Man Motor Museum
Italy, イタリア	International Federation of Historic Vehicles (FIVA)
Japan, 日本	Fukuyama Auto & Clock Museum
Malaysia, マレーシア	Ministry of National Unity
New Zealand, ニュージーランド	National Transport & Toy Museum
Philippines, フィリピン	R Garage Museum
Singapore, シンガポール	Toyota Motor Asia (Singapore)
Republic of Korea, 大韓民国	Hyundai Motor Company, Toyota Motor Korea
Switzerland, スイス	Saurer Museum Arbon
Thailand, タイ	Inter-Media consultant
United Kingdom, イギリス	British Motor Museum, Motor Hub Warwick, National Motor Museum Trust, Haynes Motor Museum
United States of America アメリカ	LeMay Family Collections, Petersen Automotive Museum, Phillip Sarofim Car Collection, The Henry Ford, Lane Motor Museum, Rolls-Royce Foundation, America's Packard Museum, Automotive Asset Management, Revs Institute

※協賛会社 8人、実行委員関係 104人は日本

8 大会後のイベント

(1) 2024年世界自動車博物館会議 日本大会 オンライン報告会

全国科学博物館協議会のもとで行った本大会を振り返るオンライン報告会を11月9日(土)9時～12時、2024年世界自動車博物館会議 日本大会 実行委員会と全国科学博物館協議会の共催により、開催した。オンラインにて33人、国立科学博物館日本館2階講堂でのパブリックビューイングにて12人、計45人が出席した。



写真32 トヨタ博物館での配信



写真33 国立科学博物館でのパブリックビューイング

(2) 他館、他社との連携と今後

WFFMM日本大会は、日本を代表する国立の博物館を持たない自動車博物館業界にとって初の国際博物館会議であり、国立科学博物館や名古屋市科学館の協力のもと行ったイベントであった。また、個別の二輪、四輪メーカーとの合同イベントはあったが、国内の二輪、四輪メーカー全14社がそろってイベントを行うことも初めてであった。足掛け4年一緒に準備を進めていく中で、各館各社からも、せっかく構築された関係を今後も維持したいという声が多く寄せられ、連携を維持していく試みを進めている。

例えば、国立科学博物館や名古屋市科学館とは、相互の展示協力の他、学芸調査への協力などを検討している。

また、メーカーとは、2025年のクラシックカー・フェスティバルにおいて、車両展示や走行披露への協力の他、各社社員と参加者とのコミュニケーションや賞典の設定など、毎年多くの参加者と観客を集めるクラシックカー・フェスティバルのフォーマットを活用して、クルマ文化の醸成の場としていただくことを試みている。さらにはトヨタ博物館の企画展示における展示車両の協力など、合同で展示を行うことも進めている。

※『2024年世界自動車博物館会議日本大会 報告書』はトヨタ博物館公式HPのアーカイブズに掲載

<https://toyota-automobile-museum.jp/archives/wffmm/>

企画展「日本のクルマとわたしの100年」

期間：2024年9月7日(土)～2025年1月13日(月) 場所：文化館2階 企画展示室

與語 美紀子(学芸・企画2グループ)

1 企画のねらいと背景

社会のさまざまな領域で多様性(ダイバーシティ)への対応が求められている今、自動車博物館として、クルマと多様性の関係を歴史的観点から紐解く企画展を検討した。その中で今回は、これまで見過ごされがちだった「日本におけるクルマと女性のかかわり」に焦点をあて、新たな発見を提供し、ダイバーシティを尊重したすべての人とクルマのより豊かな関係を考える機会となるようこのテーマで開催することにした。

この企画展の最初のきっかけは、クルマに興味がない人にも「トヨタ博物館」や「クルマの歴史」に親しみや興味をもつもらうにはどういった企画がよいだろうか、何かいつもとは違った切り口での展示をできないだろうかというところからであった。色々調べていくと、実は男性と同じように女性も古くからクルマとかかわってきていたということを知り、クルマと女性とのかかわりで知り得たことをより多くのお客様にお伝えしたいとの思いが強くなった。また今までに当館で開催した企画展に同様のテーマがなかったこと、企画展担当者が全員女性であったことからも本企画を推進することとなった。

2 実施内容

(1) 展示構成

女性が社会の変化とともにどのようにクルマと接してきたかという歴史を紹介するとともに、今後も愛される“クルマ”をつくり続けるためには、多様な人々の深く広い知恵と熱意が必要であるというメッセージを伝える場となるようにした。

①ユーザーとしての女性、②クルマ文化と女性、③開発者としての女性、といった観点から100年にわたるクルマと女性のかかわりを5つのゾーン、車両9台で紹介した。

表1

	ゾーン名	車両名
1	女性ドライバーの誕生	—
2	女性ドライバーの広がり	ダットサン 16型 セダン (1937年)
3	モータースポーツに挑む女性たち	いすゞ ヒルマンミンクス (1960年) ダットサン フェアレディ 1200 (1961年)*
4	女性をターゲットとしたクルマの一般化	ダットサン ブルーバード 1200 ファンシーデラックス (1963年)* スズキ アルト 麻美スペシャル (1985年)* ダイハツ ミラ (1982~85年)* トヨタ WILL Vi (2000年)
5	女性エンジニアの活躍、そしてさらなる多様性の時代へ	マツダ デミオ (2014年)* レクサス UX250h (2021年)

* 当館所蔵ではない車両

(2) 展示車両

ゾーン1は歴史資料に掲載されていた車両に近しい実車を展示することができなかつたため、パネルのみでの紹介となつたが、それ以外のゾーンはパネルで紹介した内容に関連する車両を展示した(表1)。

今回展示した9台のうち、当館所蔵車は4台、残りの5台は国内自動車メーカー・自動車博物館様のご協力により展示することができた。当館はトヨタ車以外の車両も所蔵しているが、企画内容にそつてゾーンごとに説明にふさわしい展示車

両の選定を進めると、各社様のご協力なくして展示を実現できないことを目の当たりにした。当館の企画趣旨にご理解いただき、快くお貸ししてくださった皆さまに心より感謝している。

(3) 展示レイアウト

①メインビジュアル

メインビジュアルは広報の肝であり、企画展のもつ力を底上げし、ターゲット層に魅力を感じていただけるようにするためのものである。今回大きな特徴は①メインビジュアルのデザインをイラストで表現したこと、②出来上がったメインビジュアルを展示室のウェルカムボードとしたことである。展示するクルマとともにその時代をイメージする風景や女性もイラスト化することで、より身近にかつ柔らかな印象をあたえるものにした。展示室入口でのウェルカムボードとの連動は、チラシやポスターなどの広報物で見た風景の一部になれる楽しみを提供するものでもあった。



図1 メインビジュアル



写真1 ウェルカムボード



写真2 トリックアート撮影

②展示ゾーン

右の会場レイアウト(図2)のようにゾーン1～5を順番にご覧いただけます。展示ゾーンの区分も分かりやすいように5色のカーペットでエリアを分けた。また、メインビジュアルに入れた女性のイラストも等身大サイズで説明パネル横に展示了。

特にゾーン1はその時代に該当する展示車両がなく文字と写真のみ、またゾーン5についても取材から得た紹介したい内容がたくさんあり、読み応えのある充実した説明パネルになった反面、文字が多くて読んでもらえないのでという心配もあったが、足をとめて読み込んでくださるお客様も多かった。人は物事の歴史や背景を知ると興味や関心が増すものである。ただクルマを見るだけではなく、自分たちが知り得たことを少しでも多くのお客様に説明パネルを通して、「新たな発見」に繋げたかった。

また、海外のお客様にも日本のクルマと女性の関わりについて知っていただくためすべてを翻訳した。英語併記については、QRコードをスマートフォンで読み取っていただけるようにした。QRコードの表示が会場レイアウトのパネルにしかなく分かりにくかったため、入口に個別に案内を出すなど、会期中に改善も行った。

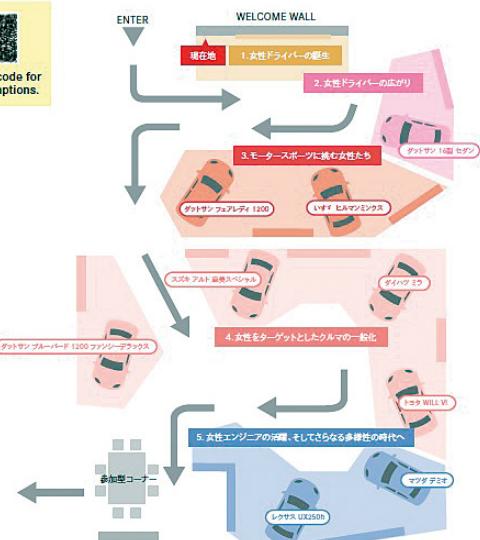


図2 会場レイアウト

<ゾーン1> 「女性ドライバーの誕生」

日本で最初に自動車を運転した女性が誰であったかは分からぬいため、1917年1月に東京自動車学校の第一期生に女性がいたということや同年7月に日本で最初の女性免許証所持者となった女性のことを取り上げた(写真3・4)。その当時の男性が「女運転手無用論」を発表し、それにまた毅然と反論していたことなども紹介。戦前の日本で乗用車を所有できた人はごくわずかであったため、運転手が女性の一般的な職業として認識されていない状況では、女性にとって免許を取得するインセンティブが働きにくかったことも想像に難くない。そのような中で運転手を志し、活躍した女性たちは、時代に先駆けたパイオニアだった(写真5)。



写真3 ゾーン1-1



写真4 ゾーン1-2



写真5 ゾーン1-3

<ゾーン2> 「女性ドライバーの広がり」

日産自動車(株)が1936年にはじめた「ダットサン・デモンストレーター制度」を紹介(写真6)。数百人の応募者の中から選ばれた4名のデモンストレーターたちは、運転技術や自動車機構についての知識を身につけた後、それぞれに与えられたダットサン(写真7)で家庭訪問し、試乗を勧めたり運転の指導を行うなどして女性の自動車愛好家を作ることを実践した。

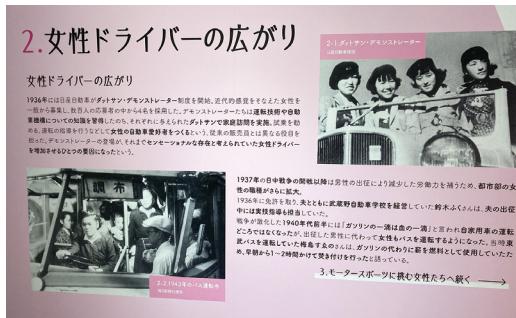


写真6 ゾーン2-1



写真7 ダットサン 16型 セダン (1937年)

<ゾーン3> 「モータースポーツに挑む女性たち」

1950年代からモータースポーツに参戦していた女性を紹介。モータースポーツの歴史で知られる豪州ラリーや第1回日本グランプリなど、日本のモータースポーツの幕開けとされた頃から女性ドライバーも参戦していたのである(写真8、10、11)。男性に交じって参戦したラリーや女性だけのラリーとして誕生した「ヒルマンエコノミーラン」なども紹介。

このゾーンでの展示車両 いすゞ ヒルマン ミンクス(写真9)は、当館常設展示では1950年代に海外との技術提携により生産を開始した車両として展示していたが、同じ車両でも切り口が違うと展示内容がまったく違って面白いものである。また、このゾーンでは、女性がより一層モータースポーツを楽しみ興味をもつきかけづくりとして、現在進行形の「KYOJO CUP」を取り上げ、より多くの方に知っていただく機会とした。



写真8 ゾーン3-1



写真9 いすゞ ヒルマンミンクス (1960年)



写真10 ゾーン3-2

写真11 ダットサン フェアレディ 1200 (1961年)
*日本自動車博物館所蔵

<ゾーン4> 「女性をターゲットとしたクルマの一般化」

3つの要素をまとめて展示。まずははじめに1961年に初めて女性向け特別仕様車として販売されたファンシードラックスを紹介。サンバイザーには化粧ポーチをつけ、アクセルペダルはハイヒールでも運転しやすいように長くするなど女性向けアイテムが30点以上搭載され画期的だったが、60年代前半の乗用車普及率は10%未満であり、女性専用にクルマを購入することはまだまだ難しかった(写真12-14)。2つ目はアルトとミラ。1980年代に入り社会で活躍する女性が増え、自動車メーカーも女性を意識するようになり、カタログも女性ファッション誌のような写真やキャッチコピーで彩られているのが印象的であった(写真15-17)。3つ目のWiLL Viは21世紀における新たな消費スタイルや新市場創出をめざし、女性に限らず自分の感性やこだわりを大切に商品選びをする層を意識した斬新なモデルとして登場したことを紹介し、時代とともに変化してきたクルマと女性が見てとれる(写真18、19)。



写真12 ゾーン4-1

写真13 ダットサン ブルーバード 1200 ファンシードラックス (1963年)
*日産自動車株式会社所蔵

写真14 運転免許保有者数の推移



写真15 ゾーン4-2

写真16 スズキ アルト 麻美スペシャル (1985年)
*スズキ株式会社所蔵写真17 ダイハツ ミラ (1982-85年)
*ダイハツ工業株式会社所蔵

写真18 ゾーン4-3



写真19 トヨタ WiLL Vi (2000年)

<ゾーン5> 「女性エンジニアの活躍、そしてさらなる多様性の時代へ」

実際の開発者の声を聞き、届けたいとインタビューを試みた。マツダ(株)のチーフエンジニアを務められた竹内都美子さん、上藤和佳子さん、トヨタ自動車(株)の加古慈さんへのインタビューを実現し、女性視点の開発が取り入れられることの意義や現在のクルマづくりの現場においては性別にかかわらず多様な人材が活躍していることを紹介(写真20-23)。この最後のゾーンには、クルマづくりにおける女性活躍を紹介することで誰かの背中を押すきっかけとしたい、また多様な人々が集まりクルマづくりに携わることで生み出される価値についてを皆さんに考えていただく機会にしたいという想いを込めた(写真24)。



写真20 ゾーン5-1

写真21 マツダ デミオ (2014年)
*マツダ株式会社所蔵

写真22 ゾーン5-2



写真23 レクサス UX250h (2021年)



写真24 エピローグ

(4) 参加型の展示

企画展示室でお客様にも参加して楽しんでいただけるものを3つ用意した。

- ①「ウェルカムボード」をトリックアートにした写真撮影スポット
- ②「のってみたいクルマ」を自由に書いて掲示(参加者:約4,400名)
- ③「わたしとクルマ」としてお客様の写真を募集し、掲示(参加者:125名)

1つ目はメインビジュアルにて紹介した通り、ウェルカムボードをトリックアートにした写真撮影スポット(写真25)で、手に持って撮影できる6つの吹き出しサイン(写真26)を用意した。ここに来たという記念撮影を楽しみながら行つていただける場を提供するとともに、少しでも本企画展について興味をもっていただき、拡散のきっかけにもなればと企画したものである。入口に列ができる混みあうほど、多くのお客様に楽しんでいただくことができた。

2つ目の「のってみたいクルマ」にはお子様だけでなく、老若男女問わず、また多くの海外のお客様にもご参加いただくことができた(写真27)。子どものころからずっと憧れていたクルマや当館に展示されているクルマといった現実にあるクルマをはじめ、空を飛ぶクルマやこんなクルマがいいという夢のクルマまで、それぞれの方のそれぞれの思いがつまつた多種多様なものが集まった(写真28)。かなりの力作もあり、予想を上回る多くのお客様がクルマについて考える時間を持ち、参加してくださった。

3つ目の「わたしとクルマ」は、お客様にクルマと一緒にご自分が写っている写真をお持ちいただくと入場料が半額になるという企画であった。事前にホームページやチラシ等で告知をしていたため、会期初日からお持ちいただいた方をはじめ、アルバムから一生懸命探してくださった方、海外のお客様からの応募もあった。また、60年前のヒルマンエコノミーランに実際に出場した女性ドライバーご本人も当時の写真をお持ちになりご来館くださった。掲示写真が増えていくたび、それぞれのクルマ愛を感じることができた。掲示した写真をきっかけに、別のお客様がその時代を懐かしみ、クルマ談義に花を咲かせているのを目にすることができた。直接ではないが、写真(クルマ)を通して、お客様とお客様がつながっているようであった。参加してくださったお客様にもお礼を伝えたい(写真29)。



写真25



写真26



写真27



写真28



写真29



図3 プレイリスト

(5) 展示室内のBGM

展示室の音楽にも「クルマとわたし」にこだわり、「日本の女性アーティストが歌うクルマが登場する曲」として、幅広い年齢層に自然と口ずさんでいただける11曲を選んだ。

3 広報活動

(1) リリース

企画展開始の約1ヵ月前にプレスリリース配信サービスを活用しての配信およびこれまでに当館を取材してくださった方々にご案内した。今回は自動車や観光関係等々のカテゴリに加えて、ターゲットとして女性や若者が閲覧することの多い雑誌やウェブサイトに取り上げてもらえるようなメディア選択を実施した。また、女性モータージャーナリストの方々に個別にコンタクトを試みるなども行った。

その結果として、リリースをもとにした記事掲載数は2023年度3回の企画展平均120件を大きく上回る181件となり、取材は6件あった。そのうち女性モータージャーナリストが2名、女性新聞記者が2名であった。女性という言葉をついていることに違和感を覚えるが、いずれも女性がまだ少なく、そうした取り上げ方をされることが多いのだともおっしゃっていた。今はあえてこうしてとりあげることをきっかけとして世の中に語りかけているが、いずれは職業や役職等に性別(特に女性)をつけても言ふことがなくなることが当たり前になる時代がくるといい、くるであろうと取材中に語ったことを覚えている。



図4.5 日本のクルマとわたしの100年 チラシ 表・裏

(2) SNS投稿への反響

公式SNSでの投稿は7件公開した(表2)。リリースから企画展会期1ヵ月で連投したが、その後ゾーン紹介や車両紹介などを継続的に紹介していくことができなかつたのは残念であり、今後の反省点でもある。X、Instagram、Facebookによって、表示回数や反応数が多かったものは異なるが、いずれも車両搬入時の動画はやはり反応がよかつた。普段見ることができないバックヤードや企画展の裏側を知ることができる機会となるため人気があるものと思われる。車両を展示室に搬入する様子の動画は昨年から公開を始めたが、閲覧数や反応がよい投稿のため今後も継続していきたい。

表2

投稿日	投稿内容	X(Twitter)		Instagram		Facebook	
		表示回数	反応数	閲覧者数	反応数	閲覧者数	反応数
2024年8月7日	リリース(チラシ両面の画像を投稿)	85,037	347	3,515	333	5,935	389
2024年9月2日	「わたしとクルマ」コーナー紹介	11,469	127	3,871	333	5,214	297
2024年9月6日	車両を展示室に搬入する様子(動画)	45,026	597	7,501	569	4,551	395
2024年9月7日	本日スタート(企画展示室の写真)	6,923	180	2,976	399	4,816	343
2024年9月27日	女性とドライバーの日(企画展示室の写真)	29,620	289	2,556	289	3,636	235
2024年12月2日	「わたしとクルマ」コーナー 応募期間延長のお知らせ	7,364	168	2,971	331	3,527	331
2025年1月7日	企画展終了まであと1週間	5,728	124	3,441	396	9,885	396



図6 X(リリース)



図7 Instagram(車両を展示室に搬入)

図8 Facebook
(企画展終了まで1週間)

(3) 有料広告

今回の企画展はリリース配信先でも述べたようにいつもの層に加えて、女性や若者をターゲットとしていたため、東海エリアを中心に販売される情報誌への掲載を実施した。さらには雑誌だけでなく、その媒体が保有するウェブサイトとSNSツールを活用、連携しての情報発信を試みた。

まず企画展が開催された翌10月初旬にウェブサイトとSNSに投稿し、その後11月に雑誌掲載。もちろん企画展を中心に紹介したが、雑誌は2ページのうち1ページは企画展、1ページは館内の見どころを紹介。常設展示のクルマ館をはじめ、文化館のクルマ文化資料室、ショップ、レストラン、カフェでの楽しみ方を女性目線での取材記事とした。当館とはあまり縁のなかった方々にも、ふとしたタイミングで手にした雑誌から今回の記事が見開きページで自然に目に入り、興味をもってもらいたいというのが狙いであった。

ウェブサイト投稿では、短期間で閲覧数を獲得できた点や特に平均ページ滞在時間が1分以上と比較的長めで、ユーザーが記事に対して関心をもっていることがうかがえた。この点においては、ターゲット層への情報提供が効果的であったと考えられる。また、SNSではInstagramのリール動画へのリーチが高い数値となり、視覚的なコンテンツでユーザーの関心を引いた。今後もリール動画は有効と思われ、サムネイルのテキストに思わずユーザーがタップしたくなる情報を入れるなどの工夫を加え、実施したい。

今回の広告が来館までどれだけ繋がったのかすべてをはかることはできないが、少なくとも認知拡大には繋がった。後のアンケート結果の認知経路で選択してくださった方があったことはよかったです。



写真30 KELLY 2025年1月号 No.433



図9 KELLY Instagram

皆さまのご感想をお聞かせください。

How did you like the exhibit?
Please scan the QR code and share your thoughts.



図10 アンケートパネル

4 来館者からのフィードバック

(1) アンケート結果

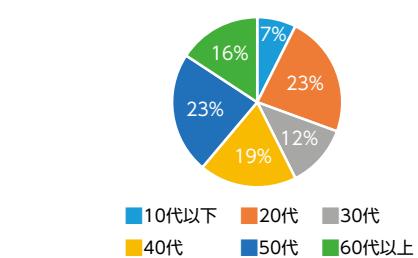
アンケートは会場の最後にQRコードをパネルに表示し、会期中実施した。近年は海外のお客様のご来館も多いため、アンケートは日英併記とした。

回答数は108と少なく、来場者のごく一部の回答となるが、グラフの通りであった。年代や居住地は前回のお蔵出し展の際の比率と似ているが、女性と海外のお客様の回答を多く得られた。また企画展を事前に知っていたかという問い合わせには半数の方が知っていたと回答。事前に知っていた方についての認知経路は当館公式ウェブサイトが圧倒的な結果と

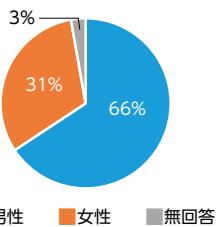
なった。今後は当館公式サイトで知り得るまでの経緯を深掘りしていきたい。

またアンケート回答者の半数以上の方が記述式の感想にも入力してください。

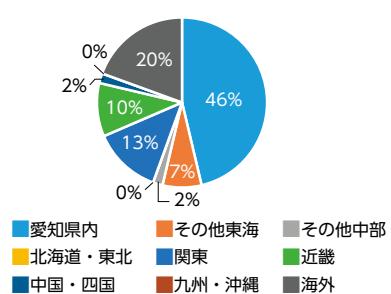
グラフ1. 年代



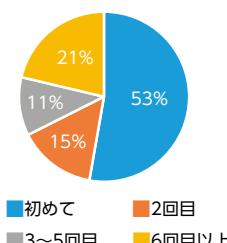
グラフ2. 性別



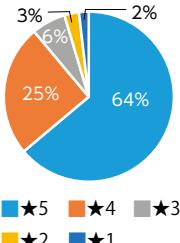
グラフ3. 居住地



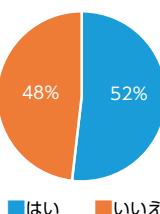
グラフ4. 来場回数



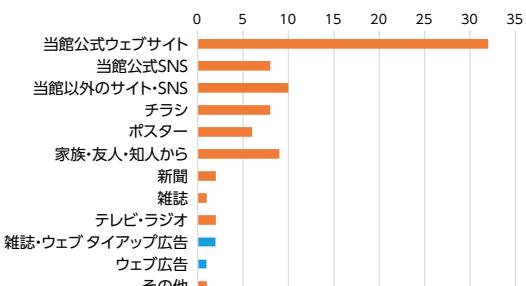
グラフ5. 満足度



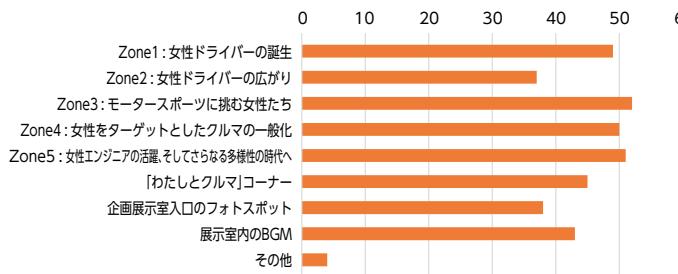
グラフ6. 企画展の事前認知



グラフ7. 認知経路 (n=56・複数回答可)



グラフ8. 展示のよかったところ



グラフ9. お気に入りの車両

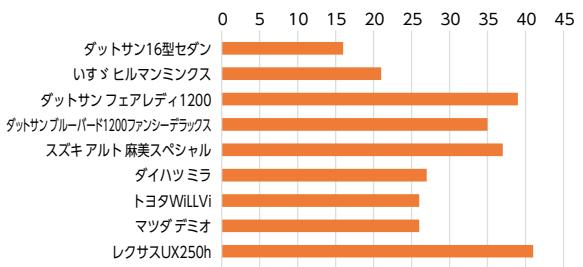


表3

新たなる発見や感想	女性に脚光を浴びせたクルマの企画はなかなかないので、勉強になりました(40代男性)
	どの時代の女性も前を見て進むことの強さを持つ人たちがいたことで、今日までに繋がっているのだなと思いました(20代女性)
	運転免許制度が始まった頃から女性ドライバーがいたということを知って驚きました(40代男性)
	第1回日本GPIに女性ドライバーが居た事にビックリ(60代男性)
	自分が生まれる前の古い時代の自動車と日本人女性の関わりが分かり、とても興味深く拝見しました(60代男性)
	とても参考になりました。クルマって単なる移動手段だけでなく、文化や流行の発信機でもあるのだなと思いました(40代男性)
	クルマと社会の関係に向き合うテーマ設定が、非常に素晴らしい。
	「女性が活躍できなければすべてのマイナリティが活躍できない」という最後のインタビューパネル「多様性の時代へ」に感動した(40代男性)
	車産業は男性という昔の常識を覆し女性が活躍していることを再認識しました。
	これからは多様性の時代であり、性別や国籍を問わず活躍の場を広げる時代であることも理解できた。
	女性の社会進出、多様性の時代を感じられる良い企画展だった(20代男性)
	女性が自ら道を切り拓いて行く逞しさを感じました。職業運転手然り、レーサー然りです。
	『女性仕様車』は女性だけじゃなく、使う人に優しいクルマなんじゃないかな?と思います。
	今は、乗るみんなに優しいクルマになったので『女性だからこのクルマに乗るのは…』と敬遠することも少なくなった気がします。
	好きなクルマに乗れるのは、ステキなことだと思います(40代女性)
その他	女性とクルマというと、男性と比べたときにちょっと遠い印象があったけど、ずいぶん昔から活躍されている人がいて、カッコいいなと感じました。
	なかなか触ることのない歴史について知ることができて、説明文も一字一句読み込んでいました。面白かったです(40代男性)
	女性という切り口でしたが、改めて多様性や壁の存在について考えさせられました(60代女性)
	Great opportunity for us to know other history of japan cars. Arigatou Japan (50代男性)
	Very nice exhibit! Interesting to see how early on Japanese car manufacturers were considering features specifically for women - we could only hope that would continue today! As a female engineer myself, it was nice to read about the female engineering section. I think we all hope to someday live in a world where exhibits like this seem "silly" but for now this is very important and nice to see! Very good from the other half of the museum that had so many statues of men. (30代女性)
	女性の他の分野での社会進出との対比があると面白いと思った。自動車と飛行機など(40代男性)
	クレージュのホイール、L900ムーヴのハローキティー、ワゴンRのミキハウス等々もっと懐かしい物を色々展示してほしかった(40代男性)
	私と車のスナップ写真を見て、人と車の歴史を垣間見ることができます。特に昔の写真は見ていて楽しく、写真一枚一枚にとても素敵な思い出があったと思います。写真について各自コメントなどを付けたらもっと面白い展示になるのではないか?女性に限らず、車にまつわる人の経験や人生こそ、見ていて面白く共感でき車への愛情が増す機会になると思います(40代女性)

(2) 会場での声

ご来館いただいたお客様から直接当館スタッフがお伺いしたコメントの中から抜粋。

表4

広報	企画展の屋外看板が可愛らしいデザインで目を引いたのをきっかけに来館しました(女性)
車両	テレビで企画展が紹介されているのを見て来館しました(ご夫婦)
車両	ダットサン フェアレディ 1200が展示されていることに感激しました(男性)
車両	ダットサン ブルーバード ファンシーデラックスの発売当時の様子をお聞かせくださいました(男性)
その他	トヨタ WILL Viに乗っていた。後方の特徴的なデザインが特に気に入っていました(男性)
その他	博物館と聞くと展示を見るのみという印象でしたが、撮影スポットがあるのですね。家族で来館した記念になりました(女性)
その他	参加型の企画がとても良いですね。写真を探しに再来館しようと思います(ご夫婦)
その他	展示テーマに合ったBGMが流れていて、見学がより一層楽しくなりました(女性)



写真31



写真32



写真33



写真34



写真35



写真36

5 おわりに

企画展とは、常設展示では展示しきれていない車両やクルマに関する歴史などを新たなテーマで掘り下げ、自動車文化の醸成に貢献し、クルマファンづくり、来館者促進につなげるのが狙いである。今回はひとつの切り口として、クルマと女性の歴史をテーマとし、特別クルマ好きではない方や女性にもより興味をもっていただけるような展示や発信に努めてきた。

私たちが知り得た女性ドライバーの歴史は多くの方々にも驚きを与え、女性をターゲットにしたクルマでは懐かしさを共有した。「モビリティのあり方が大きく変化しようとしている今、人々に必要とされ、愛される“クルマ”をつくり続けるためには、多様な人々の深く広い知恵を集め、熱意をもって取り組まなければならない。」という私たちからのメッセージが多くの方に共感を得られ、誰かの背中を押すきっかけとなることを願いたい。

■展示協力

いすゞ自動車株式会社、株式会社インタープロトモータースポーツ、佐々木千代野様、自動車史料保存委員会、スズキ株式会社、ダイハツ工業株式会社、日産自動車株式会社、日本自動車博物館、マツダ株式会社、三樹書房(50音順)

■参考文献

- ▶『昭和自動車史:日本人とクルマの100年(別冊1億人の昭和史)』毎日新聞社(1979)
- ▶佐々木烈『日本自動車史II:日本の自動車関連産業の誕生とその展開』三樹書房(2005)
- ▶佐々木烈『日本自動車史 写真・史料集』三樹書房(2012)

- ▶『婦人週報 3(29)』婦人週報社(1917)
- ▶山陽新報社 編『開国八十年史』山陽新報社(1933)
- ▶資生堂『資生堂社史:資生堂と銀座のあゆみ八十五年』資生堂(1957)
- ▶数見周穂『自動車需用者の為めに』竜洋社出版部(1920)
- ▶昭和館学芸部『夢と希望と困難と～昭和の働く女性～(昭和館特別企画展 展示図録)』昭和館(2014)
- ▶『21世紀への道:日産自動車50年史』日産自動車(株) (1983)
- ▶日産自動車(株)公式サイト <https://www.nissan-global.com/JP/HERITAGE/> (2024年3月にアクセス)
- ▶澁谷道尚 編『日本アルペンラリーの足跡:全18戦とその後の展開』三樹書房(2019)
- ▶「いすゞニュース」、「いすゞしんぶん」(1959-1965)
- ▶『日本の名レース100選 061:’63 第1回日本GP(サンエイムック AUTO SPORT Archives)』三栄書房(2010)
- ▶『日本グランプリ・レース:最初の10年(別冊CG)』二玄社(1983)
- ▶KYOJO CUP公式サイト <https://drivingathlete.com/about-kyojo-cup/> (2024年3月にアクセス)
- ▶警察庁「運転免許統計 令和5年版」<https://www.npa.go.jp/publications/statistics/koutsuu/menkyo.html> (2024年3月にアクセス)
- ▶自動車史料保存委員会 編『スズキ:鈴木自動織機創立から100年』三樹書房(2022)
- ▶小堀和則『ダイハツ:日本最古の発動機メーカーの変遷』三樹書房(2007)
- ▶トヨタ自動車(株)公式サイト <https://global.toyota/jp/detail/12005490> (2024年3月にアクセス)

■企画展「日本のクルマとわたしの100年」

企画・推進・広報：大石 典子・與語 美紀子・菅沼 未奈(学芸・企画2グループ)

制 作：株式会社乃村工藝社

I:1年間の学芸・企画活動 3

新たな活動の柱! オートモビル カウンシルへの出展

期間:2024年4月12日(金)~ 4月14日(日) 場所:幕張メッセ

山田 卓弥(企業・車文化室 室付)

1 出展の経緯

2016年のオートモビル カウンシル(※以下AMC)の開始以来、トヨタ自動車及びトヨタ博物館は継続的に出展してきた。AMCのコンセプトである「Classic Meets Modern」に合わせて、2016年の初回からカローラ50周年など、周年を迎えた車種の新旧車両を展示するなど、企業広報軸で広報部が出展してきた。2018年からは、出展の狙いをフルマ文化醸成軸に転換した事により、以後トヨタ博物館として出展するようになった。これにより、トヨタ博物館の認知度が低い、関東圏でのプレゼンス向上策として10年間続けてきた、当館主催のクラシックカーフェスティバル in 神宮外苑を取りやめることになった。

2021年から2023年までは、設立段階であった富士モータースポーツフォレストの告知目的で出展することとなり、富士モータースポーツミュージアム(2022年10月開業)が、その一員として出展した。このように、目的の変化に合せ、出展の形態を変えてきた。2024年は再び、トヨタ博物館が目的・体制を改めて、出展を再開した。具体的には、トヨタ博物館単体としての出展では無く、社内各部署で進展中の旧車レストアやパーツ供給等の活動をAMCにて一体的に展示し、継続的に出展することで、進化を続けているフルマ文化醸成を強くアピールし、プレゼンスを上げることを目標に据えた。



写真1 2024年AMCの全体の様子



写真2 2016年カローラ50周年



写真3 2018年元気日本1960's



写真4 2023年フォレストとしての出展

<主な類似イベント>

イベント名	東京オートサロン (TAS)	大阪オートメッセ (OAM)	ノスタルジック 2デイズ(N2d)	オートモビル カウンシル(AMC)
開催メディア	三栄	交通タイムズ社	芸文社	カーグラフィック
開催月	1月	2月	2月	4月
集客	26万人	21万人	4万人	4万人
開催地	幕張	大阪	横浜	幕張
対象	カスタムカー	旧車	新旧車両	
トヨタ出展者	GR	GR、KINTO	GR、KINTO	GR、KINTO、GPC、トヨタ博物館
主要な大規模出展者	自動車メーカー各社、アフターパーツ各社	マツダ、富士モータースポーツフォレスト		トヨタ、ホンダ、三菱、マツダ、ポルシェ
顧客像	ドレスアップ、チューニング、MS、キャンピングなど、幅広いジャンル、幅広い年齢層	旧車、レストア趣味層		高所得者層が多く、3割近くが25年超えの車を保有

2 出展メンバー

初代パブリカや初代クラウンを社内教育用のレストアとして取り組むグローバルプロダクションセンター(※以下 GPC)。トヨタ2000GTをはじめ、供給が途切れた部品の再販売に取り組むGRヘリテージパーツ(※以下 GR)。旧車をレストアし、レンタカーとして提供する事で、旧車を通じたコミュニティ形成をめざすVintage Club by KINTO(※以下 KINTO)の3者である。そしてトヨタ博物館がまとめ役となり「トヨタ クルマ文化研究所」と銘打って出展した。

＜仲間を増やす＞

トヨタ博物館内で完結するのではなく、クルマ文化醸成に関わる諸活動を統合し、訴求力を高めた活動として紹介することを目的とした。それぞれ、独自の活動をしてきた関係部署や関連会社の賛同を得て、連携する事がポイントとなった。

2019年頃から、トヨタ社内の上郷・下山工場で人材育成を目的に古いパブリカのレストアを開始し、継続性ある活動となる過程で、「技能者養成所」、「GPC」と変遷し、トヨタ博物館もパーツ情報などの相談を受けていた。「もっと世の中に発信する場があれば」・「やがてはトヨタ博物館の所蔵・コレクションにしていきたい」という議論の中で、出展が決まった。

次にGRだが、既にさまざまな供給が途切れた車両の部品供給を開始しており、他のイベントへの出展も行われていたが、GRの目的にも合致しているとして、出展が決まった。

KINTOは旧車レンタルを開始しており、トヨタ博物館の駐車場でのファンミーティングを開催するなどの繋がりもあったが、車両のレストアはトヨタ社内、新明工業、部品メーカーのご協力を得ている広範な活動でもあった。布垣館長、大塚主査以下でお声かけすると、発表の場を求めていたこともあり即応してくださり、出展はスムーズに決まった。

3 活動を通じての学び

＜内容・テーマ＞

レストアなど古いクルマに接することを教育的な面、あるいは余暇・文化的な面などにフォーカスして取り組んでいる3者の活動をまとめる立場のトヨタ博物館が、共通の発表の場でどのように統合し、どのように展示するかが当然ながら難題だった。方向性、展示の見せ方を具体的な図面、展示パネルなどに落し込む段階で、喧々諤々の議論となった。

- ①造作会社はこれまでAMCでの経験豊富な電広エイジエンサー
- ②トヨタ博物館は布垣館長、大塚主査、山田がまとめ役として参画
- ③メンバーはGPC、GR、KINTOでスタートし、レストア自体を担当した電動パワトレ開発部、新明工業、部品メーカーとも相談を継続したが、参加を見送った

＜各社の展示＞

当初予定に対して、何度か展示車両の変更をしたが、各社のアピールポイントはクリアだった。

- ①GPCは、トヨタの匠の技を注ぎ込み「オリジネート レストレーション」としてまるで新車のような1958年式トヨペットクラウンRSを紹介
- ②KINTOは、旧車レンタルを楽しめるコミュニティ Vintage Clubを紹介(展示は1988年式初代MR2 スーパーチャージャー、2024年にEV化したAE86 BEV Concept)
- ③GRは、生産中止となった純正部品を復刻させる『GRヘリテージパーツプロジェクト』を紹介

展示は、各社の車両を展示することと関係する部品やパネル類の展示を計画した。しかしながら、全体のアピールポイントの明確化が必要との議論に進展した。布垣館長より活動の趣旨に鑑み「クルマ文化研究所」というタイトルを記載することの提案がなされ、全メンバーが理解、合意した。また、改めて参加メンバーの活動内容の見せ方・説明の仕方も議論となった。結果、リリース・プレスカンファレンスはトヨタ博物館、部品展示はGPC、GRが独自で準備。各部署説明資料、Q&A資料は連携して作成した。

図1 会場立体平面図



4 会場での実際の展示

AMCでは、初日の4月12日(金)を内覧日と定義し、開始直後、各社でプレスカンファレンスを実施する。トヨタはトップバッターとしてプレスカンファレンスを実施。トヨタとしての展示が再開し、かつクルマ文化醸成への具体的アクションを伴ったメッセージ性を持った展示は来館者に好意的に受け入れられ、会場の雰囲気を引き締めるとともに新たな可能性・関心を強めることができたと思う。

3日間の展示中、松任谷正隆さん・小山薫堂さんのレポートや様々な自動車ジャーナリストの取材を受けた。みなさん強い関心を持って聞いてくださいました。GPCのトヨペットクラウンRS、KINTOの初代MR2、AE86 BEVは展示する車両としてのインパクトとしても十分だった。

AMCの特徴として、プレミアム指向、高所得層の来場者が比較的多い事があげられる。クラウンをじっとご覧になつていての方に聞くと、お父様がかつて同じ型のクラウンを所有されており、いつも後部座席に乗っていたことを思い出されたそうである。

総じて、クルマへの強い好奇心、知識、造詣の深さを感じた。開催地が千葉・幕張であり、関東の方々が大半だが、トヨタ博物館の認知度は高く、会話したほとんどの方が、トヨタ博物館に関心を寄せていた。関東でのイベント開催の有効性を強く感じた。また集客数は、3日間で約4万人とほぼ、横浜のノスタルジック2daysと同じ規模だが、スペースがゆったりとしていて、激しく混雑することも無く、来場者はゆったりとクルマ、展示品、イベントを楽しんでいた。添付のアンケートのように、ニーズ・関心の高さ・何をやっているか?理解・関心が高まり、トヨタ博物館が発信する「クルマ文化」が幅広い層のお客様に定着していることを確認できた。そして、AMCでの展示を問わず、「トヨタ クルマ文化研究所※」の諸活動は、お客様や世間から待ち望まれる活動に成長する可能性を持っていることを感じた。

※2025年の出展より、「TOYOTA CLASSIC(トヨタ クラシック)」に改名して活動のグレードアップを図っている。



写真5 プレスカンファレンス



写真6 松任谷正隆氏、小山薰堂氏インタビュー



写真7 いのうえこ一いち氏、明嵐正彦氏



写真8 20年超の車両を販売した三菱自動車工業



写真9 新旧の車両を展示する日産自動車

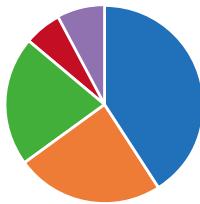


写真10 ホンダはモータースポーツを訴求

【参考データ】お客様の声(アンケート結果)(N=90)

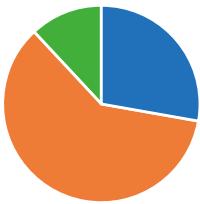
グラフ1 トヨタのクルマ文化への取組みで、あなたが良いと思われるものは何ですか?(複数選択可)

■トヨタ博物館の展示、企画展など	75
■富士モータースポーツミュージアムの開催	44
■トヨタ博物館クラシックカーフェスティバル	39
■オーナーズミーティング	11
■その他クルマ関連イベント	14



グラフ2 トヨタがもっと力を入れるべきと思われるものは何ですか?(複数選択可)

■オーナーズミーティングなどの支援	31
■部品サプライの充実	67
■その他	13



5 開催後のまとめ

2024年の出展は、当初の目標は達成できたとして、次年以降への課題に触れたい。

GRは古いクルマと新車を組み合わせて展示し、充実させようとしている。GRは既にモーターショー形式のイベントとしてジャパンモビリティショー、東京オートサロンなどに出展しているが、より小規模ながら、お客様像とマッチするような発表の場をイメージしているとのことである。トヨタ自動車東日本(株)の古い車両の保存活動についての相談。また、四国自動車博物館での町興しイベントへトヨタ博物館とGPCメンバーが一体となって参加するなど、2024年のAMC参加が起点と言える新たな交流・活動も始まっている。

われわれのゴールは全てのお客様がクルマ文化を愉しみ、クルマファンが増加し、関係する活動が拡がり、深くなるという循環サイクルが周るようになる事である。そのためにはさらに幅広い連携を模索し、クルマ文化の認知向上に繋がるコトづくり、仕掛けづくりが必要と考えている。

■オートモビルカウンシル2024

企画・推進：大塚 善秀、山田 卓弥(企業・車文化室 室付)
制 作：(株)電広エイジエンシー

I:1年間の学芸・企画活動 4

夏休み乗車体験展示 「夏の思い出 レア車に乗って記念撮影しよう!」

期間: 2024年8月1日(木)~ 9月1日(日) 施工: 内製 ・入口看板のみ(株)乃村工藝社

平田 雅己(学芸・企画1グループ)

1 はじめに

夏休み期間中の子ども&ご家族向けイベントの一つとして乗車可能な展示車両を文化館企画展示場に設置し、来館者へのホスピタリティ向上とともに将来のクルマファン醸成のための原体験の場を提供する。

2 展示車両

展示車両については、以下の項目に注意して収蔵車の中から4台を選定した。

- ・トヨタ救急車ハイメディック(1997年)
- ・チヨロキューモーターズ Q-CAR Qi キューノ(2004年)
- ・トヨタ メガクルーザー JAF災害対策指揮車(1997年)
- ・トウクトゥク(年式不明)

- ①車両への乗り込み時の安全性(お客様が触れる部分に突起物や鋭角な箇所などが無い事)
- ②車内の各パーツで破損しやすいものが無い事(部品の破損や盗難等の可能性がある場合はパネル製間仕切り等が設置出来ること)
- ③車内への乗り込み、着座によるシート表皮の擦過破れなどの懸念の少ないシート素材、あるいはカバーが可能なもの
- ④車体サイズが比較的小型でお子様でも気軽に乗り込めるもの
- ⑤日頃目にする機会の少ない珍しい車両



写真1 トヨタ救急車ハイメディック



写真2 Q-CAR Qi キューノ



写真3 トヨタメガクルーザー



写真4 トウクトゥク

3 開催中の会場の様子

ご家族連れの皆様にはご好評で、子どもはもとより大人も各展示車両に乗り込み、記念写真に収める姿が多く見られた。短期間のイベント開催でも多くのお客様に楽しんでいただけたことは有意義だった。



写真5 設営状況



写真6 会場の様子1



写真7 会場の様子2



写真8 会場の様子3

I:1年間の学芸・企画活動 5

ちいさな図書室

期間:2024年8月4日(日)～10月27日(日)の毎週日曜日

小室 利恵(学芸・企画1グループ)

1 背景

2024年6月より、リニューアル工事のために文化館3階の図書室を閉室するにあたり、図書室の蔵書に触れる機会として開催した。また、お客様の図書の選び方や、本の取り方について、リニューアル後の書架の配置の参考にしたいと考えた。

2 実施内容

図書スタッフが選書したおすすめの図書や、乗り物絵本、自動車カタログなど約1,200冊を、文化館1階TINY STUDIO内のテーブルや棚に配架した。どのような図書に関心があるのか、どのような並べ方だと手に取りやすいのかを検証するため、ジャンルが異なる本をそれぞれ揃えて、置き方も平置き・面置き・縦置きなどを試した。お客様は面置き状態の、表紙が見える図書にまずは足が向き、それから全体を見渡すという傾向が高いと感じた。

3 お客様の様子

開催時は図書スタッフ1名が必ず常駐するようにし、お客様の対応を行った。お客様からは図書室のレファレンスと同様に、カタログや整備書に関する問合せが多く、それらの資料への関心の高さがうかがえた。図書室の再開を希望する声も多く、待ち望んでいただけていることに嬉しさを感じると共に、お客様の期待に応えられる図書室にしたいと気持ちが一層引き締まった。



写真1 ちいさな図書室 室内



写真2 お客様の様子

I:1年間の学芸・企画活動 6

エントランス展示

①堺市ヒストリックカーコレクション連携展示 ②ラリージャパン連動ラリーカー展示

期間：①2024年9月3日(火)～10月20日(日) 場所：クルマ館1Fエントランス

期間：②2024年11月12日(火)～12月22日(日) 場所：クルマ館1Fエントランス/文化館1Fエントランス

軽部 真一(学芸・企画1グループ)

1 エントランス展示の狙い

常設展示車以外でお客様に楽しんで頂いたり、時事イベントを盛り上げるため、ご寄贈車やバックヤード収蔵車を期間限定でエントランスに展示している。2024年度は、他の施設や個人コレクションから貴重な車両を借用しエントランス展示を試みた。

2 「堺市ヒストリックカーコレクション」連携展示

堺市ヒストリックカーコレクションは、1920年代後半から80年代前半のBMWを中心に構成されている。堺市では、市の魅力発信のため貸出を行っており、量産車初のターボチャージャーを搭載した「BMW 2002 Turbo」を借用した。また、コレクションには代理店輸入車と並行輸入車があり2台並べての展示となった。

- ・BMW 2002 Turbo E20型(1973) <代理店輸入車>
- ・BMW 2002 Turbo E20型(1973) <並行輸入車>



写真1 展示風景

お客様の反応

「BMW 2002 Turbo」は大変人気で、この車両を見るために来館したお客様が多かった。

また、代理店輸入車と並行輸入車の違いをじっくりと探したり、長時間かけて写真撮影したり、車両解説パネルを書き写すお客様も見られた。

展示目的の一つでもある、堺市ヒストリックカーコレクションという魅力的な施設があることを知ることができたというお客様もみえた。

3 「ラリージャパン」連動ラリーカー展示

ラリージャパン2024に連動し、トヨタ自動車でも所有していない貴重なラリーのワークスカーを國江仙嗣様の協力を頂いて、下記トヨタのワークスカー4台と日産のワークスカー2台を借用し、1970～80年代の国産車のラリーの歴史を語ることが出来た。

- ・トヨタ セリカ 2000GT RA21型/Group4(1976)
- ・トヨタ セリカ TA40型/Group2(1979)
- ・トヨタ セリカ 2000GT RA45型/Group4(1979)
- ・トヨタ セリカ 2000GT RA63型/Group4(1982)
- ・日産 スタンザ PA10型/Group2(1979)
- ・日産 240RS S110型/GroupB(1983)



写真2 展示風景

また、お客様にラリーの歴史に興味を持って頂くことを目的に、それぞれの車両のラリーの歴史における位置付けを解説パネルで紹介した。

特に「セリカ TA40型/Group2(1979)」はTTE(トヨタ チーム ヨーロッパ)から初の女性コンビとしてヒマラヤンラリーに参戦した車両であり、展示期間中に開催していた企画展「日本のクルマとわたしの100年」の女性とクルマとの関わりに繋がるエピソードを記載した。また、ラリー反対派による投石などの妨害を受けフロントガラスを破損しながらも入賞を果たした、というエピソードと共に当時のポスターと雑誌を展示した。



写真3 展示風景

お客様の反応と所感

展示機会が少ない個人所有の貴重なラリー車ということで熱心に見入るお客様の姿が多かった。

特にRA63セリカ以前のセリカラリー車はトヨタ自動車として所有していないため、トヨタのラリー車の歴史を語る上で意義のある展示となつた。



写真4 展示風景

I:1年間の学芸・企画活動 7

ディーノ 246GTS(1973年 イタリア)の修復について

期間：2024年9月6日(金)～12月9日(月) 施工：新明工業(株)

平田 雅己(学芸・企画1グループ)

1 はじめに

このディーノ246GTSは、新規収蔵車として2022年に入手し、翌2023年にフェラーリ専門業者にてエンジン回りの駆動系不具合の整備を実施した。機能面での整備が完了し走行確認も済ませた後、バックヤードで保管していたが、当館に収蔵する以前の1998年に海外でフルレストアが施工されてから26年を経てボディの塗装劣化等が進行していることから、ボディの板金補修を含む全塗装作業に着手したので報告する。

【ディーノ246GTSについて】

ピニンファリーナがデザインした流麗なボディを纏い、1969年に誕生したミッドシップ・スポーツカー「ディーノ206GT」の発典型。豊かな抑揚を持つスタイルは、歴史上最も美しい自動車の1台と言われている。12気筒以外はフェラーリと呼ばない当時の流儀に従い、フェラーリとは名乗らず、フェラーリの創業者エンツォ・フェラーリの愛称アルフレードの愛称「ディーノ」を車名としたことで知られる。今回修復を行つた246GTSは1972年のジュネーブモーターショーでデビュー。246GTのスタイルはそのままに、脱着式“タルガトップ”でオープンエアドライブを堪能できるスポーツカーとして登場し、1972年～1974年の間に合計1,274台が製造された。



写真1 ディーノ 246GTS

2 事前調査による補修範囲の決定

まず車体の損傷状態(凹み、亀裂、傷など)の確認調査を行い、補修範囲を絞り込む。外観上、目につくのはフロントバンパー左右の不均一な位置関係。左が下がり気味?取付け位置の関係か?(写真2)

ボディの凹み:右フロントフェンダー、リヤフェンダーに何らかの接触痕が見受けられる。(写真3・4・7)



写真2 車体前面視



写真3 右フロントフェンダー



写真4 右リヤフェンダー

ボディ全周にわたり擦過傷(線傷)が見える。清掃時の拭き傷や、擦れなどと推測。更にリヤハッチのボディ側コーナー部分には塗装亀裂も発生している。(写真5)

ドアハンドル部周辺の擦り傷(写真6)など、操作の伴うパーツ類周辺の傷みが目立つ状況である。



写真5 リヤハッチ部塗装亀裂



写真6 ドアハンドル部周辺キズ



写真7 右ドア凹み

3 補修作業に着手

ボディに装着されているヘッドライトをはじめ各部品類を取外し、補修準備を進める。



写真8 ボディ外観



写真9 バンパーステー不均等



写真10 エンブレム用穴

気付いた点:ボディパネルへの穴あけ加工等の施工が雑な印象を受けた。恐らくは手作業によるものと思われるが穴そのものが真円ではないのでドリル穿孔後に手作業で加工したものと思われる。また、フロントバンパーの取り付けステーの位置が左右で異なり、上下方向で約8mm程度差異があるため目視でも明らかなズレが判別できる。当初考えていた、バンパーの変形に起因するものではなかったが、製造時なのかレストア作業時の仕業?なのか今となっては知る由も無い。

4 ボディ全塗装作業完了

補修先のボディショップにてボディ単体・各パネルの塗装完了状態を確認し、組付け作業へと移行した。



写真11 塗装完了(フロント)



写真12 塗装完了(リヤ)



写真13 フード・ルーフ類

5 部品装着、完成

電装品類を順次組付け、完成検査を迎えた。現車確認には当館整備スタッフも帯同し、各部の仕上がり具合をチェックした。塗装の一部に線傷や不均一な箇所があり、手直しを行った後に完成納車となった。



写真14 組付完了



写真15 フロントバンパー周り



写真16 タルガトップ装着状態

6 おわりに

今回の一連の補修作業にご尽力いただいた新明工業(株)の関係者の皆様には紙面を借りてお礼申し上げる。完成後は、まずエントランスで整備完了車両としてお披露目展示を予定しているが、時期については現時点では未定。

当館ホームページ等での告知を予定しているのでご覧いただきたい。

■参考文献

- ▶WORLD CAR GUIDE 3 FERRARI (株)ネコ・パブリッシング
- ▶Osprey AutoHistory FERRARI DINO 206GT, 246GT>S Pininfarina V6 road cars IAN WEBB
- ▶FERRARI DINO 1965-1974 Compiled by R.M. Clarke BROOKLANDS BOOKS

I:1年間の学芸・企画活動 8

「クルマづくり日本史」の研修活用

場所：クルマ館2F展示室等

鳥居 十和樹(学芸・企画1グループ)

1 本年度の開催実績

「クルマづくり日本史」は日本の自動車産業の歴史を紹介する展示室であるが、制作担当者としては誰よりも現在自動車産業に従事している人に訪れてもらいたいという思いがある。彼らに、自分が身を置く産業がどのような成り立ちで現在に至るかを知り、現在取り組んでいる業務や自社そして産業に誇りをもってもらいたいとの願いをこめて制作したものだからである。このような経緯から2022年のオープン以来トヨタ自動車だけでなく他の自動車メーカーにも機会あるたびに社員研修での活用を呼びかけてきた。その結果、これまで多くの要望をいただき毎年20件以上の研修を行ってきた。

表1は2024年度の研修実績である。合計138名に対し23回の研修を実施した。

企業名	研修名／目的	開催数	参加者
Mazda Toyota Manufacturing US	社長赴任前研修	1	1
日産自動車	グローバルデザイン本部研修	1	5
トヨタグループ18社	新任役員研修	14	84
日本自動車工業会	制作領域幹部視察	1	3
トヨタ紡織	部次長研修（品質保証部門）	1	9
デンソー 先端技術研究所	部室長研修	2	15
TOPPAN	役員塾	1	9
マツダエース	ミュージアム担当者研修	1	3
ミライテクノロジーズ	役員部次長研修	1	9

表1 2024年度研修実績

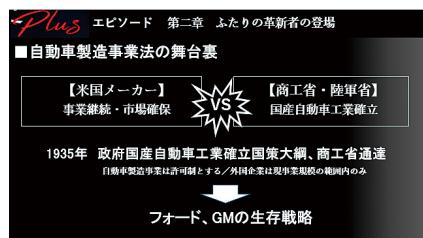
2 研修内容

標準的な研修カリキュラムの例を表2に示した。展示室では5つのコーナーを網羅しながら「物語」と「人物」については特に史実の裏側のエピソードを加え、役員が対象の場合には経営判断の背景を掘り下げるなど参加者の特性に合わせた解説を心掛けている。また「系譜」では産業政策が企業の合併・連携を促したケースや他のコーナーの内容を絡めながら説明している。

車両解説では1920年代から終戦までを取り上げ、国内市場が米国車に席巻された経緯や国産車量産のはじまりについて展示室での解説を実車で確認する目的でカリキュラムに加えている。

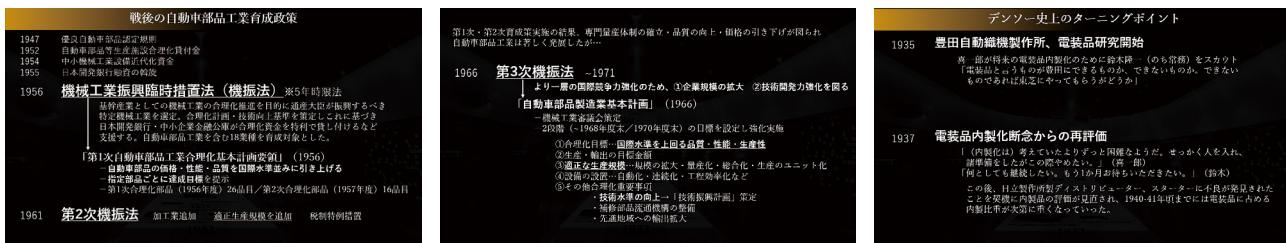
展示室での説明終了後は研修室で質疑に対応しながら参加者の関心に応じて補足解説を行っている。

図1 補足解説テーマの例



また、自動車部品メーカーの研修の場合には展示室では取り扱っていない部品産業政策など関連史実を取り上げて説明し、具体的に自社との関連を想起してもらうようにしている。

図2 補足解説テーマの例(部品メーカー)



研修室でのサマリーでは補足解説と質疑応答からディスカッションが始まるケースも多いが、参加者の多くが役員を含む上級マネジメントの場合も多いため、議題は自動車産業史に限らず、明治の産業勃興の背景や経営論、時には文化人類学的なものにまで飛び火することがあり、担当者としてはなかなか気の抜けない時間だ。研修前には準備が欠かせないが、この下勉強が展示室での解説に幅を持たせ、新たな補足解説のテーマにもつながっている。

図3 事前調査サマリーの例



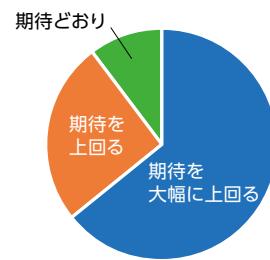
3 研修参加者からのフィードバック

本年度のトヨタグループ新任役員研修参加者に対するアンケート結果をグラフ1に示す。さいわい8割を超える参加者から「期待を上回る」との回答をえた。中には自社社員を対象とした新たな研修を要望されることもあり、日程の調整がつく限りこうした声には応えるようにしている。2024年度は合計4件実施した。

表3は自由意見からの抜粋である。

グラフ1 参加者の評価

研修全体の評価 N=79



視点	意見／感想等
国の産業政策	自動車産業の育成時に国の関与が大きかったことが印象的だった。現在、我々は多くの国々で自動車生産を行っているが、その国の発展と我々との共存を真摯に、かつ、戦略的に考えておかなければならぬ。
	自動車に未来を託し、大きな壁に立ち向かった先人の想いや行動など、自動車誕生の正しい史実に触れることができ、大変有意義であった。また裏話も大変興味深かった。
	産業界全体および各企業の視点、国の役割など、多角的に知ることができた。またそうした歴史背景に合わせて当時の実際の車を見ることでリアルな像として理解できて大変勉強になった。
創業者	特に印象に残ったのは、鮎川義介さんと豊田喜一郎さんの比較でした。日本の自動車産業におけるふたりの革新者がどのように異なるアプローチで業界を発展させたかを明確に示しており、非常に興味深いものでした。
	日本の自動車産業の発展を、各社創業者の視点からも比較しながら当時の人間関係など深い背景を踏まえ解説頂いた点は、非常に客観的で新鮮な学びでした。ご担当者の情熱と拘りを強く感じることができ、極めて有意義でした。
企業系譜	日本の自動車産業全体の歴史を知ることが出来て非常に勉強になりました。またメーカーの系譜図では自社の複雑な生い立ちや源流、思想など過去から現在の会社の形を改めて考えるきっかけになりました。今後の経営戦略を考える上でも貴重な時間でした。
自社での活用	日本の自動車産業の歴史を国の関与も含めて知ることができました。自本部の部長クラス全員に見てもらおうと思っています。各メーカーの歴史を知ることでトヨタグループの歴史ケース勉強会にも役立つと思います。

表3 研修参加者の自由コメント

全体として展示室の企画意図を理解した感想・意見が多く、特に産業の形成が必ずしも企業や創業者たちの奮闘だけではなく国の強力な保護・育成政策が大きなドライブとなって達成されたことを記憶に残ったと言う人も多く、制作担当者としては企画意図が伝わっていることに安心した。また、参加者に合わせた深掘り解説や展示室で取り上げている人物の経営姿勢や考え方の違いといった解説も好評のようだ。

4 おわりに

「クルマづくり日本史」企業研修は展示内容の解説だけでなく、スペースの制約などで展示内容には取り上げられなかつた興味深い史実を知つてもらえる好機であるほか、制作担当者が最も伝えたい人たちに直接話しかけフィードバックを得ることのできる貴重な場でもある。研修準備で調査したことがまた新たな研究テーマを与えてくれることもある。今後も産業史の語り部として真摯に取り組んでいきたいと思う。

写真1 研修風景



クルマの図書室 リニューアル

開設日 : 2024年11月3日

小室 利恵(学芸・企画1グループ)

1 はじめに

2024年11月3日に、従来の「図書室」は「クルマの図書室」(以下、図書室)として名称も新たにリニューアルオープンをした。それまでの図書室はお客様あるいは図書スタッフの安心・安全部面に課題があり、また室内環境が現代から取り残された雰囲気のため、利用者層はクルマ好きの男性などのリピーターが主体となり、新たな客層の来室を促せていなかった。

図書室のリニューアルに向けての話し合いは2023年1月から始まり、図書スタッフ全員で図書室の安全部面やその他の課題出しを行った。それから社内や関係各所への説明を重ねながらコンセプトを固め、関係者の皆様の協力の元、短期間ではありながらリニューアルに漕ぎつけることができた。

なぜリニューアルが必要だったのかは2023年度の年報で触れているため、今回はリニューアルに向けての施工内容や新しい図書室の様々な仕掛けについて記述する。



写真1 今までの「図書室」の入口



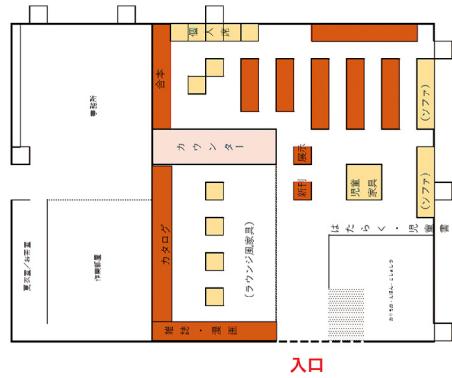
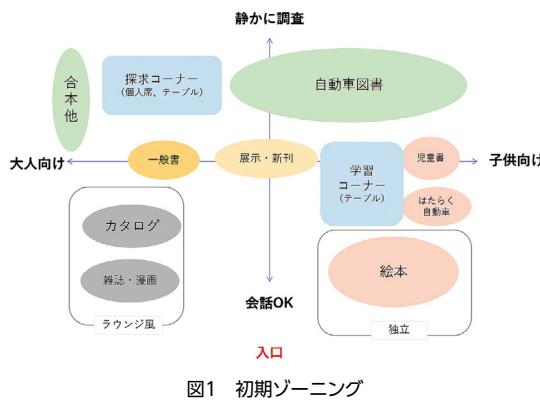
写真2 新しい「クルマの図書室」の入口

2 どんな図書室にしたいのか

(1) ゾーニング案

リニューアルを実施することが決まった段階で最初に構想したのは図書室のゾーニングだった。それまでの図書室も緩やかなゾーン分けはしていたが、あくまでも分類番号順に並べた結果であった。後に、雑誌や漫画などの手に取りやすい図書を置く「ブラウジングコーナー」を作るなど小規模なリニューアルは行ったが、書棚の移動などはできず、大胆なゾーニングの検討は難しかった。また、手前に設置した「のりもの・えほん・としょしつ」からは子供たちの声が発せられ、その延長線上に個人席が配置されているため、静かに過ごせる空間はなくなっていた。

そのため、お客様にとって使いやすい書棚の配置や、従来の図書室で不便に感じている部分を洗い出し、新たなゾーニングを検討した。そして最初に描いたゾーニングが図1である。話し声を考慮し、大人向けと子供向けで空間を分け、入口から奥に従うにつれディープな自動車図書の世界に浸れるゾーニングとしたが、これを元に担当者間の意見交換会を行ったところ、「これでは単に今の書架を並び替えただけ」「どういう図書室にしたいのかが明確になっていない」など、発想の転換が必要だという指摘があった。



(2) コンセプト

そもそも図書館とは図書を収集して保管・閲覧する場ではあるが、そこから当図書室がどう脱却し、「そこにしかない図書室」を目指すための独自のコンセプトを打ち出す必要があった。そこで、単に書架に図書を並べるだけではなく、活用するたびに新しい発想が浮かぶ・ひらめきが得られる場の提供を目指すことになった。例えば、社内外の方が当館に何かを得るために見学に来た際、図書室で広報や展示等の企画の発想など、参考になる資料を「興味を持たせる仕掛け」と「閲覧に耽けることができる雰囲気」で提供したいと考えた。その仕掛けとして、「ひらめきコーナー」という一角をつくり、クルマ以外の様々な分野の書籍／資料(カタログ、画集、クルマ雑誌、ライフスタイル誌、漫画等)を展示し、思わず手に取ってみたくなる本をメインに選書することを決めた。ここに来れば“何かを発見できる”“また来たくなる”図書室を目標に、特にカタログに関しては、日本で一番カタログが閲覧可能な場を目指し、没入でき、尚且つ、一緒に来室した仲間同士でカタログを広げながら、クルマ談義ができる空間づくりをすることにした。

これらの内容を満たすためのレイアウトを検討するにあたり、大枠として「共感・交流」というコンセプトを打ち出した。このコンセプトの意図は、「何かを発見できる」「また来たくなる」図書室に向けて、お客様に共感していただける本を選書し、また、本を提供するだけに留まらず、本を通してお客様同士やスタッフとの交流を促していくことである。「ひらめきコーナー」や「カタログ」などの図書を中心に据え、共感・交流する様子を想像しながら、より具体的な空間を検討していくことになった。

(3) コンセプトから考えるレイアウト

「共感・交流」というコンセプトに沿って、改めて書棚の配置検討を行うことにした。今現在の来室者層は主にリピーターや年間パスポートを所持しているクルマが好きな男性、及び“のりもの・えほん・としょしつ”目当てに来室する小さなお子様を連れた家族であるが、新しい図書室では、それらの層に加えて、若者、特に女性のお客様に入りやすく、共感いただけることを目指した。それらの新しいターゲットに向けたレイアウトとするためには、室内に入ってきたくなるような、入口からの眺めだと考えた。

若い層の来室者の入室を促すきっかけとして、入った瞬間の目に飛び込むポイントを4つ準備することにした。図3がその指示図である。まず、中央に“シンボル書架”を配置し、新着図書や企画展示に注目が集まるようにした。その奥にある“カタログのディスプレイ書架”を引き立たせて奥への誘導を図り、また入口の右手には“ひらめきコーナー”を設置して本との出会いを生み出そうとした。“のりもの・えほん・としょしつ”は現行のままとした。

同時に、ラフな立面図(図4)を描き、配架したい本の冊数と書架の棚数を計算した上で、その棚数と全体の要望を図3に書き込み、施工業者へ提出した。この時点での主な要望は、今回のリニューアルで必ず改善すべき安全に関することと、大枠の仕様である。大雑把な要望ではあるが、この時点で関係者と共有した仕様は基礎として最後まで引き継がれることとなった。例えば「入口はガラス扉の引き戸または蛇腹とし、手指を挟まない仕様及び部屋の中が見通せるようにする」「書棚と書棚の間は車いすが通れる幅を確保」「図書室の床はクッションフローリング」などであった。そして最も強く要望したのが「カタログの収納は5,000冊程度とし、レコード店のような書架にする」ということだった。この図3の要望書を提出した時期が竣工のちょうど1年前(2024年9月末)である。

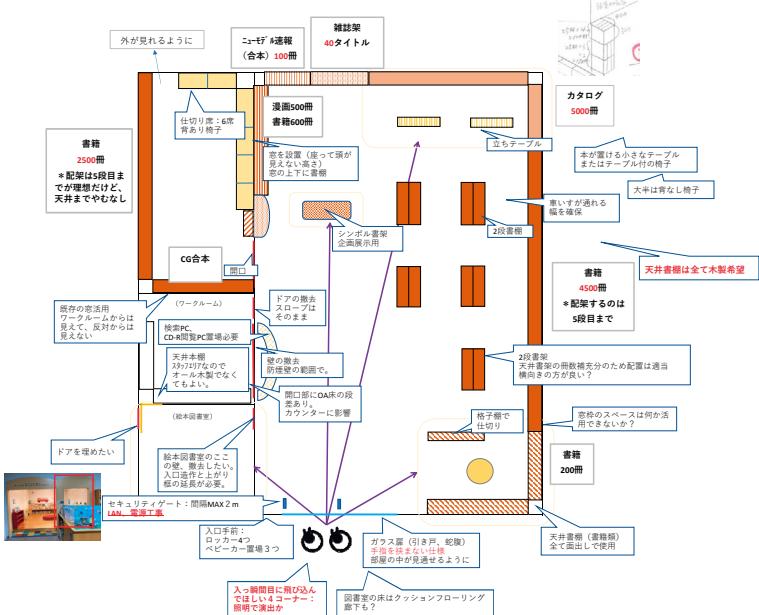


図3 初期の要望書

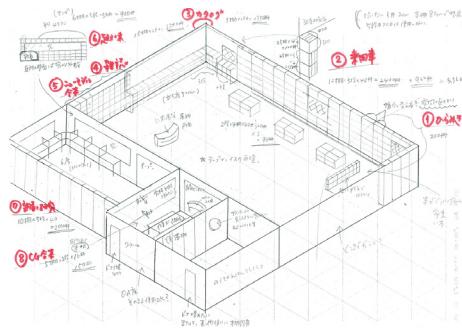


図4 書架数を算出するためのラフ図

3 施工內容

(1) デザインコンセプト

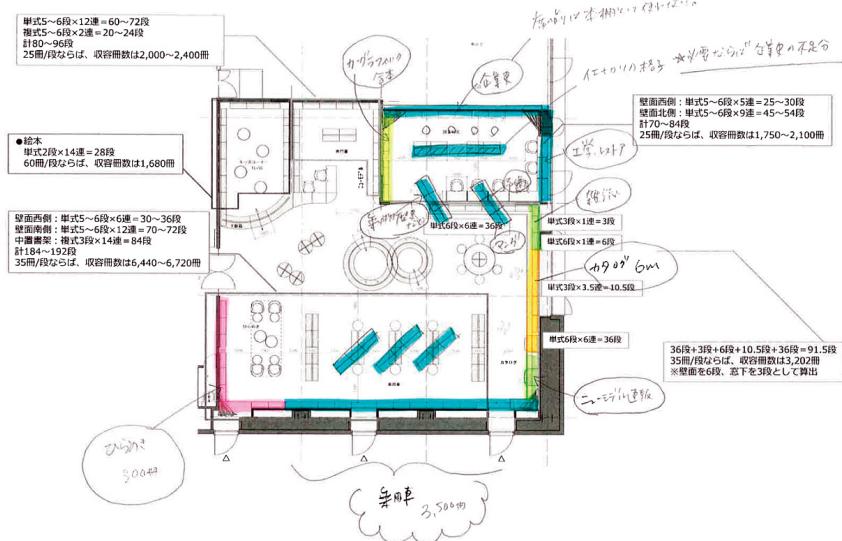


図5 平面図と書架の収容冊数

図5は、図3の要望書を元にした平図面と書架の収容冊数である。今回のリニューアルでは図書室の床面積を拡張することは事前に決定していたが、拡張部分の壁を撤去できるかどうかはこの時点では未定であったため、壁を残して調査用の個人席を設ける仕様となっている。しかしこの後、壁を撤去できることになったため、その部分に低書架を配置した。また、この低書架は真横に配置するのではなく、入口から見て斜めになるように配置し直した。斜めにすることで入口から書棚の中身が見やすくなり、奥行きにゆとりを生むことができた。中央にあるシンボル書架は主張しすぎているため、このデザインは再考することになった。

何度か平面図のディスカッションをし、ある程度のレイアウトが固まってきた段階で、いよいよ空間の雰囲気を決めるデザインコンセプトの策定に入った。デザイナーから数点のデザイン案の提示があった中、デザインコンセプトは「Knowledge Forest」に決めた。当初から書棚はメラニン加工ではない木製のものをオーダーしていたため、その性質を活かす内装というのがひとつの理由であり、また「Forest」という言葉は、本だけではなく、図書室も博物館の一部という見せ方をしていく中で、「多種多様なものの塊」という考え方を表現している。

デザインコンセプトが決定し、全体の空間デザイン案の検討に入った。図6は初期のパース図になるが、いよいよ図書室の全体像が見えてきた一方、ありきたりで物足りないのが第一印象であった。今回のコンセプト「共感・交流」を念頭に置いた時、ここでお客様同士の会話が誘発されるだろうか、従来のよくある図書館と何も変わらない、という感想が関係者の共通意見だった。それを踏まえ、その後出てきたのが図7を含む、中央にゲートを設えたパース図だった。この図は最終形であるが、このゲートに決まる前にはゲートが小さいものや、ゲートを複数組み合わせたものなど、いくつかのパターンがあった。最終的にこのデザインに決めたのは、入室した瞬間の高揚感と、ゲートの向こうへの期待感である。



図6 デザイン案 初期



図7 デザイン案 最終

(2) 内装

図面とデザインが固まってきた段階で、ひとつひとつのディティールに関しての打合せが始まった。

・カラーリング

図書室では、なるべく色を使わないことを予め決めていた。なぜなら本体となる本自体がカラフルだからである。そのため、色は3色に絞り、書架のベースカラー(ベージュ～茶色)、のりもの・えほん・としょしつの赤色、そしてひらめきコーナーの紺色とした。赤色と紺色は、文化館2階のクルマ文化資料室のカラーリングを踏襲し、文化館全体で統一感を出した。

特にカタログ架の茶色は、色味の違う茶色のサンプルをいくつか準備し、実際にカタログを合わせながら、それらのカラフルな色合いを引き立てる最適なカラーを検証した。

・書架

今回の工事で最もこだわったのが書架である。本との出会いを演出するためには、その土台となる書架が重要であり、耐久性・見栄えのいずれも欠かすことができなかった。そのため、このプロジェクトが始まった当初より、社内の工事担当部署には図書館什器の専門メーカーを入れてほしいと依頼、同意いただき、図書館のプロフェッショナルに助言をいただきながら当館独自の書架を施工することができた。奥行きは汎用サイズとした上で、当館の蔵書サイズの特徴を細かく調査し、最適な書架の仕様を提案いただいた。中央の展示用書架は大きさの違う正方形の棚をいくつか組合せ、変幻自在とした。

また、書架の背板の色は空間ごとに配色した。まず全体は書架のトーンに合わせたグレージュとし、今回の目玉となる「カタログコーナー」と「ひらめきコーナー」にはそれぞれのテーマカラーとなる茶色と紺色を配色した。この配色により、当初要望を出していた“入室した瞬間の来室者の視点”が、それぞれのコーナー(シンボル書架、カタログコーナー、ひらめきコーナー、のりもの・えほん・としょしつ)に向かう効果を生んだ。



写真3 ひらめきコーナー(A.つながる空間)



写真4 カタログコーナー

・照明

全体はダウン照明とし、受付カウンターや什器部分を中心に明るくなるように配置した。特に配慮したのは、来室者が書架から本を取り出したとき、その場で本を開くことが予想されたため、手元が暗くならないように書架の天井にもライトを設置した。

「ひらめきコーナー」の照明は最後までこだわり、10点以上の候補を出し、サンプルを取り寄せながら、「Forest」感のある木目模様の照明に決めた。

・什器

「共感・交流」する図書室に適した什器という発想で検討した。机があれば本に没頭することはできるが、限られた空間の中では席数が限られてしまい、また気軽に話ができない雰囲気になる恐れがあった。そのため、カタログコーナーには椅子は置かず、立ったままカタログが広げられる大きめのスタンディングテーブルを置くことを当初から考えていた。テーブルを一つ置くことで空間が狭くなってしまうため、残りの席は個人タイプのソファのみとした。その代わり、書架から持ってきた図書が置けるように、サイドテーブルを設置した。

しかし本に没頭する空間も必要であるため、「ひらめきコーナー」には居心地の良いテーブルセットを置き、奥には個人席を設けた。この個人席は、周りの話し声などのノイズが気になる場合でも本に没入できるように、囲まれ感を意識し、席は書架の一部に配置し、背中部分は格子の書棚で覆われるようにした。



写真5 カタログコーナー付近の家具



写真6 個人席

・展示物

多様なもので構成される「Forest」を表現するため、本以外の展示物を置くケースを書架と書架の間の角につくった。ガラスケースの中にはLED照明を配備し、展示物が引き立つようにし、ブリキのおもちゃやモデルカーなどを展示した。それらの展示物にまつわる写真やサインなども置き、図書室も博物館の一部という認識を持ってもらえるよう工夫した。

・のりもの・えほん・としょしつ

従来の“のりもの・えほん・としょしつ”的コンセプトを引き継ぎ、乗り物絵本ばかりを配架する部屋とした。床材はトヨタが所有する三重宮川山林の木材を使用し、空間を仕切るためのルーバーも同じ木材で統一感を出した。小さなお子様を主な対象としているため、安全面は特に配慮し、書架の角は全て取り除き、本以外に手に持てるものは排除するように徹底した。

また、左右それぞれの壁にはアートを飾ることにし、入口の左側には画家の轟友宏氏の自動車アートを、そして右には、2022年に行ったお絵かきイベントの作品を展示した。これは子供たちが描いた絵に絵本作家のなるかわしんご氏が文章を入れたものである。左右それぞれ趣の違う作品が並び、絵本に繋がる世界を表現している部屋になっている。



写真7 コーナー展示1



写真8 コーナー展示2



写真9 のりもの・えほん・としょしつ

・廊下

文化館3階の空間をすべて図書室と一体にするという考えが当初からあったため、エレベーターを降りた瞬間から図書室を感じられるような展示をすることとし、廊下に図書室と同じ書架を設置した。「クルマの図書室」という表札を大きく掲示し、その周りの書架には図書室にある書籍、雑誌、絵本やカタログなどの本を配置し、この先の図書室には何があるのかを明示した。

また、今まででは図書室に入るのをためらうお客様がいたため、歓迎の気持ちを込めて、書棚の一角に「ようこそ！／Welcom！」ボードを設置した。



写真10 廊下の書架

(3) トイレ

以前より、のりもの・えほん・としょしつの効果でお子様連れの来室者が多く、一方で同階にあるトイレは設備も古く使いにくいという問題があった。女性トイレに至っては和式タイプが残っており、今回のリニューアルを機に、明るく、誰でも使いやすいトイレを施工することにした。特にお子様連れが利用しやすいように、男女共におむつ替えの機能を充実させると共に、男性用トイレには女児用便器、女性用トイレには男児・女児用便器をそれぞれ設置することにした。これは、当館のクルマ館・文化館のメイントイレには、女性用トイレに男児用便器はあるが女児用がなく、来館者アンケートに、あるお子様が女児用便器がないことを嘆いていたというコメントがあり、それが検討のきっかけとなった。今回、子供にも使いやすいトイレを考えるため、近隣の新しい保育園に伺い、設備を見学させていただいた。それまでは、親子トイレといった親とキッズトイレが同居しているトイレも検討していたのだが、子供といえどもプライバシーが大切という話を伺い、キッズトイレは独立させることにし、男児用トイレにも扉を設けることにした。

当館の各フロアのトイレは装飾にも特徴があるため、図書室フロアのトイレは2025年のクラウン70周年を目前に竣工するということで、クラウンをテーマに検討した。男性用は初代クラウンの実車の細かい部品を昆虫標本のように魅せるシートを入口に貼り、女性用は初代クラウンのカタログからイラストを抜き出し、カラフルにデザインした壁紙を製作した。

サインについても検討に時間を要した。最終的には多様な利用者への配慮から、青・赤といったカラーは使用せず、黒色に統一した。しかし結果として、リニューアルオープン後に女性のお客様やお子様が間違えて男性用トイレに入室してしまうケースを度々見かけたため、男性用・女性用それぞれの入口の目線上に、青・赤のシートを貼ることにした。それ以降は間違えるお客様はなくなり、一目で認識できるカラーリングの大切さを再認識した。



写真11 男性用トイレ入口



写真12 女性用トイレ入口



写真13 青・赤シート補正後

(4) 安全対策

昨年の年報では図書室での課題を報告したが、リニューアルに向けてひとつひとつ対策を実施した。

- ・新しい書架では奥行きを深く設計し、大型書籍も収まるようにしたため、下段に配架する書籍の出っ張りがなくなり、足を引っ掛ける心配をなくした。
- ・通路幅は全て1m以上を確保し、車いすやベビーカーが通行しやすく、すれ違う際の接触を防いだ。
- ・手を伸ばして本を取る行為やステップを使用するという危険をなくすため、低書架を基本とし、天井まである壁面書架の手が届かない本はディスプレイとし、同じ図書をもう1冊書棚に配架した。
- ・入口は引き戸とすることで、常時開口し、指などを挟みこむ危険を排除した。
- ・家具の形状に配慮し、脚の細い椅子などは設置せず、余裕を持った配置とすることで、足を引っ掛ける等の心配をなくした。

その他、什器の角は面取りすること、書架の上段2段には落下防止バーを付けること、等、安全には徹底的に配慮したものである。今後も来室者に安心・安全に過ごしていただけることを第一に考えていく。

4 共感・交流に向けての工夫

(1) 図書の分類

コンセプトに掲げた「共感」であるが、今までの図書室では得られなかつた図書との出会いを、どうしたら実現できるかを検討したところ、分類方法に着目した。それまでの当室の分類方法は、図書館における日本十進分類法を参考に、900番台を当館独自の分類番号として設定、番号順に配架していた。例として、900番は『自動車に関する総記』、910番は『乗り物の歴史』と大分類を設定し、900番「自動車辞典」、901番「自動車年鑑」という中分類に細分化している。この分類方法及び書架の配置は、何か調べものをしたい利用者には大変分かりやすく、本を探しやすい。また、図書スタッフも本を元に戻しやすい等、利点は多い。しかし、来室者を観察していると、博物館に見学に来て、たまたま図書室の存在を知り、ふらっと立ち寄った場合は、そもそも何が読みたいか不明瞭なため、読みたい本を探し出すまでに時間かかるケースがよくある。現在の分類方法は受け身であり、図書室側から来室者に対して本を手に取ってもらいやすい配架・演出ができるていないことが課題として浮かび上がった。

この分類方法を大きく変えることとし、来室者がどのような傾向の本を求めているかを探るため、過去10年間分のレファレンスの内容を洗い出した。約350件あった問合せで最も多かったのは「(車名)のカタログが見たい」「(車名)について書かれている本はないか」というリクエストであった。次いで「(車名)の修理書／整備書」について、そして「社史」が続いた。

それを元に、新しい分類方法を検討し、5つの大きなまとまりとして大分類を形成した。この分類の中には児童書も含まれており、以前より図書室に訪れるクルマに関心のある子供は、保護者と共に大人向けの本を読んでいた。より深くクルマについて知りたい子供の欲求に応えるため、児童書(999番)は全てA～Eに分類し、混合した。

A. つながる空間 一クルマ・本・人-

B. 世界のクルマを探る (1. クルマ全般)

C. 多角的にクルマを楽しむ (4. クルマ文化)

D. クルマの仕組みを知る (2. 工学系)

E. クルマの歴史を学ぶ (3. 社史など)

大分類が決まってからは、さらに細かい分類分けを行い、来室者が図書を探しやすいうように分かりやすいサインを付与した。

900 自動車に関する総記	940 乗用車	980 モータースポーツ
900 自動車総論	940 乗用車全般	980 モータースポーツ全般
901 自動車年鑑	941 乗用車 日本	981 モータースポーツ年度
902 自動車エンジニア・設計者・修理者	942 乗用車 アメリカ	983 モータースポーツ 日本
903 自動車業界元老・自動車法規	943 乗用車 イギリス	984 モータースポーツ 海外
904 自動車ガイドブック	944 乗用車 ドイツ	985 レーサーの伝記 全般
905 自動車統計	945 乗用車 フランス	986 レーサーの伝記 日本
906 自動車カタログ	946 乗用車 イタリア	987 レーサーの伝記 海外
907 現存車情報	947 乗用車 のその他	988 モータースポーツレース
908 自動車リー		
909 自動車博物館		
910 乗り物の歴史	950 商用車・その他	990 自動車趣味・芸術・その他
910 乗り物の歴史・交通の歴史	950 商用車全般	990 ゴカツイ 日本
911 乗り物の歴史・交通の歴史	951 安全運転	991 ゴカツイ 海外
912 乗り物の歴史・その文明論	952 バートラック	992 運学・運転技術
913 乗り物の歴史・その文明論	953 乗用車・ジープ	993 免許・運転免許・運送・保険
914 自動車歴史	954 乗用車・ハイブリッド	994 免許運転免許・輸入・販売
915 自動車歴史 日本	955 乗用車・人間車・蒸気自動車	995 自動車広告・技術・趣味
916 自動車歴史 ヨーロッパ	956 自社車	996 カーフェスティバル・イベント
917 自動車歴史 その他の	957 モーターサイクル	997 カーニバル・おもかげ模型・ペーパーラフト
918 自動車史 アメリカ	958 コンバーチブル	998 コミック
919 自動車史 その他の	959 定着書・総本	999 定着書・総本
920 自動車歴史	960 自動車工学	
920 自動車企業史・通史	960 自動車工学	
921 自動車企業史 日本	961 内燃機関・燃料	
922 自動車企業史 アメリカ	962 駆動系・シャシ・タイヤ	
923 自動車企業史 ヨーロッパ	963 ボディ・フレーム	
924 自動車企業史 その他の	964 電気車・カーリクロニクス	
925 国境への取組み	965 自動車材料	
926 自動車の力学	966 自動車の力力学	
927 自動車の生産技術・工学・物流	967 自動車の生産技術・工学・物流	
928 商品企画・デザイン	968 その他	
930 自動車企業史・伝記	969 その他	
930 自動車企業史 通史		
931 自動車企業史 その他の		
932 自動車企業史 ヨーロッパ	970 自動車整備・検査	
933 自動車企業史 アメリカ	971 自動車整備 日本	
934 自動車企業史 ヨーロッパ	972 自動車整備 アメリカ	
935 自動車企業史 その他の	973 自動車整備 ヨーロッパ	
936 伝記全般	974 自動車整備 ドイツ	
937 伝記 日本	975 自動車整備 フランス	
938 伝記 その他の(海外)	976 自動車整備 イタリア	
939 社史	977 自動車整備 のその他	
	979 自動車のチューニング	

図8 当館独自のクルマ分類表

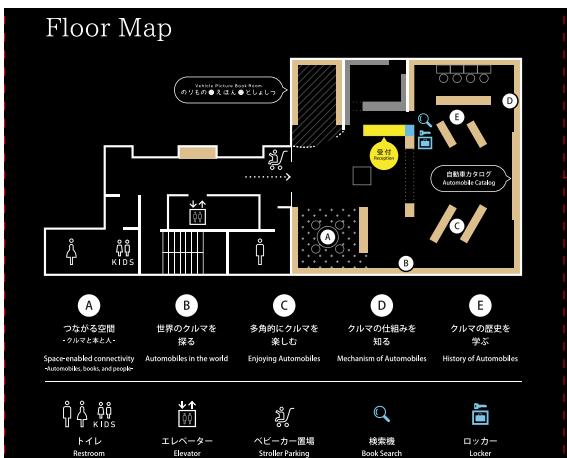


図10 図書室マップ

分類番号	大分類	細分号	中分類	小分類
A	つながる空間 クルマと本・人	—	—	
B	世界のクルマを探る	B-1	日本車	ISUZU SUZUKI SUBARU DAIHATSU TOYOTA NISSAN HINO HONDA MAZDA LEXUS Others
				MITSUBISHI
B-2	アメリカ車			
B-3	イギリス車			
B-4	ドイツ車			
B-5	イタリア車			
B-6	フランス車、その他の欧州車			
B-7	ニューモデル速報			
C	クルマを楽しむ	C-1	はらく自動車	
		C-2	スポーツカー	
		C-3	田舎	
		C-4	小型車	
		C-5	クルマ文化	映画 音楽 アート カーマスコット ミニカー トミカ/ミニ四駆 模型 Others
D	クルマの仕組みを知る	D-1	工学・技術	
		D-2	環境	
		D-3	交通安全	
		D-4	レストア	
E	クルマの歴史を学ぶ	E-1	乗り物の歴史	
		E-2	デザイン史	
		E-3	産業史・企業史	
		E-4	社史	
		E-5	クルマガタリ	
		E-6	自動車に関する総記	

図9 見直し後の配架用分類表



写真14 分類サイン

(2) つながる空間の新設

5つの新しい分類方法では、当初「ひらめきコーナー」と呼んでいたコーナーは「A. つながる空間 一クルマ・本・人」とし、「共感」を呼ぶ仕掛けのひとつとしてリニューアル後の図書室の新しい目玉とした。

図書室は基本、クルマに関する図書を収集・公開しているが、入室して何を読めばいいのか分からぬ来室者には、新しく設けた「A. つながる空間」というコーナーに足が向くように工夫した。ここは全ての本を面置きで展示するコーナーで、B~Eに分類した本の中でも、表紙の美しさや、表装が特徴的な本を並べた。また、クルマ関連の本が中心ではあるが、例えは科学の本やアート系の本など、一見クルマとは関係のない本も一緒に置くことにした。しかし、クルマに全く関係ないとはいえ、科学もアートもどこかでクルマに繋がっていく、そういう考え方で選書を行なった。入口を入ってすぐのこのコーナーは、今まで敬遠されがちだった女性などが興味を示し、滞在時間も増えている。

(3) 交流イベント

もうひとつのコンセプトである「交流」については、図書室主催のイベントを定期的に行なう予定である。そのひとつとして、お客様とスタッフの対話の場として「自動車カタログ語り隊」を行なっている。このイベントはカタログ好きなお客様同士

の交流を促すのが主目的であり、お気に入りのカタログやキャッチコピーをテーマに、参加者全員がその思いを語るイベントである。リニューアル後には「学生編」として、2025年2月に近隣の高校生に参加していただき、カタログ架からお気に入りのカタログを選書してもらい、書棚にディスプレイした。また、2025年3月には、社内のインフォーマル団体の有志に参加いただき、クルマ文化資料室のディスプレイ用のカタログ選書に協力いただいた。今回は「エンジン」というテーマで1960年代～現代まで、エンジンが特徴的に描かれているカタログを探し、クルマ文化資料室に展示する企画だったが、計8名の方に参加いただき、終始和やかな雰囲気の中、担当者では到底探せないマニアックなカタログを選書いただいた。カタログを中心に参加者の知識と趣向が結びつき、とても充実したイベントとなった。このイベントは今後もテーマを工夫しながら、定期的に開催したい。

また、2024年3月には「青空クルマ図書室」を初めて企画し、当館の芝生広場で移動図書館のイベントを行った。「思わずドライブに行きたくなる本」をテーマに選書し、芝生広場にブルーシートと椅子を置き、各々好きな場所で読書を楽しめる場所にした。そして、長久手市内の絵本の読み聞かせボランティアの方たちにも参加いただき、午前・午後の2回、お子様連れの親子を対象とした読み聞かせ会を実施した。初春の暖かい日差しの元、リラックスできる読書環境を提供でき、お客様はボランティアの方たちや図書室スタッフとの交流を図った。今年の4月にも2回目を実施した。

このような交流イベントを通し、図書室が収蔵する資料の持つ力を色々試し、魅力を発信していきたい。



写真15 自動車カタログ語り隊「学生編」



写真16 自動車カタログ語り隊「社内有志編」

(4) さらなる「共感・交流」のための仕掛け

図書室では、個人席以外ではお連れ様同士の“本を中心とした”会話を推奨している。それに伴い、BGMを流し、話しやすい雰囲気を提供している。最近では会話ができる図書館が増えており、図書館は静かに過ごすところという概念は古くなっていると感じる。雑談は読書を楽しむお客様にとって迷惑になり兼ねないが、ただ静かに本を読むことが図書館の役割ではなく、本をきっかけとしたコミュニケーションが広がることを担当者としては期待している。

また、図書室に親しみを感じていただくために、香りの演出も行っている。図書室にいる間はもちろんのこと、博物館を出てから、“あの図書室／博物館はいい匂いがしていたな”と良い記憶として残していただきたいと思い、試みている。

5 おわりに

最後に名称について触れたいと思う。それまでの図書室の名称は単なる「図書室」だったが、リニューアルする際に「クルマの図書室」とした。改称することは早い段階から決めていて、改称に向けた検討会を数度行い、その都度いくつかの候補を持ち寄った。英語や造語など、それぞれに気持ちを込めて考えたが、最終的には一目見て分かりやすいネーミングにしようということで「クルマの図書室」に決まった。結果としては当たり前の名前に見えるが、しかしこの名称に決まるまで時間を費やしたことを考えると、愛情はひとしおである。そして名称の英訳は「Automobile Discovery Library」であり、「Discovery」という一言を入れたのは私たちの図書室への期待の表れである。

書架のひとつひとつ、選書の1点1点まで、こだわった図書室である。ここで本との出会いを楽しみ、本を通してクルマ文化に触れ、さらにクルマが好きになってくれることを願い、今後も「共感・交流」する図書室として大切に育てていきたい。

■クルマの図書室

企 画：小室 利恵(学芸・企画1グループ)

工 事：土館 泰裕(学芸・企画2グループ)

作図・製作：豊通ファシリティーズ株式会社、株式会社スペース、キハラ株式会社

II: 館運営活動 2

来館者800万人達成 記念セレモニー&記念WEEK開催

実施日：セレモニー 2025年1月13日(月・祝)、記念WEEK 1月18日(土)～26日(日)
場 所：クルマ館1階エントランス

安藤 なぎさ(学芸・企画2グループ)

1 はじめに

1989年4月の開館以降、国内外から多くのお客様にお越しいただき、この度トヨタ博物館は開館から35年9ヶ月を経て来館者累計800万人を達成した。これを記念して、お客様に感謝を伝えるとともに一緒に祝っていただきたいとセレモニーを開催した。以下では、「来館者800万人達成記念セレモニー(以下、セレモニー)」と「来館者800万人達成記念WEEK(以下、記念WEEK)」の実施内容やその反響を報告する。

2 企画内容

- ①来館者800万人達成予定日に合わせたセレモニーの開催
- ②来館者800万人達成に合わせた展示企画(車両2台、感謝のぼり)
- ③“800”にちなみ、8日間感謝を始めた記念WEEKの実施

3 実施内容

(1) セレモニー

当館では来館者累計100万人達成ごとにセレモニーを実施している。歴代セレモニーでは、当館の館長から記念のお客様に対して認定証等を贈呈し、感謝をお伝えしてきた。今回のセレモニーではそれを踏襲しつつ、セレモニー盛り上げのために“800”にちなんだふうを盛り込んだ企画とした。まず、当館で所蔵している車両から“トヨタスポーツ 800”(通称ヨタハチ)と“ホンダ S800”(通称エスハチ)をXマークの前から展示した(写真1)。さらに、セレモニー当日には記念のぼりを立て、海外のお客様にも伝えたいと思い、「ご来場ありがとうございます」を8カ国語で表現するなど細かいところにも8という数値を忍び込ませた。

セレモニー当日は800万人目となった長久手市のクルマ好きなご家族へ、榎原館長より認定証と記念品が贈呈(写真2)。加えて、特典としてエントランスに展示している上記2台への記念乗車と撮影を行い、思い出を持ち帰っていただくふうもした(写真3)。結果として、ご家族が大変喜ばれ、担当として非常にやりがいを感じた。



写真1 (左)“ホンダ S800”と
(右)“トヨタスポーツ 800”



写真2 800万人目のご家族と榎原館長



写真3 記念乗車中の800万人目のご家族

(2) 記念WEEK

今回は800万人目のお客様だけではなく、多くのお客様に感謝を伝えたいと思い、セレモニー実施日の週末から“800”にちなんで8日間限定(1/18～1/26)で記念WEEKを実施した。期間中にお越しいただいたお客様各日先着100名(合計800名)に、“トヨタスポーツ 800”のピンバッジ(写真4)とオリジナルカレンダー(写真5)をプレゼントした。実施前のSNS告知(写真6)をした段階で、何時に行けば記念バッジをもらえるかなどお問合せを多くいただいた。実際に記念WEEK中は寒空のもと各日とも開館前から多くのお客様に並んでいただき、お客様の熱気がヒシヒシと伝わってきた。



写真4 オリジナルピンバッジ



写真5 オリジナルA3カレンダー



写真6 事前SNS告知

4 反響と効果

セレモニー当日は4社の新聞社にお越しいただいた。開催後は東海地方のみならず、他の地域でも報道されるなど多くの方々にトヨタ博物館を知つてもらう機会となった。また、上記の記念WEEKをきっかけに当館の年間パスポート会員に新たに登録いただいた方が通常よりも多く、今後の来館促進にも貢献した。来場者数として土日は昨年並であったものの、平日来館者数は増加(前年比173%)するなど当館の集客につながった。

5 おわりに

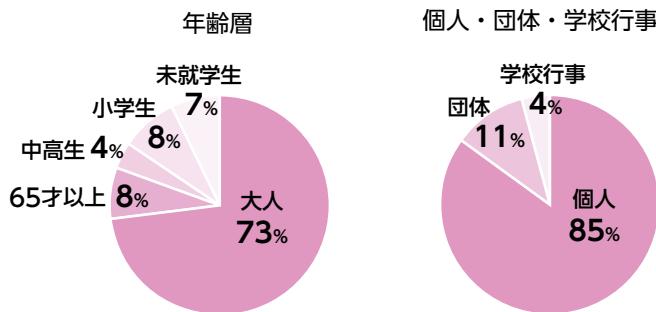
有難いことに当館では、数年単位で来館者100万人を達成している。これからも国内外多くのお客様にお越しいただき、900万人、1,000万人達成のときには、お客様に喜んでいただける新しい企画でお迎えしたいと思っている。

企 画：安藤 なぎさ(学芸・企画2グループ)

活動サマリ(2024年度)

1 来館者数

年間 約**26**万人が来館 ·コロナ前並みに回復



累計 約**805**万人

·1月13日 800万人達成セレモニー開催



2 収蔵数

収蔵車数

常設展示

158台 / 約**600**台



文化資料

約**1.5**万点



車の図書、雑誌、カタログ

約**25**万点



3 博物館活動

企画展



3回/年

走行披露



2回/年

(別途1回雨天中止)

【動態保存】整備車両



104台/年

クルマの図書室

入室者数

約**1.8**万人/年

図書展示

4回/年

イベント

3回/年

【教育普及活動】学校団体受入

143校(9,848人)/年



外部展示 車両貸出



12台/年

寄贈車両受入



約**4**台/年

オーナーズミーティング受入



32件/年

4 取材/発信数

メディア(新聞・TV・雑誌)

取材件数

33件以上/年



ホームページアクセス数

約**300**万(表示回数)/年



5 博物館・企業・団体 連携実績

外部出展・協力

4件(5台)/年

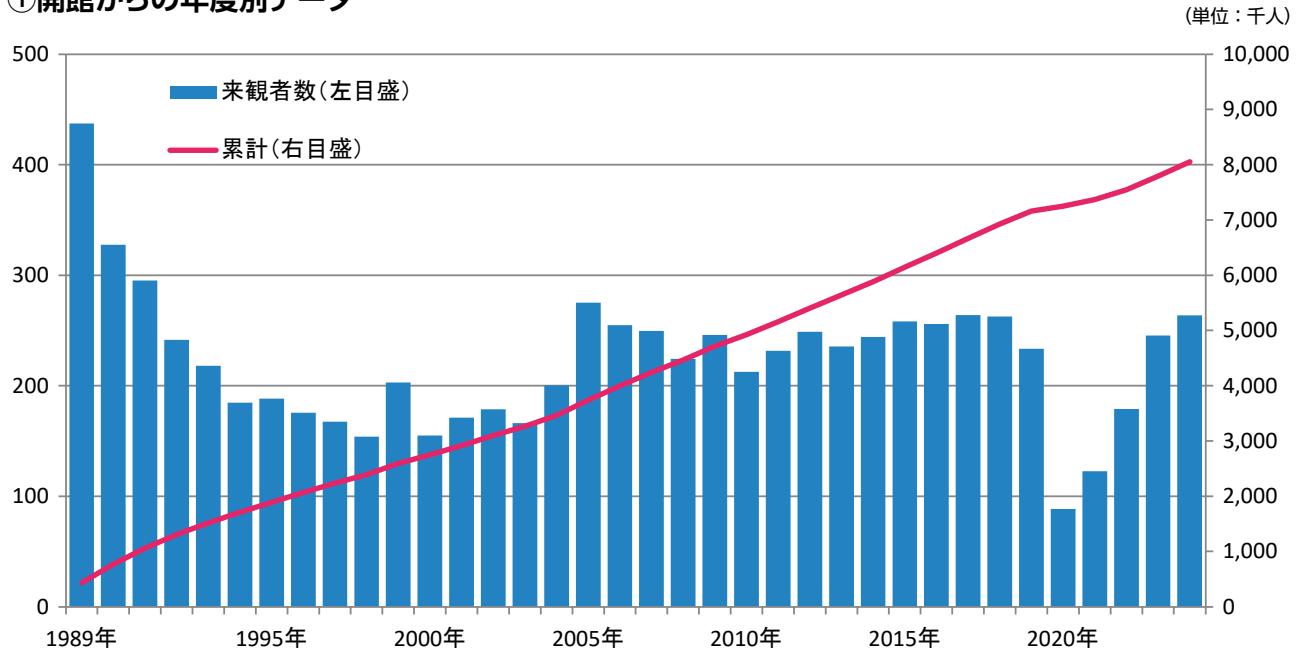
2024年 世界自動車博物館会議

17カ国(約**200**人) 二輪・四輪メーカー**14**社
メディア取材/掲載数 **9件/71件**



来館者データ(累計及び2024年度)

①開館からの年度別データ



②年度別形態別来館者数

年度	個人	団体	学校行事			合計
			大学・専門学校	高校・中学	小学	
2015	225,358	22,188	2,275	2,904	5,361	258,086
2016	221,989	23,708	2,279	1,541	6,255	255,772
2017	213,981	38,471	2,010	2,797	6,701	263,960
2018	214,497	37,320	2,064	3,204	5,499	262,584
2019	189,081	34,065	1,691	2,707	5,768	233,312
2020	80,968	4,175	1,728	773	859	88,503
2021	110,664	6,664	1,270	1,329	2,602	122,529
2022	158,856	12,800	2,030	2,253	2,967	178,906
2023	210,878	25,823	2,386	2,329	3,925	245,341
2024	224,178	30,037	1,779	2,802	4,945	263,741

③年度別客層別来館者数

年度	大人	シルバー (65歳以上)	中高生	小学生	乳幼児	合計
2015	188,037	20,078	7,282	19,555	23,134	258,086
2016	184,248	20,643	5,818	20,026	25,037	255,772
2017	192,589	22,339	7,909	21,433	19,690	263,960
2018	189,453	23,431	8,234	20,941	20,525	262,584
2019	167,137	20,272	7,675	20,733	17,495	233,312
2020	64,928	4,981	2,898	5,957	9,739	88,503
2021	87,634	6,690	3,964	10,599	13,642	122,529
2022	128,369	12,983	6,878	14,694	15,982	178,906
2023	179,109	20,565	9,447	18,662	17,558	245,341
2024	192,609	20,390	10,809	21,066	18,867	263,741

④2024年度月別形態別来館者数 (学生・生徒・児童は学校行事での来館者数)

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
個人	18,297	21,555	18,423	19,279	33,688	18,992	15,717	15,323	9,420	14,137	16,650	22,697	224,178
団体	2,358	3,891	2,710	1,711	1,314	1,987	3,443	5,018	1,888	1,171	1,116	3,430	30,037
大学・専門学校	0	137	584	71	50	27	113	522	113	98	41	23	1,779
高校・中学	328	588	183	152	149	164	269	562	64	79	256	8	2,802
小 学	3	305	167	23	162	794	295	1,858	931	407	0	0	4,945
合計	20,986	26,476	22,067	21,236	35,363	21,964	19,837	23,283	12,416	15,892	18,063	26,158	263,741

⑤2024年度月別客層別来館者数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
大人	15,972	20,141	16,688	15,521	23,553	16,369	14,800	16,462	8,901	11,561	13,560	19,081	192,609
シルバー	1,822	2,047	1,929	1,480	1,740	1,421	1,950	2,194	973	1,020	1,237	2,577	20,390
中高生	939	1,231	714	1,082	2,026	557	595	933	394	563	752	1,023	10,809
小学生	1,150	1,628	1,331	1,747	4,107	1,838	1,089	2,712	1,438	1,483	993	1,550	21,066
乳幼児	1,103	1,429	1,405	1,406	3,937	1,779	1,403	982	710	1,265	1,521	1,927	18,867
合計	20,986	26,476	22,067	21,236	35,363	21,964	19,837	23,283	12,416	15,892	18,063	26,158	263,741

取材記録(2024年度)

カテゴリ	区分	媒体名	企画展・イベント名・内容	公開日
企画展	新聞	日刊自動車新聞社	「日本のクルマとわたしの100年」 (会期:2024年9月7日(土)~2025年1月13日(月・祝))	2024.10.30
	ラジオ	調布FM『あなたと私のクルマ時間』		2024.9月
	ウェブ	AMW(AUTO MESSE WEB)		2024.9.26
	新聞	朝日新聞社		2024.10.8
	新聞	朝日新聞社 『フォーラム ミュージアムとジェンダー』		2024.11.10
	テレビ	NHK名古屋『まるっと!』		2024.10.1
	雑誌	全国軽自動車協会連合会 会報『軽自動車情報』		2024.11.10
	ウェブ	インプレス『CarWatch』		2024.11.28
	雑誌	いのうえ事務所『自動車趣味人』		2024.12.10
	雑誌	ぽると出版 『Working Vehicles No.87』		2024.12.10
	新聞	日刊自動車新聞社『車笛』		2025.3.19
	新聞	日本経済新聞社 『クラウン発売70年全16代に見る トヨタの時代適応力』		2025.4.12
	雑誌・ウェブ	講談社ビーシー 『別冊ベストカー クラウンSPECIAL』		2025.3.31
	雑誌	ムックハウス『マガジンX』6月号		2025.4.25
	雑誌	レジナス『ahead over 50』		2025.4.18
	テレビ	テレビ愛知『5時スタ 突撃ライブ』		2025.3.28
セレモニー	新聞	共同通信社	来館者累計800万人達成記念セレモニー (2025年1月13日(月・祝)) 800万人達成記念WEEK (2025年1月18日(土)~26日(日))	2025.1.13
	新聞	中日新聞社		2025.1.14
	新聞	日刊自動車新聞社		2025.1.21
	新聞	読売新聞社		2025.1.16
トヨタ博物館の紹介	地域ウェブ	ひまわりネットワーク『じもサタ。』	「愛車の日」にちなみクルマの魅力発信として館の紹介	2024.5.25
	ウェブ	名古屋テレビ『メ～テレニュース』	図書室リニューアル前イベント「自動車カタログ語り隊！第2弾」の紹介	2024.6.21
	地域ウェブ	ひまわりネットワーク『まちクル』	長久手の穴場ランチスポットとして館内レストラン「AVIEW」の紹介	2024.9.10
	テレビ	テレビ愛知『天野っちのドライブしよう』	東海地方の魅力的スポットとして紹介	2024.8.31
	テレビ	中京テレビ『ぐっど!』	あいち・なごや周遊パスポートで入館できる博物館・美術館として紹介	2024.7.26
	テレビ	スターキャット 『DD LIFE'S SO GOOD』	総務省インバウンド事業としてタイムメディアの取材	2024.12.12
	書籍	河出書房新社 『クラシックカーダ大全(仮題)』	1970年代に幼少期を過ごした方や、国内外のクラシックカーファンをターゲットとしたヴィジュアル重視の書籍での館紹介	2025.10.予定
	ウェブ	愛知県観光コンベンション局 海外プロモーション(フランス)事業	海外プロモーション在日フランス人記者	2025.3.18
	雑誌	いのうえ事務所『自動車趣味人』	2000GT特集、図書室リニューアル	2024.12.10
	ラジオ	KBS京都ラジオ 『笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ』	館紹介	2025.1.23
	雑誌・ウェブ	パークアップ 『MotoMegane CARS 4月号』	館紹介	2025.4月
	新聞・ウェブ	読売新聞社	今後の館運営など榎原新館長へのインタビュー形式での館紹介	2025.3.8
	テレビ	東海テレビ 『村上佳菜子の週刊愛ちっち』	リニモ春風ウォーキングの立ち寄りスポットとして紹介	2025.3.13
	ウェブ	中部電力 『きずなネットよみものWeb』	春のドライブシーズンに合わせて、おすすめ・おでかけスポットとして紹介	2025.3.17
	雑誌	Ruote classiche	館紹介	

III:資料編 4

車両貸出実績(2024年度)

貸出期間		貸出先	車両名()は年式	貸出目的
貸出	返却			
2024.2.1	2025.1.31	四国自動車博物館	トヨタ MR2 222D	四国自動車博物館 展示
2024.3.18	2024.6.28	Lexus統括部	初代 LS400	下山 西エリア 3号館 来客棟 展示
2024.3.25	2024.9.30	豊田市博物館	トヨタ カローラ	豊田市博物館 展示
2024.3.29	2024.4.2	人材開発部	トヨタ AA型 乗用車	事務本館大ホール 24年度入社式展示
2024.4.19	2024.4.25	Lexusボデー設計部	カリーナED セラ	下山 3号館1Fガレージ 展示
2024.6.14	2024.12.10	日本自動車博物館	トヨタ 2000GT LHD(1967)	「トヨタの街」での展示に使用
2024.10.1	2024.11.29	豊田汽車(中国)	トヨタ クラウン MS41S型	中国国際輸入博覧会 展示
2024.10.3	2025.3.24	GR-Z部	初代 セリカ LB1600GT	下山 3号館1Fガレージ 展示
2024.10.24	2024.11.4	先進技術統括部	初代 プリウス 2台	本館大ホール 技術本館1F IEEEマイルストーン贈呈式展示
2025.1.8	2025.1.13	GRマーケティング部	初代 カローラ	東京オートサロン 2025 展示
2025.1.14	2025.9.22	豊田市博物館	トヨタ スポーツ 800	豊田市博物館 展示
2025.1.30	2025.4.24	グローバル生産推進センター	トヨタ スポーツ 800	元町 レストアG作業エリア

III:資料編 5

社外イベント出展(2024年度)

搬出日	搬入日	出展先	車両名	使用状況
2024.11.20	2024.11.25	WRC JAPAN2024	セリカ GT-Four ST185	豊田スタジアムでの THE GOLDEN AGE OF RALLY IN JAPANにて展示
2025.2.4	2025.2.12	沖縄トヨタ フルラインアップ フェスティバル	・2000GT ボンドカー ・トヨタ7ターボ	沖縄コンベンションセンターでの クルマファンイベントに出展
2025.3.14	2025.3.17	コンコルソ デレガンツア	・2000GT ボンドカー ・LFAスパイダー	奈良県薬師寺でのコンクール デレガンスに出展



写真1 沖縄トヨタ フルラインアップフェスティバル



写真2 コンコルソデレガンツア

III:資料編 6

寄贈車両実績(2024年度)

寄贈日	寄贈者	年式	車両名	住所
2024.4	高田 紀美子 様	1980	ランチャ モンテカルロ	兵庫県
2024.11	奥 佳澄 様	1998	ランドローバー ディフェンダー 90	愛知県
2024.12	田口 一郎 様	1996	プジョー 404 ベルリーヌ	神奈川県
2025.1	片岡 聖実 様	1975	トヨタ カローラ レビン TE37	岡山県



写真1 ランチャ モンテカルロ



写真2 ランドローバー ディフェンダー 90



写真3 プジョー 404 ベルリーヌ

III:資料編 7

オーナーズミーティング(2024年度)

No.	開催月	ミーティング名	参加者(人)	参加車両(台)
1	2024.4.6(土)	East. West meeting 2024	23	18
2	2024.4.7(日)	第8回 東海・中部マイナーカー・オーナーズミーティング	31	28
3	2024.4.13(土)	第20回 NEXUS MEETS	113	108
4	2024.4.14(日)	GRヤリス同好会 オフ会	131	120
5	2024.4.21(日)	LL 名古屋・トヨタ博物館ミーティング	30	20
6	2024.5.12(日)	MINI R generation Meeting vol.3	155	115
7	2024.5.19(日)	MR2ミーティング	108	75
8	2024.5.25(土)	3代目レガシィオーナーズクラブ	17	17
9	2024.5.26(日)	A2GOLFオーナーズミーティング	28	28
10	2024.6.1(土)	TAFT Owner's Meeting by TAFT Tokai community	21	17
11	2024.6.2(日)	team G's 全国オフ	40	33
12	2024.6.8(土)	5チャンネルミーティング	65	51
13	2024.7.6(土)	セルシオ改良の部屋	27	32
14	2024.7.7(日)	AQUA Gsport's owner's club	20	25
15	2024.7.21(日)	コルトOFF in 愛知	21	25
16	2024.9.29(日)	アルファロメオオーナーズクラブ名古屋 TAMミーティング	24	19
17	2024.10.20(日)	2024 CGCLUB 長久手TTD	81	72
18	2024.10.26(土)	オールジャンルCARミーティング in トヨタ博物館	24	22
19	2024.11.9(土)	第2回 TOYOTA MIRAI オーナーズミーティング	73	52
20	2024.11.10(日)	AE86 オーナーズミーティング	125	120
21	2024.11.17(日)	彼女のカレラ 20周年イベント in トヨタ博物館	57	5
22	2024.11.23(土)	TOYOTA MR2 CLUB JAPAN 全国OFF	72	63
23	2024.11.24(日)	パブリカ全国ミーティング	51	30
24	2024.11.30(土)	マセラティ 創業110周年記念 プチオフ	16	11
25	2024.12.1(日)	124の日	56	36
26	2024.12.7(土)	チラカーライフオフ会@トヨタ博物館	64	47

No.	開催月	ミーティング名	参加者(人)	参加車両(台)
27	2024.12.8(日)	パイクカーミーティング	21	15
28	2024.12.15(日)	ただ集まる会	22	22
29	2025.1.11(土)	AE111 DRIVERS CLUB MEETING in トヨタ博物館	22	22
30	2025.3.8(土)	ハリアーオーナーオフ会 in トヨタ博物館	57	44
31	2025.3.15(土)	チラカーライフオフ会@トヨタ博物館	37	29
32	2025.3.30(日)	第9回 東海・中部マイナーカー・オーナーズミーティング	30	26

III:資料編 8

エントランス展示車両(2024年度)

クルマ館		
テーマ	期間	車両名()は年式
新規収蔵車	2024.3.26~4.21	トヨタ 1600GT RT55 (1967)
補修・全塗装完了	2024.5.8~6.30	フィアット ヌーヴァ 500D (1963)
堺市ヒストリックカーコレクション特別展示	2024.9.3~10.20	BMW 2002 turbo (1973) 並行輸入車 BMW 2002 turbo (1973) 国内代理店輸入車
ラリージャパン2024開催連動展示	2024.11.12~12.22	日産 240RS S110 Gr.B (1983) 日産 スタンザ PA10 Gr.2 (1979)
新規寄贈車両	2024.7.2~9.1	ランチア・モンテカルロ (1980)
FMM(富士モータースポーツミュージアム)里帰り展示	2024.12.24~2025.2.24	アルファ ロメオ 1750 グラントスポート (1947)
入館者800万人記念	2025.1.7~1.26	トヨタ スポーツ800 UP15 (1966) ホンダ S800 AS800 (1967)
クラウン70周年記念展連動展示	2025.2.28~6.1	トヨペット クラウン RSD (1956) 1957年 豪州ラリー仕様レプリカ トヨペットマスター RR (1955)

文化館		
テーマ	期間	車両名()は年式
企画展連動「お蔵出し展」	2024.2.13~5.6	トヨタ FT-86 オープンコンセプト (2013) トヨタ 86 シューティングブレーク (2016)
トヨタ MR2 発売40周年記念展示	2024.5.8~6.30	トヨタ MR2 プロトタイプ トヨタ MR2 AW11 (1984)
新規寄贈車両	2024.8.1~9.29	トヨタ ランドクルーザー HJ61V (1987) 1992年パリ~モスクワ~北京マラソンエイド走破車両
新規収蔵車両		トヨタ ランドクルーザー VDJ200R (2014) 5大陸走破プロジェクト参加車両
新規寄贈車両	2024.10.1~11.10	マツダ サバンナ RX-7 SA22C(1979) ホンダ LM800 AL800 (1967)
ラリージャパン2024開催連動展示	2024.11.13~12.22	トヨタ セリカ RA21 Gr.4 (1976) トヨタ セリカ TA40 Gr.2 (1979) トヨタ セリカ RA45 Gr.4 (1979) トヨタ セリカ RA63 Gr.4 (1982)
FMM(富士モータースポーツミュージアム)里帰り展示	2024.12.24~2025.2.24	ベントレー 4・1/2L (1930) チシタリア 202 クーペ (1947)
クラウン70周年記念展連動展示	2025.2.26~	トヨタ クラウン GRS200 (2012) 13代目 トヨタ クラウン AWS210 (2013) 14代目 トヨタ クラウン ARS220 (2018) 15代目 トヨタ クラウン AZSH37W (2023) 16代目 スポーツ トヨタ クラウン KZSM30 (2023) 16代目 セダン トヨタ クラウン AZSH39W (2025) 16代目 エステート

教育普及(2024年度)

1 学校団体 143校 9,848人

- ・来館者数のうち4%が学校団体
- ・学校団体のうち約4割が小学校
- ・学校団体向けの特別プログラム(車両説明と車両走行)があり、希望校には事前予約制で実施。特別プログラムを希望する学校は全体の14%
- ・小学校団体向けには見学用ワークブックを無料配布

①小学校

団体数 56校、受入人数 5,132人

うち、車両説明と走行(雨天中止に伴う解説映像含む) 団体数 13校、受入人数 1,284人

②中学校・高等学校

団体数 52校、受入人数 2,932人

うち、車両説明と走行(雨天中止に伴う解説映像含む) 団体数 3校、受入人数 219人

③専門学校・大学

団体数 35校、受入人数 1,784人

うち、車両説明と走行(雨天中止に伴う解説映像含む) 団体数 4校、受入人数 271人

2 職場体験 3校 6人

- ・博物館の多様な業務を2日間で体験できるプログラムを実施
- ・(株)トヨタエンタープライズ様と共同実施

うち、中学 2校、受入人数 4人、高等学校 1校、受入人数 2人

期間：2日間、9:00-15:00 内容：接客・施設・図書・学芸業務

3 学芸員実習

①館内実習

- ・2024年度は、世界自動車博物館会議日本大会の実施により、実習を7月に5日間、10月に3日間と2回に分け実施

大学数 2校、受入人数 2人

期間：8日間、9:00-17:30 内容：管理・展示・資料取り扱い・保存修復・教育普及・イベント業務

②出講実習

- ・企業系博物館について講義を実施

大学数 1校、受入人数 29人

期間：1日、13:20-16:30 内容：博物館実習(大学内実務実習)

車両整備実績(2024年度)

当館では先人の知恵や工夫を伝えるための車両は動体保存を骨子としており、維持のため日々収蔵車の整備を行っている。

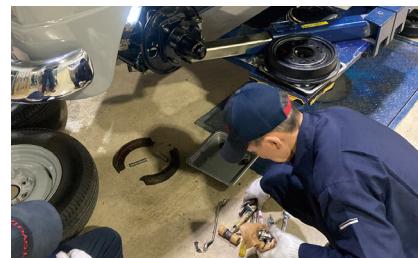
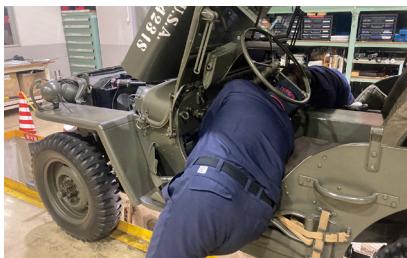
月	車両名	整備内容
4月	ダイハツ オート三輪 SA-6型 (1937)	定期整備と走行確認
	フジキャビン (1955)	フロント足回りオーバーホール
	オースチンヒーレースライト (1958)	定期整備と走行確認
	シボレーコルベア (1960)	ファンベルト滑り、Vベルト交換
	トヨタクラウンエイトVG10型 (1964)	フロントブレーキホイールシリンダーより油漏れ、分解整備
	ニッサン プリンス スカイライン 2000GT-B S54型 (1967)	フューエルフィルターカップパッキン不良、製作交換
	トヨタ ランドクルーザー FJ40V型(1974)	ウォーターポンプより冷却水漏れ、ウォーターポンプ取替
	トヨタスプリンターリフトバックTE61型 (1977)	インジェクター詰まり清掃、燃料タンク汚れサブタンク取付走行
	トヨタ アリスト JZS147型(9000万台記念号車) (1996)	インジェクター詰まり清掃、燃料ポンプ内固定着清掃
5月	トヨタ 2000GT MF10L型 (左ハンドル車)(1967)	定期整備と走行確認
	ホンダ Z N360型(1971)	定期整備と走行確認
	トヨタ セリカXX MA45型 (1979)	ラジエーターより水漏れ、ハンドルにて補修
	トヨタ スプリンター カリブ AL25G型(1982)	リヤブレーキホイールシリンダー錆固定着、オーバーホール
	トヨタ ソアラ UZZ31型 (1994)	フロント左エアーサスペンションよりエア漏れ、エアーサスペンション交換
	トヨタ サイノス コンバーチブル EL54C型(1997)	燃料タンク内錆び、燃料ポンプ内固定着のためサブタンク取付走行確認
	FT-86 Open Concept(B)(2013)	エントランス展示のため燃料抜取りと外観清掃
	トヨタ 86 シューティング ブレーク(2016)	エントランス展示のため燃料抜取りと外観清掃
6月	キャデラック モデルA (1902)	定期整備と走行確認
	フォード モデル A (1928)	火花飛ばず、ディストリビューター内ショート端子部修正
	日産 オースチン A50型 (1959)	定期整備と走行確認
	アルファロメオ GT1300 ジュニア (1968)	定期整備と走行確認
	トヨタ スプリンター トレノ TE47型(1975)	ラジエーターより水漏れ、ハンドルにて補修 室内カビ清掃
	トヨタ クラウン セダン MS123型 (1984)	Cピラー左側クラウン王冠マーク欠損、複製品製作取付
	トヨタ エステマ RFSGK型 (1993)	定期整備と走行確認
	トヨタ クラウン セダン JZS131型 (1995)	定期整備と走行確認
	トヨタ セラ EXY10型 (1995)	ドアショックアブソーバ減衰不良、運転席側ショックアブソーバ交換
	マツダ デミオ DW5W型 (1997)	定期整備と走行確認、室内カビ清掃
7月	トヨダ AA型乗用車 レプリカ (1936)	ホーン音が変化、配線接触不良のため配線修正
	トヨペット クラウン RS型 (1955)	左ウインカーヒューズ切れる、配線不良のため配線取外し展示
	ホンダ S500 AS280型 (1964)	シリンダーへッドより冷却水漏れ、漏れ箇所補修
	パブリカ コンバーチブル UP10S型 (1965)	フロントブレーキホイールシリンダーから油漏れ、ピストンカッピング交換
	トヨタ MR2 AW11型 (1984)	燃料ポンプ作動しないためサブタンク取付にて走行確認
	トヨタ AXV-II (1987)	燃料ポンプ作動しないためサブタンク取付にて走行確認
	トヨタ MR2 SW20型 (1999)	燃料ポンプ作動しないためサブタンク取付にて走行確認
	日産 リーフ ZE0型 (2011)	定期整備と走行確認
	トヨタ メガクルーザー(JAF災害対策指揮車) (1997)	
	トヨタ 救急車 ハイメディック (1997)	夏のイベント「レア車に乗って記念撮影をしよう。」展示車両清掃
8月	チョロキュー モーターズ キューノ (2004)	
	トウフトウク (不明)	
	ダットサン 16型 セダン (1937)	燃料ポンプ吸わず、燃料ポンプ分解整備
	トヨタ AC型乗用車 (1947)	定期整備と走行確認
	クライスラー ヴァリアント (1960)	ネームプレート製作取付
	コミュニケーション (1970)	フロア割れ、補強溶接
	トヨタ マークII ハードトップ GX71型 (1986)	燃料タンク、配管内錆使用不可、サブタンク取付にて走行確認
	トヨタ エスティマ ルシーダ CXR10G型 (1995)	定期整備と走行確認
	トヨタ ハリアー MCU15W型 (1999)	ヘッドライト曇り、磨きコーティング

月	車両名	整備内容
9月	フォード モデルT センタードア セダン (1915)	走行披露用車両、年次点検(駆動部のトルクチェック、各部給油)
	トヨタ AB型 フェートン (1938)	ギャ入り悪い、シフトレーバー部オーバーホール
	トヨタ 2000GT MF10型 後期型 (1969)	リア右側コントロールアームガタ、ゴムブッシュ製作取付
	トヨタ セルシオ UCF11型 (1991)	定期整備と走行確認
	Lexus RX300 (2000)	ヘッドライト曇り、ヘッドライト交換
	トヨタ MR-S ZZW30型 (2007)	定期整備と走行確認
10月	トヨタ AB型 フェートン (1938)	世界自動車博物館会議走行披露車、走行確認
	トライアンフ TR-2 (1954)	燃料ポンプより燃料吸わず、燃料ポンプ整備
	トヨタ 2000GT ボンドカー"" (1966)	世界自動車博物館会議走行披露車、燃料ポンプ吐出量少ない、燃料ポンプ交換
	トヨタ AXV-II (1987)	世界自動車博物館会議走行披露車、走行確認
	トヨタ セラ EXY10型 (1995)	世界自動車博物館会議走行披露車、走行確認
11月	ド ディオン ブートン 1 3/4HP トライサイクル (1897)	定期整備と走行確認
	ベンツ 14/30HP (1912)	エンジン不調、キャブレータ分解清掃
	トヨペット クラウン RS-L型 (1958)	リヤブレーキ固定、オーバーホール
	トヨペット クラウン ハードトップ MS51型 (1968)	定期整備と走行確認
	トヨタ カローラ スプリンター KE15型 (1968)	定期整備と走行確認
	ホンダ NSX NA1型 (1991)	定期整備と走行確認
	トヨタ アルテッツァ SXE10型 (2002)	定期整備と走行確認
12月	シボレー・コルベア (1960)	燃料ポンプより燃料漏れ、燃料ポンプ分解整備
	ダットサン ブルーバード P312型 (1963)	定期整備と走行確認
	トヨタ クラウン MS60型 (1972)	定期整備と走行確認
	トヨタ カローラ TE30型 (1974)	フロントブレーキ引きずり、ブレーキオーバーホール
	トヨタ スターレット Turbo S EP71型 (1974)	リアブレーキホイールシリンダーより油漏れ、分解整備
	トヨタ クラウン セダン MS112型 (1980)	定期整備と走行確認
	トヨタ スプリンター トレノ AE86型 (1986)	インジェクターより燃料漏れ、Oリング交換
1月	トヨペット クラウン RS41型 (1963)	燃料ポンプより燃料漏れ、オーバーホール
	パブリカ 1000 KP30-D型 (1969)	リアブレーキホイールシリンダーより油漏れ、分解整備
	トヨタ クラウン セダン MS85型 (1975)	フロントブレーキ固定、分解整備
	ホンダ シビック SB1型 (1972)	燃料ポンプより燃料漏れ、オーバーホール
	いすゞ ベレットジェミニ (1975)	室内カビ、カビ取り
	トヨタ クラウン ハードトップ MS125型 (1986)	定期整備と走行確認
	トヨタ クラウン ハードトップ MS137型 (1988)	タイヤトレッド面亀裂、タイヤ交換
	トヨタ クラウン ハードトップ JZS143型 (1992)	ブレーキマスター・シリンダーより油漏れ、分解整備
	トヨタ クラウン ハードトップ JZS155型 (1995)	定期整備と走行確認
	トヨタ ヴィッツ SCP10型 (1999)	ヴィッツ25周年記念展示車両清掃
	レクサスLFA(プロトタイプ) (2010)	年パス会員イベント同乗試乗会、走行確認
2月	トヨペット マスター RR型(1955)	フロント、リヤブレーキ固定、オーバーホール
	初代クラウン豪州ラリー (1956)	定期整備と走行確認
	ホンダ バモス TN360カタ (1973)	ブレーキマスター・シリンダーより油漏れ、分解整備
	トヨタ クラウン ハードトップ JZS175型 (1999)	燃料ポンプ吸わず、燃料ポンプ取替
	トヨタ クラウン ハードトップ GRS182型(2004)	ATトランスミッションより油漏れ、油漏れ箇所の確認修理検討中
	トヨタ クラウン GRS200型 (2012)	定期整備と走行確認
	トヨタ クラウン AWS210型(2013)	定期整備と走行確認
	トヨタ クラウンARS220 (2018)	定期整備と走行確認
	トヨタ 2000GT ロードスター (1967)	
	ニッサン スカイライン 2000GT-R KPGC10型(1970)	冬の走行披露見学会、車両走行確認
	Lexus LFA (プロトタイプ)(2010)	

月	車両名	整備内容
3月	フォード モデルGPW (ジープ)(1943)	ブレーキマスター・シリンダーより油漏れ、分解整備
	トヨペット スーパー RHN型(1953)	燃料ポンプより燃料漏れ、オーバーホール
	シボレー コルベット スティングレイ(1963)	冬の走行披露見学会、走行確認
	トヨペット クラウン MS41-S型(1966)	定期整備と走行確認
	トヨタ センチュリー VG20型(1967)	燃料ポンプより燃料漏れ、オーバーホール
	トヨタ クラウン カスタム MS62型(1971)	フロント、リアブレーキホイール・シリンダーより油漏れ、分解整備
	フェラーリ 512BB(1979)	定期整備と走行確認
	トヨタ RAV4 SXA10G型 (1994)	定期整備と走行確認
	ランドローバー ディフェンダー90 (1998)	新規入手車の受入れ検査

■車両整備：小橋 正典、足立 隆博、中田 浩信、生駒 育男、福井 雄二、久保井 利治、矢野 英二、今井 耕介、日谷 浩昭
(学芸・企画1グループ)

車両整備風景



図書室活動実績(2024年度)

1 概況



2 取組み実績

■企画展示

実施期間	内 容	展示書籍
2024.6.1~10.28	(改装工事中)	
2024.11.3~12.25	11/3トヨタ自動車創立記念日にリニューアルオープンをするにあたり、「トヨタ自動車」に関する図書を展示	・図書「トヨタ自動車75年史」他、36点
2025.1.4~2.28	「ダカールラリー」開催に合わせ、盛り上げの一助となるよう、関連図書を展示	・図書「三菱モータースポーツ史」 ・雑誌「AUTO SPORT」他、29点
2025.1.4~3.31	「東京オートサロン2025」開催に合わせ、盛り上げの一助となるよう、カスタム&チューニング関連図書を展示	・図書「リバティーウォークのすべて」他、28点
2025.3.1~5.6	企画展「クラウン70周年」に連動し、関連図書などを展示	・図書「トヨタ クラウン」他、10点 ・雑誌「トヨタ技術」「ニューモデル速報」他、12点 ・ニュースリリース



写真1
「トヨタ自動車」関連図書



写真2
「ダカールラリー」関連図書



写真3
「東京オートサロン2025」関連図書



写真4
企画展「クラウン70周年」連動展示

■イベント

実施期間/日	テーマ	
2024.5.11	<p>自動車カタログ語り隊!第2弾</p> <ul style="list-style-type: none"> 図書室リニューアル前イベントとして開催 4つのテーマ(1. 時代を変えたクルマのカタログ、2. レースで活躍したクルマのカタログ、3めずらしい、レアなカタログ、4.とにかく好きなカタログ)のいずれかに該当するカタログを持参いただき、参加者同志でカタログに対する思いを語っていただいた 	
2024.12.22中止 2025.2.23	<p>自動車カタログ語り隊!第3弾</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生限定イベントとして開催 愛知県内の高校生2名が参加し、図書室のカタログコーナーからお気に入りのカタログを選書、選んだ理由を語っていただいた カタログにキャプションを付けて、図書室内に展示 	
2025.3.22	<p>自動車カタログ語り隊!第4弾</p> <ul style="list-style-type: none"> 社内インフォーマル団体有志8名による、クルマ文化資料室の展示のための選書会実施 「エンジン」をテーマに、時代を象徴するエンジンが掲載されているカタログを年代別に選書いただいた 	

活動年表(2024年度)

4月	1日	日本自動車殿堂コーナーがオープン
	12日	「オートモビルカウンシル2024」出展(4/12~14)
	16日	トヨタ博物館 35周年開館日
	18日	SDGsに関連しフードドライブ活動を実施。防災備蓄品をNPO法人セカンドハーベスト名古屋へお届け
	20日	リアル謎解きイベント「来間さん家の大騒動」が、コース1-3に続き、コース4-6を開始(4/20~6/30)
5月	11日	図書室リニューアル前イベント「自動車カタログ語り隊!第2弾」開催
	21日	クルマ文化資料室 錦絵 展示替え「彩りの人力車～目で見て楽しむ錦絵～」
	30日	「お蔵出し展」連動展示として、文化館エントランスにトヨタMR2を2台展示(5/30~6/30)
6月	4日	リニューアル工事のため文化館3階「図書室」閉鎖(6/4~11/2)
	18日	トはくらぶ会員様限定のレクサス LFA スパイダー同乗試乗会は、雨天のため中止
	25日	常設展示パワーアップ計画1弾、新規3台追加(キャデラック モデルA、ポルシェ 911 2.0 クーペ、アルファ ロメオ GT1300 ジュニア)
7月	1日	トヨタ博物館活動報告書「年報2023」を発刊し、HPに掲載 文化館 全フロア(1-3階、図書室、企画展、クルマ文化資料室、ミュージアムショップ、カフェ)閉鎖(7/1~31)。ミュージアムショップは、クルマ館でサテライト営業
	9日	常設展示パワーアップ計画2弾、新規3台追加(フィアット ヌオーヴァ 500D、パブリカ コンバーチブル UP10S型、ニッサン リーフ ZE0型)
	13日	小学生無料入館 開始(7/13~8/31)
	20日	夏休み企画「クルマ博士になろう!子どもガイドツアー」を開催(7/20~9/1)。7/20~31:ボディースタイル編、8/1~15:ハンドル編、8/16~9/1:ドア編
	22日	愛知県内26の美術館・博物館等に平日限定入館できる「あいち・なごや周遊観光パスポート」発売開始(7/21~3/14)
	23日	クルマ文化資料室 日本ポスター展示替え「国内自動車メーカー 1970~1990年代」 学芸員実習生 大学2校・2名を受入れ(7/23,24,30,31 10/29,31)
	27日	クルマ文化資料室 欧米ポスター展示替え「自動車ポスター名品集」
	1日	文化館再開(図書室除く) 特別展示「夏休みの思い出 レア車に乗って記念撮影しよう!」(8/1~9/1) 開催 「ちいさな図書室」をTINY STUDIO(文化館1階)で開催(8月毎週日曜日)
8月		クルマ文化資料室 錦絵 展示替え「のりもの★いろいろ」
	4日	夏休み企画「科学のびっくり箱!なぜなに レクチャー 目指せクルマの衝撃吸収エンジニア(リニモニアーズ主催)」を開催
	7日	「おえかきトミカ工房」をTINY STUDIO(文化館1階)で開催(8/7~8/31 毎週水曜日と土曜日の計8回)
	13日	JR東海EXサービス会員様限定「副館長とめぐる特別ガイドツアー」8/13,8/15,8/22 3回催行
	22日	職場体験 高校1校・2名、中学1校・2名の学生を受入れ(8/22,23)
9月	7日	企画展「日本のクルマとわたしの100年」開催(9/7~2025/1/13)
	25日	クルマ文化資料室 錦絵 展示替え「日本の移動と情景」



日本自動車殿堂コーナー



クルマ館 常設展示追加



「自動車カタログ語り隊!」



特別展示「夏休みの思い出 レア車に乗って記念撮影しよう!」



「科学のびっくり箱!なぜなにレクチャー」



「おえかきトミカ工房」

企画展
「日本のクルマとわたしの100年」

10月	21日	「クルマづくり日本史」Plus英語版を発刊	
	28日	ながくてアートフェスティバル2023連携展示を開催(10/28~11/4)	
	28日	「2024年世界自動車博物館会議日本大会」開催(10/29~11/1)(会場:トヨタ博物館と富士モータースポーツミュージアム)(トヨタ博物館 休館 10/28~11/2)	
11月	3日	「クルマの図書室」がリニューアルオープン!	
	9日	「2024年世界自動車博物館会議日本大会」オンライン報告会(主催:世界自動車博物館会議実行委員会、全国科学博物館協議会)	
	21日	「FIA世界ラリー選手権フォーラムエイト・ラリージャパン2024」出展協力(11/21~24) クルマ館/文化館エントランスにトヨタ・日産のラリーカー6台 連動展示(11/12~12/22)	
	21日	愛知県「休み方改革プロジェクト」に賛同し、「あいちウィーク」期間に小学生無料を実施(11/21~11/27)	
	26日	クルマ文化資料室 錦絵 展示替え「乗り物錦絵と、犬」 クリスマスツリーでみなさまをお迎え	
12月	21日	トはくらぶ会員イベント「裏ツアー」を開催	
1月	4日	年始の来館者に年始ポストカードをプレゼント(1/4,5)。クルマ館エントランスに、干支のヘビのエンブレムであるアルファロメオ 6C 1750 グランスポルト展示	
	13日	来館者累計800万人達成記念セレモニーを実施し、館長より認定証、乗車記念撮影プレゼント。 800にちなんで、トヨタスポーツ800とホンダS800を展示(1/4~26) 企画展「日本のクルマとわたしの100年」終了	
	16日	職場体験 中学校1校・2名の学生を受入れ(1/16,17)	
	18日	「来館者800万人達成記念WEEK」開催、各日先着100組 合計800名限定でオリジナルグッズをプレゼント(1/18~26)	
	23日	「2024年世界自動車博物館会議日本大会」の報告書(日本語版・英語版)をトヨタ博物館HPで公開	
	28日	クルマ文化資料室 錦絵 展示替え「明治の夜明け ~改印にもご注目~」	
	29日	トはくらぶ会員イベント 第3弾「LFA 同乗試乗会」を開催	
2月	8日	沖縄トヨタ「第65回フルラインアップフェスティバル」出展協力(2/8,9)	
	11日	2月の走行披露見学会 開催(レクサスLFA,トヨタ2000GTロードスター,スカイライン2000GTR) 尾三消防本部主催「避難体験ツアー」を閉館後に一般客200名参加して実施	
	25日	クルマ文化資料室 日本ポスター展示替え「トヨタ クラウン ポスター」	
3月	1日	企画展「クラウン70周年記念展～なぜ70年生き続けているのか～」開催(3/1~8/3)	
	8日	トはくらぶ会員イベント第4弾「布垣シニアキュレーターと巡る館内ツアー×小説『トヨタの子』」を開催	
	11日	クルマ文化資料室 欧米ポスター展示替え「移動の喜び」	
	15日	「コンコルソ デレガンツア ジャパン 2025」出展(3/15,16)	
		小学生無料入館 開始(3/15~4/6)	
		クルマ館3階 日本自動車殿堂コーナー 展示追加(2024 日本自動車殿堂 殿堂者 である Executive Fellow 内山田 竹志氏のパネルとトロフィー)	
	20日	春の走行披露見学会 開催(レクサス LFA,トヨタ 2000GT ロードスター,シボレー コルベット スティングレイ)	



錦絵展示替え「日本の移動と情景」



トはくらぶ会員イベント「裏ツアー」



来館者800万人達成



走行披露会

布垣シニアキュレーターと巡る
ツアー×小説「トヨタの子」欧米ポスター展示替え
「移動の喜び」

企画展「クラウン70周年記念展」



FUJI MOTOSPORTS MUSEUM

はじめに：館長からのご挨拶

10万人のお客様への感謝！そしてこれから…

富士モータースポーツミュージアム 館長 布垣 直昭

2022年10月の開館以来の累計来館者数が2025年2月8日に10万人を超えるました。ご来館いただいたすべてのお客様、そしてこれまで当館を支えていただいた多くの関係者の皆様に、深くお礼申し上げます。来館者数は年々増加傾向にあり、当初予想より早い2年と4ヶ月での達成となりました。

レースイベント開催日にご来館者が多い傾向はありますが、シーズンに適したイベントや企画展示を開催してきた事が、より幅広いお客様のご関心を高める事にもつながりました。そして、ようやくこのミュージアムの存在自体も浸透してきたようで、海外など遠方からのお客様も増えてきた事は、本当にありがとうございます。

ただし現状は、ようやくミュージアムの地盤固めができてきたところで、これからが大事だと思っております。当館展示車の約半数は世界の自動車ミュージアム様や、自動車メーカー各社様からお借りしている車両ですが、そのメリットを活かして毎年の展示車更新により、リピートのお客様にも常に見えたえがある展示充実を図ってまいります。

その一方で、腰をすえた学芸調査やレストア活動を進める事で、ミュージアム本来の質を高め、次世代にモータースポーツの意義や楽しさを伝承していく責務を果たしていきたいと考えております。

モビリティ変革期を迎えており、モータースポーツは自動車産業の次世代技術の実験場の役割も果たすようになっております。かつて130年前のレースで蒸気自動車や電気自動車と競い合いガソリン車が生き残った歴史が、新たな動力源が加わる形で繰り返されようとしています。私達のミュージアムも的確に時代をとらえ進化していくよう努めてまいります。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。



The Golden Age of Rally in Japan

実施日：2024年11月21日(木)～2025年4月8日(火)
場所：豊田スタジアム(ラリージャパン2024)、富士モータースポーツミュージアム

谷中 耕平(トヨタ博物館 学芸・企画1グループ長)
富士モータースポーツミュージアム 長谷川 壮(副館長)

1 企画の狙い

「The Golden Age of Rally in Japan」の企画は、ともにFIAの委員を務めるトヨタ自動車の豊田 章男会長とジーノ・マカルゾ・ヒストリックカー財団(以下、ジーノ・マカルゾ財団)のモニカ・マイランダー・マカルゾ代表が出会い、お互いのモータースポーツへの情熱に共感し、日本でのモータースポーツ文化の盛り上げを一緒に進めようと意気投合したことから始まる。

イタリア・トリノに生まれたルイージ“ジーノ”・マカルゾ氏は、フィアットラリーチームのコドライバーとして1972年のヨーロッパラリー選手権を制覇し、またフィアットX1/9アバルトの開発リーダーを務めてレースに出場するなど欧州のモータースポーツ界で活躍した。プロドライバーを引退した後は、実業家としてスイスの名門時計メーカーであるジラール・ペルゴの経営者などを務めながらも、カーガイとしてモータースポーツに情熱を持ちつづけ、イタリアのモータースポーツ団体の要職を歴任し、ジュニアWRC参戦チームを結成するなどの後進の育成に注力しつつ、ラリーの歴史を伝える貴重なラリー車両を中心にコレクションしていた。

ジーノ氏がこの世を去った後は、妻のモニカ氏の他、親族がコレクションを礎に財団を立ち上げ、財団の貴重なラリーカーは欧州の各イベントで展示されていたが、2022年にトリノ自動車博物館において、財団の車両19台が一堂に会した展示「The Golden Age of Rally」が開催され、時代やレギュレーションで変化した個性あふれるマシン、ライバル同士が盛り上げた熱気など、ラリーの魅力を伝える展示が行われ好評を博した。

親日家のモニカ氏は、ご自身のラリー車両のコレクションを展示してラリーの歴史を日本に伝えたいという思いを持っており、2024年初に豊田 章男会長と出会い、国内外の自動車業界やカーガイが連携してラリー文化を日本に根付かせるきっかけ作りを狙いとして、本企画をスタートさせることになった。



写真1 モニカ・マイランダー・マカルゾ氏

2 展示テーマ、展示車両、展示場所の検討

(1) 展示テーマの検討

本企画は2022年のトリノ自動車博物館で好評を博した「The Golden Age of Rally」を日本で開催するというコンセプトで進めた。

「The Golden Age of Rally」においては、市販車によるラリーが始まった1960年代、軽量でパワフルなクルマによりラリーの高速化が進んだ1970年代、舗装路だけでなく雪道やダート路など様々な道に適応するクルマが登場した1980年代、日本車が台頭してきた1990年代、それぞれの時代を代表する計19台が展示されたが、展示はただそれらを並べるのではなく、若い人に興味を持ってもらうために漫画やコラージュの手法を使ったポップな展示パネルで構成されていた。



写真2 トリノ自動車博物館での展示

そこで「The Golden Age of Rally in Japan」においては、

- ・イタリアでのオリジナルの展示を尊重した展示の色遣いや文字のフォント、写真の使い方とする
- ・「in Japan」であることから、トヨタだけでなく日本の他メーカーも含めたラリー車両を借用し展示する
- ・車両選定においてラリーで鍛えられた技術がフィードバックされた、各時代を代表する市販車ベースの車両を選定することとし、各時代を代表するラリー車両を選びすぐって、それぞれのクルマが持つストーリーを人々に知ってもらい、TOYOTA GAZOO Racingが進めている「モータースポーツを通じたもつといいクルマづくり」のコンセプトとも一致する、互いに切磋琢磨するモータースポーツによって技術が鍛えられ、市販車にフィードバックされていいクルマとなり、私たちの生活を豊かにしてきた歴史を感じてもらうテーマとした。

(2) 展示場所の検討

展示にあたっては、①計10台の車両を展示できるスペースがあること、②高価な車両のため、雨天や風雨にさらされず、警備ができる場所であること、③貴重な車両を展示するからには、たくさんの方に見ていただける場所であることを考慮した。

また、ジーノ・マカルゾ財団の車両はカルネで持ち込むため最長1年の展示が可能であるが、③も考慮すると、同じ場所ではなく場所を変えて展示したほうが好ましいと考えた。

そこで、展示のスタートは全国、全世界から10万人のファンが訪れるWRCラリージャパン2024(2024年11月21~24日)の会場である豊田スタジアムのコンコースとし、ラリージャパン終了後は富士モータースポーツフォレスト内にある富士モータースポーツミュージアムで展示、最後に幕張メッセで行われるオートモビルカウンシル2025(2025年4月11~13日)と、巡回して展示することとした。

ラリージャパンでの展示にあたっては、豊田市役所を中心とするラリージャパン実行委員会と相談を重ねながら、上記①と②の条件を満たし、人の流れが多すぎず落ち着いて車両を見学できる場所という事で、豊田スタジアムコンコース東エリアを選定した。

(3) 展示車両の検討と各車両の解説ストーリー

トリノの「The Golden Age of Rally」で展示された19台を含めてジーノ・マカルゾ財団は27台を所有しているが、トリノからの輸送は船便であっても湿気を防ぐためのバリア梱包など費用がかさむため、台数を6台に絞った。

また「in Japan」の日本車も多数あるが、各時代を代表する市販車をベースとしたラリー車両というテーマに沿って国内自動車メーカー所有の4台を選定した。

各車両の解説にあたっては、コアなラリーファン向けの各車の戦績や採用された技術のみを述べた無味乾燥なものではなく、一般的のクルマファン向けに、そのクルマが登場した時代背景や、逆にクルマが時代に与えた影響、ラリー参戦がクルマに与えた影響などの解説の他、ライトファン向けに各車にキャッチフレーズを付けることで、興味を持つてもらえるようなバックパネルとした。また、バックパネルはビジュアルメインで文字を最低限にし、各車両の解説文は別途バナーとし、海外ビギナー客を考慮した日英併記とした。

各展示車両の解説文言は、ジーノ・マカルゾ財団のフェデリカ・エレナ学芸員と推敲を重ねて完成させている。



写真3 豊田スタジアム(ラリージャパン)の展示場所



写真4 トヨタ博物館への車両輸送

ジーノ・マカルゾ財団の車両から下記6台を選定した。

- ・1960年代を代表するクルマとして、多くの地域で長期間販売され、市販車でラリー出場することを可能としたBMC Mini Cooper S(1966年)。

キャッチフレーズは「モータースポーツ界の小さな巨人」。



写真5 Mini Cooper S(1966)



- ・1970年代を代表するクルマとして、エンジンをミッドシップに搭載するなどWRCで勝つために開発された市販車で、ガンディーアによる先鋭的なデザインが特長のLancia Stratos(1976年)と、逆に市販車をベースにドア数やボディ形状を変更し、後に市販されるスポーツモデルに技術がフィードバックされたFiat 131 Abarth Gr.4(1978年)を、ラリーの高速化が進んだ時代のクルマとして選定した。

キャッチフレーズはそれぞれ「WRCのために開発されたラリー専用車」、「WRCで鍛えられた量産車」。



写真6 Lancia Stratos(1976)



写真7 Fiat 131 Abarth Gr.4(1978)



- ・1980年代を代表するクルマとして、ラリーで勝つためにエンジンにターボを装着しミッドシップ化、後にスポーツモデルにフィードバックされたRenault R5 Turbo(1981年)。
- ・雪道や未舗装路など様々な路面を走破するラリーのために開発され、乗用車のフルタイム4WDのさきがけとなったAudi Quattro Gr.4(1981年)を選定した。

キャッチフレーズはそれぞれ「魔改造ハッチバック」「4WDラリー車のパイオニア」。



写真8 Renault R5 Turbo(1981)



写真9 Audi Quattro(1981)



写真10 Fiat Abarth X1/9 Prototipo(1974)



日本の自動車メーカーからの出展車両

- 日本のラリー車両がWRCを席捲した1990年代を代表するクルマとして、4WD+ターボ化された市販車をベースにした車両であり、ドライバータイトルとマニュファクチャラーズタイトルのダブルタイトルを2年連続で獲得したセリカGT-FOUR(ST185)(1993年)。キャッチフレーズは「WRCで鍛えられたスポーツカー」。



写真11 セリカGT-FOUR(ST185)(1993)



- ・軽量コンパクトなボディと耐久性からサファリラリー等で活躍し、大排気量のライバルと渡り合ったダイハツシャレード(G100)(1993年)。キャッチフレーズは「リトル・ジャイアントキリング・カー」。

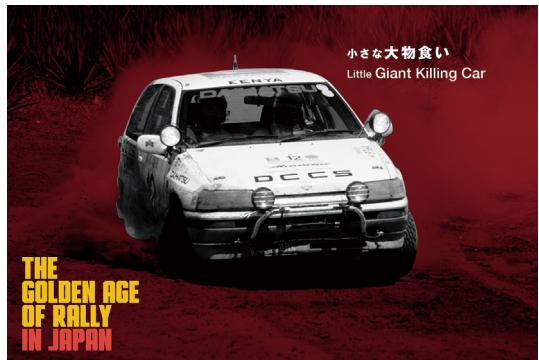


写真12 ダイハツシャレード(G100)(1993)

- ・スバル伝統の4WDにターボエンジンを組み合わせ、WRCで日本車が活躍した黄金時代を代表するスバルインプレッサ555WRC(1998年)。キャッチフレーズは「日本車の黄金時代」。

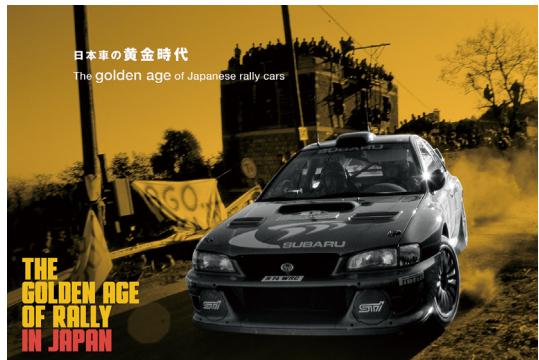


写真13 スバルインプレッサ555WRC(1998)

- ・WRCの規則が競技専用車の規定に変わった後も、市販車をベースとした車両での挑戦にこだわった三菱ランサーエボリューションVII(2001年)。キャッチフレーズは「究極のグループAラリーカー」。

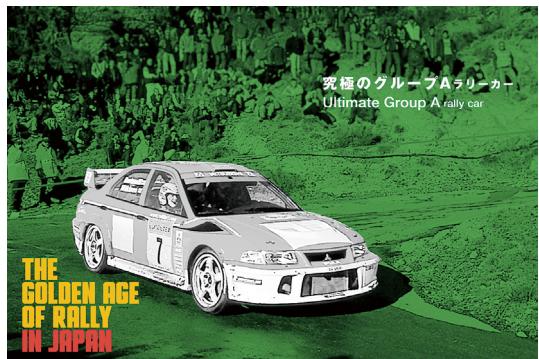


写真14 三菱ランサーエボリューションVII(2001)

上記国内自動車メーカーとは、クルマファン作りという共通の目標のもと、過去、ラリージャパンや全日本ラリーでのイベントを共同で実施していた関係性があったため、本企画の趣旨にも賛同、車両を出展していただいた。

各社のご協力に厚く感謝申し上げる。

(4) 車両のメンテナンス

ジーノ・マカルーゾ財団が所有するラリー車両はいずれも動態保存されており、3ヵ月毎に車両を整備して走行させる必要がある。ジーノ・マカルーゾ財団で車両を整備し、若いメカニックの育成も行っている、元アバルトのメカニックであるドメニコ・ファザーノ氏が来日し、日本での展示期間中も整備、走行させるため、トヨタ博物館と富士モータースポーツミュージアムの整備メンバーに、メンテナントレーニングを行った。

トレーニングを行った6台はメーカーも異なる上に競技車両特有のパーツやメンテナンス内容もあったが、整備メンバーの経験値を増やすことができた。また、2025年1月25日と、3月15日に富士モータースポーツフォレストでメンテナンス走行を実施。特に3月15日の走行確認会では、多くのメディア、観客に楽しんでいただくことができた。



写真15 メンテナントレーニングの様子

3 ラリージャパン2024での展示

ラリージャパン2024の豊田スタジアム会場には11月21日～24日の4日間で計80,100人が来場した。

「The Golden Age of Rally in Japan」の展示エリアにも多くの人が訪れ、1960～90年代のラリーを知る世代からは「ストラトスを間近に見られてよかったです」「今までいろいろなラリーイベントに行ったが、これだけ貴重なクルマが揃っているのは初めて」という感想があった。こういったコアファンだけでなく、親子連れで子供にラリーの歴史をお話しくださいました。

この他、ラリージャパンは世界ラリー選手権の最終戦であるため、出場チームのメンバーやモータースポーツ関係者も多数訪れ、ラリーの歴史を実車で学び、中にはかつて自分が関わった車であることをお話ししされて久々の再会を果たすベテランメカニックの方もいた。



写真16 ラリージャパン会場の様子



また、世界的に見ても貴重な車両が集まって展示されていることもあり、CAR GRAPHICやAUTO SPORT、RALLY PLUS、Car Watch、ベストカーなどの自動車メディア各媒体で取り上げられた。

特にCAR GRAPHICは、動態保存車両であることを活かしたサーキットでの走行インプレッションを含めて、各展示車両や企画について深堀りされた記事で紹介いただいた。

これらの取材においては、ジーノ・マカルーゾ財団のモニカ・マイランダー・マカルーゾ代表及び、メカニックのドメニコ・ファザーノ氏にご対応いただいた。お二人とも豊田スタジアムでのスペシャルステージ観戦の他、スタジアム外の山のスペシャルステージ観戦も行い、集まるラリーファンや、道中(リエゾン)を移動するラリーカーを歓迎する観客の様子を見て、日本のラリー熱、ラリー文化が広がりつつあることを感じていた。親日家のマカルーゾ代表が、日本での自分のコレクションを用いた企画展示を感慨深く見つめる様子が印象的であった。



写真17 CAR GRAPHIC TVの取材



写真18 走行インプレッション撮影



写真19 スペシャルステージ観戦

4 富士モータースポーツミュージアム(以下、当館)での展示

(1) 展示車両および展示場所の検討

当館での展示期間は2024年11月27日(水)～2025年4月8日(火)の132日間で、計22,220人のお客様にご来館いただいた。期間中の来館者数は対前年比167%を記録し、「厳冬期=閑散期」の固定概念を覆す結果となった。

展示テーマについては、豊田スタジアムで開催されたラリーJAPAN2024に準ずるため説明は割愛させていただく。なお展示車両は、ジーノ・マカルゾ財団貸与車両6台に加えて、当館常設展示車両(4台:写真20～23参照)の構成とした。当館には企画展コーナーがないため、2階常設展示室のゾーン7(現在のラリーに通じる地元連携モータースポーツの祖、タルガ・フローリオとミッレ・ミリア)、ゾーン8(世界最高峰レースへの挑戦・ラリー編)およびゾーン9の一部(24時間耐久レースの世界・昼夜走り続けて分かること)を使用して10台分の展示スペースを捻出した。また、バックパネルや車両解説バナーは本企画展エリアの象徴となり、一方で展示室壁面の既存の副展示物を隠す役割も果たしてくれた。

ちなみに当館常設展示車両(4台)の解説文バナーは、豊田スタジアムで開催されたラリーJAPAN2024のバナーと同時期に制作することで、制作費用の削減と制作会社のご負担軽減を図った。



写真20 トヨタ セリカ ツインカムターボ TA64(1984)

写真21 トヨタ セリカGT-FOUR ST185(1995)
<藤本 吉郎氏より借用>写真22 三菱ランサーエボリューションIII(1995)
<三菱自動車工業株式会社より借用>写真23 スバル インプレッサ555(1996)
<株式会社SUBARUより借用>



写真24 企画展示車両+バックパネル+解説バナー

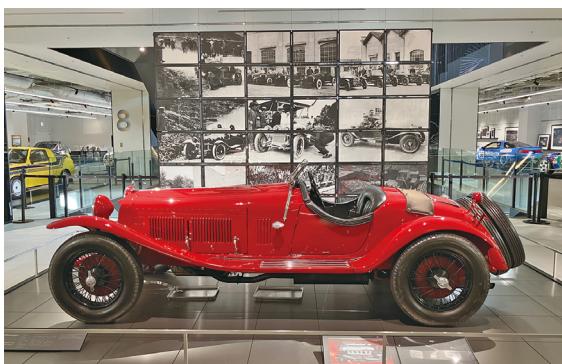


写真25 通常時の展示車両+バックパネル

(2) 展示車両やバックパネルの搬入について

当館は法定点検日を除き年中無休のため、展示車両の点検や返却に伴う入替え作業は営業前後の時間を利用していた。ただし、今回は当館の既存展示車両4台の搬出作業に加えて、ジーノ・マカルーゾ財団貸与車両6台および展示バックパネルの搬入作業を考慮し、企画展直前の2日間連続で臨時休館日を設けた。各々の主要タスクは以下のとおりである。

1日目(11月25日)午前中：豊田スタジアムから撤収。当館の既存展示車両4台の搬出準備。

午 後：ジーノ・マカルーゾ財団貸与車両6台と展示バックパネル積み下ろし。当館の既存展示車両4台を積載車に積み込んでトヨタ博物館へ返却(定期点検のため)

2日目(11月26日)終 日：当館展示室への車両搬入や展示バックパネルの設営

なお上記日程で全作業が完了できたのは、豊田スタジアム撤収をはじめ愛知県側の全作業をサポートいただいたトヨタ博物館メンバーのおかげであり、厚く感謝申し上げる。

(3) ジーノ・マカルーゾ財団貸与車両の走行確認について

前述のとおり、ジーノ・マカルーゾ財団貸与車両6台は動態保存車両である。今回の貸与契約にあたり「3ヵ月に1回の頻度で走行確認を行うこと」との条件が付与されていた。そこで当館展示期間中の2025年1月25日と3月15日に走行確認会を実施した。

走行確認会の目的は、あくまでも各車両のコンディションチェックであり、お客様に楽しんでいただくことは主目的ではなかったことを強調しておく。各回とも無事終了したが、今後に向けた課題が見えた貴重な機会でもあった。なお、走行確認会の円滑な遂行のために、事前整備と当日運営でトヨタ博物館・谷中グループ長と同館整備室メンバーの協力を仰いだ。重ねて感謝申し上げる。

①2025年1月25日(第1回走行確認会)

当館にとって6台の走行確認は初めてであること、万一の車両トラブル発生時の安全担保が最優先であることを考慮し、富士スピードウェイ(以下、FSW)のピットと本コースの一部(セクター3～コントロールセンター手前)を往復する方式で走行確認会を実施した。なお当館展示場からFSWピットへの各車両の移動は、チャーターした積載車2台を用いた。また厳冬期のエンジン始動は困難なことがあらかじめ予想されていたので、FSWピット内に可搬式石油ストーブを持ち込んで少しでも周囲の気温を上げるように努力した。しかし、電子制御燃料噴射装置を採用しているAudi Quattro以外は冷間始動に手間取ることが多く、スケジュール通りの進行にはならなかった。

何が起こるかわからないため「非公開」開催で良かったと考えている。なお、一部の自動車専門マスコミご関係の方々には走行確認会の概要を事前通知した上で、当日FSWにお越しいただいた。その理由は、プロの視点で記録映像を残していただきたかったことと、当館スタッフは各車両に掛かり切りで写真や映像を残す余裕はないと考えたからである。寒空の下、数時間にわたり根気強くご取材いただいた上に、映像を編集下さったご関係者の方々へ改めてお礼申し上げる。

誤算だったのは、走行確認会の取材記事や映像がYouTubeで公開されると、一般のお客様から「なぜ事前告知しなかったのか。ひいきではないか」とお叱りを頂戴したことである。ご取材いただいたマスコミの方々も、掲載にあたり“走行確認が主目的のため非公開”である旨を明記されていたが、そこが読み落とされてしまったものと思われる。「走行確認会=広く公開されるもの」という図式が深く定着していることを思い知らされた。



写真26 FSWピットに整列。1台ずつ走行確認を実施



写真27 Mini Cooper S



写真28 Fiat Abarth X1/9 Prototipo



写真29 Renault R5 Turbo



写真30 Fiat 131 Abarth Gr4



写真31 Lancia Stratos



写真32 Audi Quattro

②2025年3月15日(第2回走行確認会)

2回目の開催となることや、一般公開も考慮し、開催場所はFSW敷地内のウェルカムセンター(以下、Wel-C)の周回路を選定した。一般公開とした時点で、お客様の安全確保が最優先事項となる。そこで、Wel-C担当者と何度も打合せを重ねて、下記の検討と必要な備品を準備した。

- ◇当日までの告知方法(当館・富士モータースポーツフォレストのホームページやSNS)
- ◇開催可否判断のタイミングと告知方法(中止の判定は、何日前に実施するのか)
- ◇三角パイロンやチェーンを用いた走行エリア／観覧エリアの明確な区分

- ◇交通整理を担当するスタッフ向けのトランシーバーや警備用誘導灯などの手配準備
- ◇関連スタッフ全員参加(リモート)、コアメンバー(面着)による事前説明会の実施

今回の走行確認会もトヨタ博物館・整備室メンバーの協力を仰ぐとともに、当館にセリカGT-FOUR ST185をご貸与いただいている藤本吉郎氏(株式会社テイン・専務取締役)から『貴重な機会なので、ご貸与中のセリカも一緒に走行確認させてほしい』との有難いお申し出を頂戴したこともあり、同社開発課・藤井氏に走行前・後整備と当日運転をご依頼した。ご来場いただいたお客様には、ジーノ・マカルゾ財団の6台と、藤本氏ご貸与車両1台の合計7台の走行をご見学いただけた。格別のお取り計らいをいただいた藤本氏、お忙しいところ2日間にわたり当館へご足労いただいた藤井氏に厚く御礼申し上げる。

事前告知は第2回走行確認会の半月前となる2月27日に実施。走行会当日は500人近くのお客様にご来場いただけた。また事故なく終了するなど「表面上は成功」を収めたが、二転三転の天気予報に振り回されていたのが実態である。2月末に掲載したホームページのご案内では、3月15日を開催日、雨天順延日は翌16日とし、順延有無は3月14日のお昼までに決定予定と掲載していた。3月12日時点では「両日とも雨天確定」の予報だったので、暫定的に【中止】の判断を下した。ところが13日お昼時点では「15日曇り、16日雨」の予報に変化したため、【15日開催。16日なし】の判断に切り替えて14日に追い込みをかけたのが実態である。

また、前掲のご案内に記載した「順延有無は3月14日のお昼までに決定予定」の最終結果を、ホームページやSNSで告知しなかったのは失敗であった。当館スタッフは“便りのないのは、予定どおり実施すること”と捉えたが、一般のお客様には通じなかつた。当館代表電話に20件ほど「開催有無の問い合わせ」があり、担当スタッフに大きな負担をかけてしまった。

さらに当日の天気予報が「走行確認中の14:30頃から降雪見込み」と急変したため、11:00過ぎの時点でイベント開始時刻を30分繰り上げ13:30スタートに変更。当日お昼前にホームページやSNSに緊急告知を掲載し、当館館内放送で繰り返し放送した。結果的に、降雪前に全車の走行確認は無事終了し、ご来場されたほとんどのお客様にもご満足いただけたが、SNSの緊急告知をチェックされなかつたお客様から「開始時間に間に合わず、前半に走行した車両を見ることができなかつた」とのクレームを頂戴した。走行確認会終了後、予報通り雪が降ってきたため、繰り上げ開催した事情はご理解いただけたが、お客様への申し訳ない気持ちは今も残り続けている。

当館は標高580mの山のふもとに立地しているため、平地に比べて天気予報が大変難しいことを痛感した。次回からは(1)天候が落ち着くシーズンに走行イベントを企画実施、(2)順延するなら1週間後、(3)最大の目的は展示車両のコンディションチェックの3点を考慮しつつ、こまめに“開催判断状況”を告知してお客様にご満足いただけるように努めたい。



写真33 会場案内図(自動車で来場されるお客様を考慮し、大判ポスターを作成)



写真34 積載車で会場入りしたLancia Stratos(一部車両は牽引で会場入り)



写真35 Wel-C広場に整列した車両たち



写真36 整列状況を上階から撮影



写真37 ご来場されたお客様



写真38 最終点検中のFiat 131 Abarth Gr.4



写真39 暖機運転中のLancia Stratos



写真40 Lancia Stratos



写真41 Mini Cooper S



写真42 Renault R5 Turbo



写真43 Audi Quattro



写真44 Fiat 131 Abarth Gr.4



写真45 Fiat Abarth X1/9 Prototipo



写真46 セリカ GT-FOUR ST185

(4) 当館企画展をご覧になられたお客様の声

当館スタッフがお客様から直接お聞きしたコメントを以下に列挙する。憧れや思い出が深い車両ということもあり、お褒めの声／カイゼンを促す声ともに、お客様の期待の高さがうかがえるコメントが多かった。

①お褒めの声

- ・ストラトスを見るのを楽しみに来た!
- ・ラリージャパン会場には行けなったが、ここ(注:当館)で見られてよかったです
- ・ストラトスを見られる機会はこれが最後と思って来た
- ・アウディクワトロを実際に見ると、想像していたよりも大きくて驚いた
- ・昔、ストラトスやルノー5ターボをプラモデルで一所懸命に組立てた思い出がある。実車を見ることができてとても嬉しい
- ・2月下旬にルノー5ターボのプラモデルが再販される。製作の参考として実車を見に来た

②カイゼンを促す声

- ・第1回走行確認会(1月25日)を知らずにご来館されたお客様から「残念」というお声を頂戴した。(FSWに入場すれば遠くからだが見ることができると伝えたところ、FSWへ入場された)お帰りの際に当館へお立ち寄りいただき「すごくよかったです」との声をいただいた。
- ・第2回走行確認会(3月15日)の告知で“館内展示はありません”との記述がなかった。「午前中は館内で見ることができと思っていた。館内展示の様子を撮影したかったので、館内展示がない」ことをホームページやSNSに明記してほしい。(注:15日当日、9組のお客様が当館チケットを購入なさらずにご帰宅された)

5 おわりに

ラリージャパン2024(80,100人)、富士モータースポーツミュージアム(22,220人)、さらにオートモビルカウンシル2025(44,963人)でも開催された「The Golden Age of Rally in Japan」は延べ147,283人のお客様にご覧いただくことができた。

ラリーはサーキットではなく公道を走行し、町なかの広場で車両を整備し、チームメンバーとも交流できる特性から、純粋なモータースポーツ興行というだけでなく、いいクルマづくりの場、クルマファンづくりの場、町おこしのイベントという様々な可能性を持ったモータースポーツとして広がりを見せつつある。本企画は、国内外の自動車好きと連携して、ラリーを通じた“もっといいクルマづくり”的歴史を伝え、クルマファンを増やす活動になったと考えている。



写真47 モニカ・マイランダー・マカルーゾ氏との記念写真(左:豊田スタジアム 右:富士モータースポーツミュージアム)

富士ファンクルーズ「1960年代から90年代の日本の名車」開催 ～世界自動車博物館会議 日本大会との連携企画～

実施日：2024年11月2日(土) 場所：富士モータースポーツフォレスト ウェルカムセンター駐車場

富士モータースポーツミュージアム 稲富 克彦

1 はじめに

富士モータースポーツフォレスト主催の「富士ファンクルーズ」(以降、FFC)は、共通のクルマや、趣味を持つ方々の交流の場として、2022年秋の富士モータースポーツミュージアム開館当初から継続開催しているイベントである。今回は、FFCスペシャル版として、世界自動車博物館会議 日本大会(以降、WFFMM)と連動させ、海外の自動車博物館関係者に興味をもってご見学いただけるミーティングを企画することになり、テーマを「1960年代から1990年の日本が世界に誇る名車」として開催した。

2 従来のFFCについて

第1回FFCテーマ「スポーツカー」(写真1)に始まり、車両ジャンル別、国別など様々なテーマで計8回実施。これまでに集まったクルマは180台／参加人数253名と、一開催あたり平均して23台／32名程度のものであった。(写真2)当初の開催目的として、富士の麓に開業したホテル&ミュージアムの認知度向上や、ランチ&展示見学を促すなど、集客向上を目的とした試行的な施策であり、参加費として1台5,000円(+同伴者分は別途)をいただき、ランチ代、入館料、場所利用料などに充てていた。

参加いただいた方々の感想をうかがうと、施設ご利用と共に、参加者どうしでのクルマ談義や賞典を用意したコンクール・デレガンス(審査／受賞式)で大いに盛り上がりご満足された一方で、遠方から富士の麓までの往路に有する時間や高速料金、ガソリン代の負担が大きく、参加台数(参加者)の向上には、開催テーマや実施コンテンツの設定、それに伴う参加費の見直しなどの課題も見えてきた。



写真1 第1回テーマ「スポーツカー」



写真2 第6回テーマ「イタリア車」

3 FFCスペシャル「1960年代から1990年の日本が世界に誇る名車」成功に向けた工夫

FFCスペシャルを、WFFMMツアー最終日を飾るイベントとして相応しく、且つ参加希望車が、これまでの平均を大幅に上回ることを目標に、テーマ選定、参加条件を見直し、以下のように企画した。

- ・テーマ「1960年代から1990年の日本が世界に誇る名車」とし参加車両を募った。

狙い：海外での日本の旧車人気が高まる中、本国での旧車の存在、保有者の熱い想い、その実態をWFFMM出席者へ訴求する。

- ・WFFMM同時開催記念として「参加費は無料」とした。ただし交通費は、自己負担。
狙い：WFFMM運営事務局が開催場所の使用料金を負担することで、参加者の費用負担を最小限とし1台でも多くの参加を促す。
- ・WFFMM参加メンバーが審査に加わるコンクール・デレガンスを実施し、各賞典を用意。
狙い：日本の旧車保有者にとって、自慢のクルマを海外の博物館関係者へお披露目、評価いただく絶好の機会を設ける。

4 当日雨模様の中での開催

テーマ選定、参加条件も功を奏して、応募総数78台／参加人数125名と、これまでにない多くの参加応募があったが、当日大雨となる予報を受け、急遽、開催場所を変更。雨宿り可能なウェルカムセンター建屋と隣接する駐車場で決行した。悪天候により最終参加台数57台／人数86名と縮小したが、WFFMM出席者100名、運営スタッフを含めると総勢200名程度が、一同に会する大規模なFFCとして、開催当日を迎えることになった。

手入れが行き届き、ワックスの利いた旧車のボディーが雨粒を奇麗に弾く姿は見学者を魅了。また雨が降りしきる中、参加車両を一台一台紹介する際も、みな傘を差し熱心に耳を傾け、時には参加者と見学者がクルマを前に熱くクルマ談義を始めるなど、雨を物ともしない「クルマ愛」や「日本の旧車へのリスペクト」への強い想いが溢れた会場となった。(写真3)



写真3 雨の中で熱いクルマ談義

5 白熱したコンクール・デレガンス審査

【審査員として参加した 富士モータースポーツミュージアム館長 布垣直昭 談】

この日は世界の目線で日本車を観るという意味において、偶然も重なり大変貴重な機会ともなった。クラシックカー保護を目的とする国際機関である、FIVA (Fédération Internationale des Véhicules Anciens)の関係者もこのイベントに同席されたことから、普段欧米でコンクール・デレガンスの審査をやっておられるFIVA会長、そしてWFFMM会長ともご一緒しながらの審査になったからだ。私も、今回の日本大会の主催代表として審査に参加したが、トヨタ博物館主催のクラシックカーフェスティバル等で審査をしてきた経験はあったものの、こうした世界レベルの審査員と3人で議論しながら賞を選定する過程そのものも大変刺激的で勉強にもなった。

結果としてこれまでのトヨタ博物館での評価基準と大きな違いはなかったが、審査対象車両の時代背景や、オーナーの保有ストーリー、そして部品にいたるまでオリジナルが保たれているか、といったこだわり度合いの強さが並々ならぬものであることを再認識した。FIVA賞に選ばれたホンダ アコードのオリジナルコンディションの良さは、審査員全員が一致するところだった。WFFMM賞に選ばれたチェイサーは、むしろオーナーの親子に渡って引き継がれたストーリーが審査員の心を打つことも大きかった。

一方で、海外に輸出されてこなかった軽四輪をはじめ、欧米の人たちが見慣れない日本の旧車自体が、彼らの目にはとても新鮮に映ったようで、スズキのフロンテクーペや、マツダのAZ-1などは人気だった。これは欧米の人たちにとって、マイクロカーは廉価なコミューターという意識が強い中、スポーツクーペを凝縮したようなコンセプトからして新鮮だったのかもしれない。



FIVA賞
Federation Internationale Vehicles Aniens AWARD
ホンダ アコード(1980)



WFFMM賞
Word Forum Motor Museums AWADO
トヨタ チエイサー(1994)



オーディエンス賞
ユーノス コスモ(1994)



富士モータースポーツフォレスト賞
ニッサンシルビア(1965)



富士モータースポーツミュージアム賞
トヨタ2000GT(1969)

6 これからのFFCについて

通常の富士ファンクルーズは、翌月の12月8日(日)に「女性ドライバー」代官山T-siteモーニングクルーズ×富士ファンクルーズのコラボ企画として開催。都内代官山から富士までのドライブを楽しみ、富士スピードウェイ体験走行(写真4)、ウェルカムセンター記念撮影(写真5)、ホテルランチ(写真6)、芝生広場コンクール・デレガンス(写真7)、メーカー協賛豪華参加賞付きと、盛りだくさんのコンテンツを準備した上で参加費8,000円(同伴者5,000円)で募集した結果、30台/52名と賑やかなイベントが実施できた。このように付加価値を充実させたことで、高額な参加費でもお客様はご満足楽しんでいただけたのである。

ただし、この盛りだくさんのFFC運営は、対応スタッフの高負荷、運営費の増加で主催側として持続的にやれないと判断。2025年以降の新生FFCは、クルマ好きが参加費無料で自然に集まれる場の提供(新名称: Cars&Coffee FUJI)に原点回帰する。一方で、コンテンツによっては富士モータースポーツフォレスト傘下の施設と連携し、ある程度の収益を見通せる大規模なイベントに格上げするなど、二極化を進めている。どちらにせよ「クルマ好きのすそ野拡大」が最大の目標であり、富士の麓に広がるモータースポーツ施設が主催するイベントとして、今後もクルマ好きに注目いただける施策として取り組んでいきたい。



写真4 富士スピードウェイ体験走行



写真5 ウェルカムセンター記念撮影



写真6 富士山を眺めながらホテルランチ



写真7 芝生エリアでのコンクール・デレガンス

企画統括：星野 雅弘氏、青木 知子氏(カルチュア・コンビニエンス・クラブ)／稻富 克彦(富士モータースポーツミュージアム)
運営支援：Fan Terrace/FMMスタッフ

常設および企画展示車両に連携したトークイベントによる コアファン獲得とFMMの認知向上

期間：2024年5月～2025年3月 場所：富士モータースポーツミュージアム展示場

富士モータースポーツミュージアム 小宮山 泰央

1 はじめに

富士モータースポーツミュージアム(以下 FMM)にはモータースポーツに特化した車両が展示されていることから、富士スピードウェイ(以下 FSW)でS-GTなどの大きなレースイベントがあるときの来館者は増えるが、残念ながらそれ以外の時期は集客が少なく、更なる認知活動と魅力向上が必要と考えている。

FMMならではの展示車両の特徴を活かした企画展や、関係者による講演や特別解説を行うことで、往年のファンやリピーターの獲得、さらにはメディアによる発信効果を狙い、認知と集客向上に繋げる活動を企画・実施した。

各企画では、既に多くのメディアで発信されているドライバー目線だけでなく、展示車両の奥底を熟知している関係者にご登壇いただくことで、ミュージアムとしてのより高い付加価値に繋げられるように工夫した。

2 取り組み内容

(1) 富士GC特別展 車両展示とレジェンド関係者への公開取材

目的) 過去に、富士スピードウェイで最も人気を博し、富士の象徴ともいえる富士グランチャンピオンレースシリーズ(以下富士GC)参戦車両を集めた「富士GC特別展」を5月から8月末まで開催。展示車両に所縁があり、誰もが認める往年のエンジニア関係者と、知名度の高いメディアを招いて公開取材を行うことで、一般的なトークショーとは一線を画し、ミュージアムとしての文化的な存在価値を向上、雑誌メディア掲載によるFMMの認知と集客効果を狙った。

展示車両) ①1974 マーチ74S ②1977 紫電77 ③1979 MCS

展示品) 当時のレース写真、スライド映像、ドライバーおよび関係者の賞典(トロフィー、メダル等)

講演日時) 8月5日(月) 第1部 10:30～ 第2部 13:30～

登壇者) レーシングエンジン・チュナー 松浦 賢氏(株式会社ケン・マツウラレーシングサービス 顧問)
レーシングカー・デザイナー 由良 拓也氏(ムーンクラフト株式会社 取締役社長)

テーマ) 第1部 「富士GCシリーズを振り返る 紫電とMCSの開発秘話」

インタビュアー 元カーマガジン編集長 藤原 よしお氏(CAR GRAPHIC, ENGINE等に寄稿)

第2部 「富士GCの技術を向上させたエンジンと空力」

インタビュアー モータージャーナリスト 大内 明彦氏(レーシングオン、Nostalgic Hero等に寄稿)

結果) 来館聴講者 各回 約40人 うち講演会目的で初来館された方々 20人

掲載メディア 「Nostalgic Hero 2024年 10月号」カラー4ページ

「CAR GRAPHIC NEO CLASSIC Vol.9」カラー4ページ

「AUTO MESSE WEB」他

所感) 来館者は、当時実際にレースを見ていた方、参加されていた関係者をはじめ、就職が内定している学生、遠く新潟から日帰りで来られた方など、幅広い世代の方々の関心の高さが伺えた。しかしメディア配信後の展示期間が短く、より効果的な広告効果を狙うには、車両展示開始後の早い段階でイベントを行うことが重要と認識した。しかし、FSWに所縁のあるGC車両を特別展示したこと、レース関係者への当館認知度と期待感は明らかに向上した。今後も継続的に開催することで、一層の集客確保に繋げたい。



写真1 1974 マーチ74S



写真2 1977 紫電77



写真3 1979 MCS



写真4 GC賞典



写真5 当時写真掲示(矢神 徹氏提供)



写真6 写真スライドショー(矢神 徹氏提供)



写真7 松浦 賢氏



写真8 由良 拓也氏



写真9 左から藤原氏、由良氏、松浦氏、大内氏

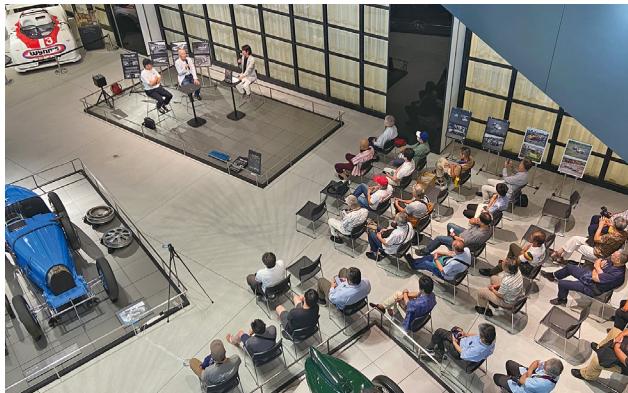


写真10 講演風景



写真11 講演後の集合写真

(2)開発担当者によるトヨタのモータースポーツ車両解説

目的) 雑誌「Nostalgic Hero」を発行している芸文社主催の愛好家向けイベント「ハチマルミーティング」がFSWで開催。週末に実施している営業時間延長(19時まで)を有効に活用すべく、400台を超えるエントリー車両オーナーをターゲットにイベント前夜祭と銘打ち、協賛企画として実施。

*ハチマルミーティング: 1980年代、90年代の車両を中心とした愛好家の集まるイベント

講演日時) 11月2日(土) 17:30~

登壇者) トヨタ自動車(株)OB 岡本 高光氏 (モータースポーツエンジン設計担当)

テーマ) 「開発担当者によるトヨタのモータースポーツ車両解説」

イーグルマークⅢ、セリカ(ST185)、TS020の3台(いずれも岡本氏が担当)

結果) 聴講者 約30人 うち芸文社イベント参加者6人

所 感) 一般のお客様のご入館が落ち着いた時間帯に開催したため、実際の車両に触れながらゆっくり解説を聞くことができたこともあり、多くのファンや家族連れの方々にご満足いただける講演となつた。また、翌日もイベント会場で当館のPRを積極的に行つたことで、多くの方々にご来館いただけた(イベント会場からのご来館者56人)



写真12 岡本 高光氏



写真13 車両解説 ST185 セリカ



写真14 車両解説 TS020

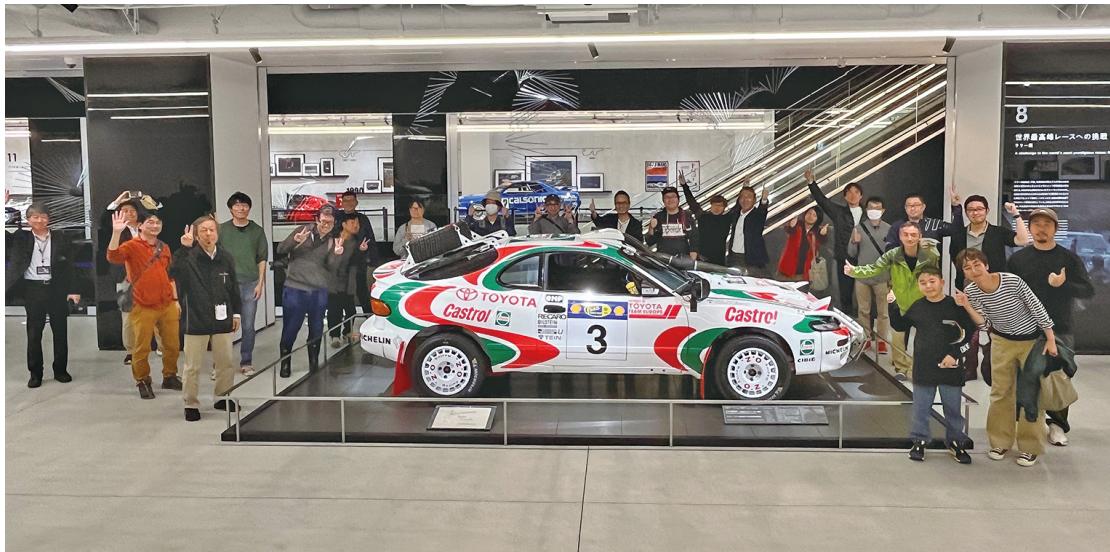


写真15 講演後の集合写真

(3) 多摩川スピードウェイ特別展 車両展示と講演会開催

目 的) 戦前の多摩川スピードウェイで開催されたレースに出場し、総合優勝を飾った 1929年式インヴィクタ4 1/2の実車借用が10月から1月末まで実現、「多摩川スピードウェイ特別展」を開催した。知見者による講演会を開催することで、車両と多摩川スピードウェイの歴史を学び伝える。

講演日時) 12月15日(土) 13:00～

登 壇 者) 「多摩川スピードウェイの会」会長 小林 大樹氏(CAR GRAPHIC 創刊者 小林 彰太郎氏のご子息)
インタビュアー 自動車ジャーナリスト 西川 昇吾氏(ベストカー、CARTOP等に寄稿)

テ ー マ) 「1929年インヴィクタと日本のモータースポーツの夜明け」
車両解説とあわせて戦前の自動車文化と歴史についても講演いただいた。

結 果) 聴講者 約40人

掲載メディア 「CAR GRAPHIC 2025年1月号」

所 感) 専門性の高いジャンルで、どれぐらいの来館者があるか想像できなかつたが、当時実際に多摩川のレースを観戦した方のお孫さんや、多摩川スピードウェイの存在を知らなかつた方々まで興味をもつてご来館いただけた。今は無くなってしまった文化遺産を後世に伝える役割は大きいと感じた。

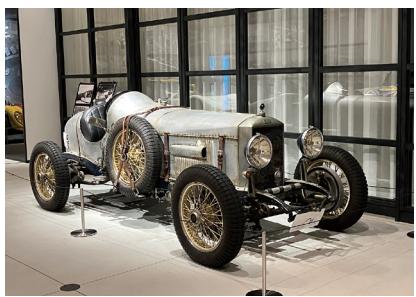


写真16 1929年インヴィクタ 4 1/2



写真17 小林 大樹氏



写真18 小林氏と西川氏



写真19 講演後の集合写真

(4) ツーリングカー特別展 優勝ドライバーによる講演

目的) FSWに所縁のある車両展示として「富士を彩ったツーリングカー特別展」を10月から3月まで開催。チャンピオンカー製作者と優勝ドライバーを招き、当人しか知らない秘蔵のストーリーを語っていただき、聴講者にとっても貴重な機会を提供する。

展示車両) ①1982 スターレットグランドカップ KP61 浅野自動車スターレット
 ②1985 カローラスプリンターグランドカップ仕様 AE86 TRD N2レビン
 ③1989 富士マイナーツーリング B310 トレド246 トライサニー
 ④1989 インターTEC AE92 浅野自動車 カローラレビン

展示品) チャンピオントロフィー、当時の写真や動画映像

講演日時) 1月18日(土) 第1部 10:30~ 第2部 13:30~

登壇者) 1982年 スターレットグランドカップ初代チャンピオン 浅野 武夫氏(有限会社浅野自動車商会 代表取締役社長)
 1989年 富士マイナーツーリング最終戦 優勝 影山 正彦氏(プロレーシングドライバー)
 インタビュアー 元カーマガジン編集長 藤原 よしお氏

テーマ) 第1部 「浅野自動車スターレット チャンピオンのクルマ作りに迫る」
 第2部 「国内ツーリングカーレース戦国時代を往年のドライバー対談」

結果) 聴講者はそれぞれ40人を超える、講演会目的で初めて来館された方も多数。
 登録者10万人を超えるCAR GRAPHIC誌の動画サイト「CG ON THE AIR」による取材も入り配信された。
 掲載メディア 「CG ON THE AIR」
 「Nostalgic Hero 2025年 4月号」

所 感) 往年のレースファンに向けたコアな企画となったが、そのおかげもあり自動車愛好家に最も知名度と視聴者数の多い「CAR GRAPHIC」誌の動画取材と映像配信による宣伝効果は大きいと感じた。お客様とメディア双方に魅力的なコンテンツをご提供することの重要さを学んだ。また、当時の動画映像を入手公開できたことで、より臨場感のある展示に繋がり来館者に大変喜ばれる企画となった。



写真20 サニーとスターレット



写真21 AE86 レビン



写真22 AE92 レビン



写真23 スターレット チャンピオントロフィー



写真24 影山氏と浅野氏



写真25 左から藤原氏 影山氏 浅野氏



写真26 講演後の集合写真

(5) THE GOLDEN AGE OF RALLY IN JAPAN

欧州ラリー黄金時代に挑んだ日本人ラリーストのパイオニアによる講演

目的) 1960年代から80年代にかけて欧州ラリーで活躍した車両を一堂に会した特別展「THE GOLDEN AGE OF RALLY IN JAPAN」を開催。同時代に日本から海外ラリーに挑んだパイオニアで、現在多くのラリーイベントをプロデュース、親子3代に渡り、ラリー界を牽引している勝田 照夫氏を招き、各時代背景を知りモータースポーツの今後について考える。

講演日時) 3月22日(土) 13:30~

登壇者) レジェンドラリードライバー 勝田 照夫氏((株)ラック 代表取締役会長)
インタビュアー 自動車評論家 国沢 光宏氏

テーマ) 「欧州ラリー黄金時代に挑んだ日本人ラリーストから学ぶ今後のモータースポーツ展望」

結果) ラリーに関する講演会は初の試み。聴講者は40人程度。ラリー講演会目的で初めて来館された方も数人。掲載メディア 「ベストカーWeb」

所感) これまでレースカテゴリーを中心に講演会を開催してきたが、ラリー目線でも発信できる展示車が多数ある。一般道を使って行うラリー競技の運営は行政や所轄警察署、地元地域の理解や安全性の担保が重要であるが、地域活性化に対する貢献度も高い。今後もモータースポーツミュージアムとしてできることを発信していくたい。



写真27 THE GOLDEN AGE OF RALLY IN JAPAN



写真28 勝田 照夫氏



写真29 国沢氏と勝田氏



写真30 講演後の集合写真

3 総評

富士スピードウェイに隣接するモータースポーツミュージアムとして、その唯一不变な価値観を求める声が多い。FMMならではの魅力的な展示車両ラインナップと、ゆかりの深い方々からの証言を発信することで、メディアからも興味をひく企画を提供でき相乗的な宣伝効果を發揮し、より多くのミュージアムファンやリピーターの獲得に繋がると考えている。今後もFMMだからこそできる魅力的なコンテンツを積極的に発信し唯一無二のミュージアムにしていきたい。

図1 2024年度 トーキベント開催概要まとめ

開催日	企画展	登壇者	進行	テーマ (内容)	聴講者	掲載メディア
8/5(月)	富士GC特別展	松浦 賢氏 (レースエンジンチューナー) 由良 拓也氏 (レーシングカーアーティスト)	藤原 よしお氏 (ジャーナリスト) 大内 明彦氏 (ジャーナリスト)	第1部 「富士GCレースを振り返る 紫電とMCS開発秘話」 第2部 「GC技術を向上させたエンジンと空力」	各回約40人	「NostalgicHero」 Vol.225 2024/10 「CG NEO CLASSIC」 Vol.9 「AUTO MESSE WEB」
11/2(土)	ハチマルミーティング 前夜祭	岡本 高光氏 (トヨタ自動車(株)OB)	小宮山 泰央 (FMM)	「開発担当者によるエンジンと車両解説」 ST185セリカ、イグレムK. II, TS020	約30人	
12/15(土)	多摩川スピードウェイ 特別展	小林 大樹氏 (多摩川スピードウェイの会 会長)	西川 昇吾氏 (ジャーナリスト)	「1929年インヴィクタと日本のモータースポーツの 夜明け」	約40人	「CAR GRAPHIC」 2025/01
2025年						
1/18 (土)	富士を彩ったツーリング カー特別展	浅野 武夫氏 (レーシングドライバー) 影山 正彦氏 (レーシングドライバー)	藤原 よしお氏 (ジャーナリスト)	第1部 「浅野自動車スターレット チャンピオンのクルマ作りに迫る」 第2部 「国内ツーリングカーレース戦国時代を闘った 往年のドライバー対談」	各回約40人	「NostalgicHero」 Vol.228 2025/04 「CG ON THE AIR」
3/22 (土)	THE GOLDEN AGE OF RALLY IN JAPAN	勝田 照夫氏 (レジェンドラリードライバー)	国沢 光宏氏 (ジャーナリスト)	「欧州ラリー黄金時代に挑んだ日本人ラリーストから 学ぶ今後のモータースポーツ展望」	約40人	「ベストカーWeb」

企 画：小宮山 泰央(富士モータースポーツミュージアム)

映像配信協力：鈴木 基之氏(株)リンクラボ

地域行事と富士スピードウェイ関連イベントとの連携を通じた認知向上と来館促進

期間：2024年8月～2025年3月 場所：小山町、御殿場市、富士スピードウェイ、パシフィコ横浜

富士モータースポーツミュージアム 小宮山 泰央

1 はじめに

富士モータースポーツミュージアム(以下FMM)が開館して2周年を迎えるが、残念ながら地元の方々や富士スピードウェイ(以下FSW)に来場される方々への反響が少ないと感じている。FSWが立地する駿東郡小山町の人口はおよそ1.7万人、隣接する御殿場市は8.1万人となっており、地元行事に出展し、PR活動を行うことで周辺住民との交流を通じたFMMの認知と来館者の向上に繋げる。

また、富士スピードウェイで開催されているレースやファンミーティングイベントに出展することで、メディアも巻き込んだ一層の告知強化を図っていく。

2 地元行事との連携

(1) 7月27日(土) 小山町夏祭り出展

毎年、7月末に開催される小山町夏祭りには8,500人程度の来場がある。長年の歴史を持つFSWの認知はあるが、開業2年目のFMMについても、よりインパクトのある実車を展示することで認知向上に繋げる。

今回、FSWがGRカンパニーから借用した乗車可能なルマンレースカーTS050を展示することを受け、FMMとして、2024年3月に仕上げた乗車体験可能なラリー車、TA64 セリカツインカムターボの展示を提案。

展示に際してはお子様の搭乗体験と、富士モータースポーツフォレストとFMMのPRチラシを配布した。

また、レンタル積載車を使用することで輸送費の低減も図った。搬入時間には雨に降られたが、雨が上がると多くのお子様に乗車いただき喜んでいただけた。およそ3時間の出展で乗車体験人数は60人程度であった。



写真1 小山町夏祭り出展



写真2 搭乗体験



写真3 レンタル積載車使用

(2) 8月3日(土) 御殿場市夏祭り出展

小山町に続きTA64セリカツインカムターボを出展。FSWはオフィシャルカーのGR86を展示。小山町夏祭りと同様に搭乗体験と富士モータースポーツフォレストとFMMのチラシを配布。

サファリラリー優勝車両に搭乗いただく体験は多くのお客様に大好評。「とても懐かい」との声を多くいただいた。およそ3時間の出展で搭乗体験人数は60人程度。



写真4 御殿場夏祭り



写真5 搭乗体験



写真6 FSW合同出展

(3) 10月20日(日) ごてんば線まつり出展

市政70周年を迎えた御殿場市の記念事業として「第18回ごてんば線まつり」が開催。主催の「御殿場線を育てる会」はJR東海のOBが中心となって、御殿場駅前に展示中の蒸気機関車「*D52」の復元作業にも取り組んでおり、モビリティや地元文化の歴史を伝える観点でも当館と共通の価値観を有している。

*D52：かつて御殿場線を走り地域の発展に大きく貢献した。

対応) 一般の方が見たときにインパクトがあり、搭乗も可能なF1車両の展示とチラシ配布を実施。

結果) 約4,000人が来場。駅前ということで、地元だけでなく、観光客の方々にも訴求できるイベントであった。

所感) 地元地域の産業と歴史文化発信に対する取り組みは、社会貢献部として共有できる部分が多い。

地域貢献とモビリティ文化に対する取り組みを参考にしていく。



写真7 御殿場駅前 D52



写真8 F1搭乗体験



写真9 武士パレードの共演者



写真10 地元高校生ボランティアによる「ゆるキャラ」支援

3 富士スピードウェイイベントとの連携

(1) 10月6日(日) インタープロトシリーズとの連携出展

10月7日にFMM開館2周年を迎えるにあたり、10月6日(日)に開催されたインタープロトシリーズのパドック内イベント広場(※)で、FMM展示車両のエンジン始動の様子をお披露目し、より多くの来場者とメディアの目に触れていただき、ミュージアムとしての魅力発信向上に繋げる。

(※)広場では来場者向けに、幅広い世代を対象にした多くのコンテンツが開催されている。

対応) トヨペットレーサーとトヨタ2000GT谷田部スピードトライアル仕様車のエンジン始動実演。
あわせてFMM入館割引チラシを配布した。また当日来場しており、当時実際にハンドルを握ったレジェンドドライバーの鮎子田 寛氏、同じくチームトヨタの見崎 清志氏にもエンジン始動を行っていただき、観覧者にも大好評を得た。



写真11 トヨペットレーサー出展



写真12 2000GTと鮎子田氏



写真13 見崎氏エンジン始動

(2) 11月3日(日) ハチマルミーティングとの連携出展

富士スピードウェイにて芸文社主催の「ハチマルミーティング」が開催された。このイベントは、1980年代から90年代に生産された車両に関心の高い方々が、毎年3,000人以上ご来場される。

特に「Nostalgic Hero」誌では毎号レジェンドドライバー特集を掲載しており、FMMのターゲット層に一番近い。FMMとして関連する車両を会場展示することで、イベントの盛り上げと来館者の誘致に繋げることにした。芸文社側と協議し、出展料に代わりモデルカーおよび招待券を提供することで双方合意した。

対応) TA64セリカツインカムターボ(1984年)および MA70 グループAスープラ(1990年)を展示。

入館割引チラシを配布しFMMへの入館を促す。

結果) ミーティング参加者優待入館 56人 (当日来館者 340人)

一般来場者配布チラシ(4人まで有効/枚) 17枚 30人

主催者のご厚意で、会場内一番流れの良い位置を提供いただき注目を集めた。

また「Nostalgic Hero」誌の取材もあり、出展の様子も紹介いただいた。



写真14 会場出展



写真15 「Nostalgic Hero」誌取材



写真16 芸人イワイガワさん搭乗

(3) 12月22日(日) インタープロトシリーズとの連携出展

借用展示中の多摩川を走った「インヴィクタ」は、動態保存維持のため定期的な走行確認が必要。インタープロトシリーズのパドックイベントとして行っているクラシックカーの同乗走行プログラムに加わることで、一般の方にも直接車両に触れていただける機会を設けた。

対応) インヴィクタのオーナーに相談し、インタープロトイベントでの走行と同乗走行の承諾をいただいた。

他のクラシックカー同様に、一般来場希望者への同乗体験走行を実施。また一般来場者に加えてメディアの方にも同乗いただき、その様子を発信いただいた。

結果) 同乗メディア モータースポーツジャーナリスト 小倉 茂徳氏 モータージャーナリスト 大内 明彦氏

掲載メディア 「オートスポーツ Web」

「Nostalgic Hero 2025年 4月号」

所感) 会場には当時の車両所有者であった渡邊 甚吉氏の家屋とガレージを移転保存した前田建設様、さらに実際に

車両を運転していた川崎 次郎氏のご子息までお越しいただき、今後に繋がる幅広いご縁に恵まれる機会となり、まさに数奇な運命を辿ったインヴィクタの取り持つ貴重なご縁に感謝している。



写真17 インヴィクタ走行



写真18 搭乗体験



写真19 小倉氏解説

※去る2025年5月14日、モータースポーツジャーナリストの小倉 茂徳氏がお亡くなりになりました。小倉さんにはプライベートでも何度もFMMにご来館いただき、いつも優しく接していただきました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(4) 2月22日(土)・23日(日) ノスタルジック2デイズ出展

毎年パシフィコ横浜で国内最大級の旧車イベント、芸文社主催「ノスタルジック2デイズ」が開催されている。このイベントは、二日間で4万人規模の来場があり、少し古い車に関心のある世代が集まるためFMMの来館ターゲット層にも合致している。

また、レジェンドレーシングドライバーに対する企画も多く、主催者や他の出展企業様とも上手く付き合うことで今後の発展性にも期待できる。

対応) 1984 TA64セリカツインカムターボサファリ優勝車および 1969 トヨタ7日本カンナム優勝車を展示出展する。あわせて入館割引および富士モータースポーツフォレストのチラシを各2,000枚配布した。また、今回初めてFMMオリジナル商品の物販に取り組み、イベントの盛り上げにも協力する。

トヨタおよびGR,KINTO出展エリア近くにスペースをいただき関心に繋げた。

結果) 後日FMMへの来館者 チラシ確認36件、約50人の来館に繋がった。

また、初日の夜には出展関係者に向けた懇親会があり、レジェンドレーシングドライバーや関連企業様との交流を通じ、今後に向けても有意義な出展とすることことができた。

物販においては二日間で118,500円を売り上げ。単価の安いポスターとカードセットの売れ行きが好調であった。また、雑誌取材や動画配信もあり、今後の宣伝効果に期待が持てる取り組みとなった。



写真20 ノスタルジック2デイズ出展



写真21 会場の様子



写真22 初めての物販



写真23 レジェンドドライバーとの交流
(大久保 力氏、高橋 晴邦氏、多賀 弘明氏、長坂 尚樹氏)

4 所感

富士スピードウェイで開催されるイベントや自動車ファンに向けたイベントでの出展や入館割引チラシ配布では、多くの方々のFMM来館に繋がることを実感。また各自動車関連イベントに出展したことで多くの貴重なご縁にも繋がった。

一方、地域連携として出展した周辺自治体の行事では、来館促進や今後の発展性についての感触は少なく、富士スピードウェイと役割を分担しながら、効率的なPRと地域交流について検討していく必要があると考えている。

図1 2024年度 関連イベント出展振り返り

開催日	分類	イベント名	対応内容	イベント規模 対応数/来場者数	イベントからの来館数	掲載メディア
7/27(土)	地域	小山町夏祭り	TA64セリカ展示、搭乗体験 チラシ配布 200枚	搭乗者 約60人 来場者 約8,500人	—	—
8/3(土)	地域	御殿場市夏祭り	TA64セリカ展示、搭乗体験 チラシ配布 200枚	搭乗者 約60人 来場者 -	—	—
10/6(日)	FSW	IPS出展	トヨタ2000GT エンジン始動 トヨペットレーサー エンジン始動 割引チラシ配布 200枚	来場者 約500人	チラシ入館 10人	—
10/20(日)	地域	ごてんば線まつり	トヨタF1ショウカー展示、搭乗体験 割引チラシ配布 250枚	搭乗者 約80人 来場者 約4,000人	—	—
11/3(日)	愛好家	ハチマルミーティング	MA70スープラ展示 TA64セリカ展示 割引チラシ配布 500枚	参加台数 500台 来場者 約3,200人	*1 参加者優待 65人 *2 チラシ入館 17組 30人	「NostalgicHero」 Vol.227 2025/02
11/21(木) ～24(日)	企画展	ラリージャパン	THE GOLDEN AGE OF RALLY IN JAPAN 告知 ジーノ・マカルーゾ財団車両 6台展示 割引チラシ配布 2,000枚	来場者 66,100人	チラシ入館 10組 24人	「auto sport Web」 「car watch」 「Rally+net」
12/22(日)	FSW	IPS出展	インヴィクタ走行披露、搭乗体験	搭乗者 8人 来場者 約5,000人	チラシ入館 17人	「NostalgicHero」 Vol.228 2025/04
2025年						
2/22(土) ～23(日)	愛好家	ノスタルジック2デイズ	トヨタ7展示 TA64セリカ展示 映像放映、オリジナル商品の物販 割引チラシ配布 2,000枚	来場者 42,561人	チラシ入館 36組 50人	「NostalgicHero」 Vol.229 2025/06

*1 イベント参加者に入館割引を設定、事前告知を行った。

*2 チラシ割引 4人/枚 まで有効

展示車両の動態保存に向けた取り組み

期間：2024年4月～2025年3月 場所：富士モータースポーツミュージアム

富士モータースポーツミュージアム 長谷川 伸、小宮山 泰央

1 はじめに

富士モータースポーツミュージアム(以下FMM)に展示している車両の約半数は、動態保存を基本方針とするトヨタ博物館からの貸与のため、ほとんどが走行可能となっていた。しかしFMM開館前から数年間、車両整備できる環境がなく、車両の経年劣化が進んでいた。そこで、FMMとして車両を整備できる環境を整え、定期的なメンテナンスを行うことで、動態保存状態を維持する仕組みづくりに着手した。

また、新たにモータースポーツ車両のパワートレーン開発や車両走行サポートを経験したメンバーが加わったことで、モータースポーツ車両特有の知識や経験が必要な部分についても、知見者への相談を得やすい環境となった。

動態保存に向けた最初の取り組み車両として、FMMの象徴であり、トヨタ博物館やトヨタ自動車株式会社(以下TMC)OBの知見を活かし、今後に継承していくことを目的として、①トヨペットレーサー、②トヨタ2000GT谷田部スピードトライアル仕様車、③トヨタ7日本カンナム優勝車を選定した。

2 取り組み

(1) 1951年 トヨペットレーサー(復元車)

背景) 2023年9月から10月にかけて、TMC東富士研究所(以下TMC東富士)のパワートレーン開発に携わる技能員が、エンジン、ミッション、デフ、ブレーキ等の各油脂類を交換、エンジン始動まで実施済みであった。

当該メンバーとも連携を図りながら、整備作業を継続し、あらたに走行確認まで実施することにした。

対応) 富士スピードウェイ内にあるトヨタ交通安全センター(モビリタ)の休業日を借用し、走行確認を実施した。

手順に従いエンジン始動を試みたが、アイドリング回転が高く、リンク機構の調整作業を実施。

また、走行においてはギヤが入りにくくなっていることを確認。しかし当面、トランスミッションをオーバーホールする予定はなく、走行時には慎重な操作を行える運転者に限定したほうが良いと思われる。

結果) 10月6日(日)FMM開業2周年記念として、富士スピードウェイで行われているインタープロトシリーズ(以下IPS)のパドックイベントに展示出展。エンジン始動披露を実施。多くの方の目に触れていただいた。



写真1 東富士メンバー連携



写真2 エンジンルーム



写真3 スロットルリンク



写真4 モビリタで始動確認



写真5 各部操作確認



写真6 エンジン始動お披露目

(2) 1966年 トヨタ2000GT谷田部スピードトライアル仕様車

背景) 1966年10月、市販化される前に3つの世界新記録と13の国際新記録を樹立した谷田部スピードトライアル仕様のトヨタ2000GTは、トヨタモータースポーツの象徴でもあり、過去にトヨタ・ガズー・レーシング・フェスティバル(以下、TGRF)やトヨタ博物館イベントでの走行実績もあることから、まずはトヨタ博物館からエンジン始動に関するマニュアルを入手することから始めた。エンジン周りについて外観上の不具合は見当たらなかったが、タイヤを外してサスペンション周りを確認したところ、ステアリングラックブーツ、タイロッドエンドブーツ等のゴム製部品は経年劣化により亀裂損傷が激しかった。

また装着しているタイヤは古く、ホイールも古いマグネシウム製のため、走行には不適であることを確認。

対応) キャブレター仕様のレース車両に詳しいTMC OBの知見も借りて、点火プラグ清掃、冷却水、オイル周りを確認し、始動要領もご教示いただいたことで、無事にエンジンは始動した。しかしメーター周りの油温、油圧、水温計はいずれも作動不良が判明。外観を損なわないように追加メーターの設置を検討している。

シャシーについてはブレーキ周りの清掃とブレーキフルード交換、エア抜き実施。ステアリングラックブーツ他各ゴム製部品に関しては純正部品の入手が困難であるため、実際の寸法から汎用品を調達し、作業を継続している。

タイヤは近年、ヨコハマタイヤがトヨタ2000GT用にラインナップした「G.T. SPECIAL CLASSIC Y350」165/80R15、ホイールはトヨタ2000GTオーナーズクラブが特注所有していたエンケイ製新品アルミホイールを入手した。

ただし、ホイールナットはマグネシウム用とアルミ用で形状が異なるため、引き続き入手手立てを検討している。

結果) 先述のトヨペットレーサーと同日に、超低速での簡単なチェック走行を実施。走る、曲がる、止まるまでの確認はできた。また、同様に10月の富士スピードウェイIPSイベントに出展、会場では実際に谷田部テストコースを走った鮎子田 寛氏による車両解説とエンジン始動パフォーマンスを披露。大いなる発信にも繋がった。



写真7 車両整備室でのメンテナンス



写真8 エンジンルーム点検



写真9 マニュアル確認



写真10 スパークプラグの状態



写真11 作動不良状態の油温計と水温計



写真12 作動不良状態の油圧計



写真13 ステアリングラックブーツ損傷



写真14 ボールジョイントブーツ欠損



写真15 ブレーキ清掃



写真16 展示車のセンターロックナット



写真17 走行用アルミホイール



写真18 スペーサー導入



写真19 エンジン始動イベントの様子



写真20 エンジン始動お披露目



写真21 鮎子田 寛氏

(3) 1969年トヨタ7 日本カンナム優勝車

背景) 1969年に富士スピードウェイで行われた日本カンナムレースで、故川合 稔選手のドライブにより優勝を果たしたトヨタ7(開発コード474S)は上述トヨタ2000GT同様、過去にTGRF等のイベントでの走行実績はあるが、そのオペレーションは、全てトヨタカスタマイジング&ディベロップメント(以下TCD)に委託していた。

元来、トヨタ7のレストアは、2001年にトヨタ技術会の時間外活動として、TMC東富士のメンバーが集結して始まったプロジェクト。現在トヨタ博物館で所蔵するニュートヨタ7アーボ車と自然吸気エンジン車は車体、エンジンとも東富士メンバーが作業を実施しており、日本カンナム優勝車も車体はTCD、エンジンは当時TMC所属で現OBの杉山 武彦氏がフルリビルトを担当した。現在実動するトヨタ7は3台存在するが、それらのオペレーションを再びTMCメンバーで行えるようにすることで、実動時の費用低減と、杉山氏を中心とした当時のレストアを担当した社内外のメンバーとも情報交換を進め、今後の技能伝承とノウハウ蓄積に繋げることを目指す。

現状) エンジン火入れ前の各部作動確認を試みたところ、下記の不具合を確認。

- ①メカニカル燃料ポンプのホース取り付けユニオン部からの燃料漏れ
- ②スターターピニオンギヤとエンジンフライホイルのリングギヤ噛みあい不良
- ③クランクイン回転数が低い
- ④クラッチラインからのオイル漏れ
- ⑤クラッチレリーズシリンダ取り付け部からのオイル漏れ

対応) 杉山氏の指導のもと、各不具合項目について対策実施。

- ①まずはスペア保管していた燃料ポンプを分解して構造を理解。その結果、該当部のOリングと銅ワッシャの不具合が疑われたため、適合サイズを調査し調達。その後、車両から実際の燃料ポンプを取り外し、該当部のOリングと銅ワッシャを交換。単体で漏れ確認テストを行い問題ないことを確認して車両に組み戻した。
- ②スターター本体を車両から取り外し単体テスト実施。ピニオンの出代が少ない為、専門業者にてリビルト実施。その後、正常に作動することを確認し車両に組み戻した。
- ③補助バッテリーとの接続用ケーブルを製作。始動時に接続することで供給電圧を安定できるようにした。
- ④クラッチラインのフィッティングホースユニオンを交換。クラッチとブレーキのフルード交換、エア抜き実施。
- ⑤レリーズシリンダ取付けボルトの底付きによる締め付け不足と判断。短いボルトにシール材を塗布して締付け。

結果) 12月にエンジン始動まで確認できた。しかし1月に再度エンジン始動しようとしたところ点火しない症状が発生。TCDとデンソー担当者に確認したところ、点火系にクランクイン回転数の高い米国のCART用の電装システム

を改造して使用していることが判明。外気温が低いとエンジンオイルの粘度が高くなり内部抵抗増加によりクラシング回転数が低下、回転信号を拾わず始動困難に陥ることが判明。冬期の外気温が低い条件下では、始動前にジェットヒーター等の暖機装置を用いてエンジン周辺の暖機と満充電した補助バッテリーを接続することで、辛うじてエンジン始動することができた。

また、1月末に実施したジー・マカルーソ財団から借用中のラリー車走行確認にあわせて、富士スピードウェイのパドック内において、TMC関係者だけでエンジン始動と確認走行まで実施できた。引き続き、エンジン始動性改善と継続的な整備を行うことで動態保存状態を維持していく。



写真22 当館整備場にて



写真23 エンジン周り点検



写真24 燃料ポンプ



写真25 メカニカル燃料ポンプ本体



写真26 燃料ポンプOリングと銅ワッシャ交換 (オーリング)



写真27 レクチャー



写真28 スターター



写真29 補助バッテリーケーブル



写真30 クラッチメンテナンス



写真31 フロント下回り確認



写真32 クラッチレリーズ取り付けボルト修正



写真33 エンジン下回り確認



写真34 エンジン始動確認



写真35 補助バッテリー接続



写真36 外部ヒーターによる暖気



写真37 トヨタ博物館連携



写真38 パドック走行風景



写真39 長谷川、小宮山、OB杉山氏



写真40 OBの勝又一氏(左)、杉山武彦氏(右)

3 まとめ

お客様に展示車両が実際に動く姿を見せられることで、ミュージアムの存在意義や注目度は大きく変わり、多くの人をワクワクさせることにも繋がる。経年劣化したモータースポーツ車両の維持は容易なことではないが、唯一無二のモータースポーツミュージアムを目指して、今後も継続的な整備と走行披露を発信し、より魅力あるミュージアムになるように努めていきたい。

また、このような歴史的車両の動態保存においては、当時を知っているベテランや各関連企業様との連携サポートがあるからこそ継続していくものと思う。この場をお借りして、OBをはじめとするサポートいただいているすべての皆様にあたり感謝申し上げるとともに、引き継いだものを今後に継承していくためにも、これからも幅広い車種の動態保存に向けて積極的に取り組んでいく所存である。

企 画：長谷川 伸、小宮山 泰央(富士モータースポーツミュージアム)

作業協力：杉山 武彦氏、勝又 一氏(トヨタ自動車(株)OB)

岡寄 輝彦氏(CLASSIC RACING SERVICE OKAZAKI)

富士モータースポーツミュージアム 来場者10万人達成 & 感謝WEEK開催

実施日：2025年2月8日(土)～2月16日(日) 場所：富士モータースポーツミュージアム

富士モータースポーツミュージアム 稲富 克彦

1 はじめに

富士モータースポーツミュージアムは、2025年2月8日(土)累計来場者数10万人を達成した。2022年10月7日(土)開業以来、2年と4ヶ月での達成であった。一方でトヨタ博物館は、年間平均22万人を超える来場者で、2025年1月に800万人達成&記念WEEKが実施されており、その姉妹館としては、小さな通過点であるが、富士モータースポーツミュージアムならではの記念企画を実施した。

2 来場者10万人達成を目前にして

「130年のモータースポーツの歴史を学び、その未来に向けて想いを馳せるミュージアム」その常設展示や、特別企画展示を楽しみに訪れてくださるコアなファンの皆さま、さらにはクルマ好きのご家族や、富士山観光、ホテルご宿泊の方々と、徐々にではあるが、多方面からの来館者が増え始め、本年に入り累計来場者数10万人到達が見えてきていた。そこでトヨタ博物館800万人達成記念イベントを参考に、ささやかではあるが達成記念セレモニーと感謝WEEKを計画した。

記念来館となった方には、当館・布垣館長からのご挨拶と記念品をお渡しし、展示車両に記念乗車いただくことを想定。また、感謝WEEK期間中にご来館いただいた方々にも記念品をご用意し、くじ引き(通称:ガラポン)による抽選会を行うことにした。

3 10万人目のお客様はクルマ好きのご家族

10万人達成は、当日朝に事前予約いただいた「父子でクルマ好きのご家族」となった。(写真1)記念セレモニーへの同意をいただき、布垣館長から認定証と記念品を贈呈した(写真2)。そして、お好きなクルマとの記念撮影を行った。クラシックカーが大好きだというお子さんは、「むかしの黄色いスポーツカーかっこいい!」とスタッフ・ベアキャット(インディー500マイルレースの申し子で、戦前最高のアメリカン・スポーツカー)を選ばれ、特別に運転席にも座っていただき撮影をおこなった。(写真3)目を輝かせてハンドルを握りしめる姿は、とても微笑ましく、それを見守っていたお母さまも、モータースポーツへの興味関心が高まったようで、その後の館長特別ガイドでは、一番熱心に聞き入っていただいた。



写真1 来場者10万人目のお客様の家族



写真2 認定証と記念品の贈呈



写真3 特別に着座いただき記念撮影

4 感謝WEEKガラポン抽選会

感謝WEEK(達成翌日から8日間)では、少し趣向を凝らし、毎日の開館後、先着20組(計160組)に非売品を含む記念品を進呈。(写真4)また期間中にご来場いただいたすべての方に、ミュージアムオリジナルグッズ各種(総数33品)を景品としたガラポン抽選を実施させていただいた(写真5)(写真6)。これは単に感謝の気持ちを表すだけでなく、抽選の際に、お客様との会話を通じて、このミュージアムご来場の経緯やご感想をお伺いする良い機会と捉えた。通常の記入式アンケートも実施しているが、フェイスtoフェイスでの会話で、よりリアルなお客様の声を聞くことができた。



5 感謝WEEK来場者の動向

抽選会に参加いただいた総数は1,200名程度。そのうち四分の一は、海外の方々で国籍も多岐にわたり、多くは富士山や箱根観光からの流れであったり、ミュージアム併設のホテルご宿泊の方々であったりと、この場所ならではの海外からの来場動向が浮き彫りになった。また開館以来、主に国内のメディア誘致、ホームページ告知、SNS発信、外部イベント出展など、地道にPR活動に取り組んだ結果として、富士の麓にあるモータースポーツ車両を展示したミュージアムとしての知名度が徐々にあがり、ここを目的として、遠方よりご来場くださった数多くの方々がいらっしゃった。(写真7)(写真8)。



写真7 欧州からご来館されたお客様



写真8 アジアからご来館されたお客様

6 おわりに

小さな通過点としての来場者10万人達成記念セレモニーと感謝WEEKではあったが、お客様とコミュニケーションをとる良い機会となり、ミュージアムを気に入り、遠方から何度もお越しになっているグループ、クルマ好きのお子さんにせがまれて来てみたというご家族、遠く海外から当館を目指してきたという外国人観光客など、想像以上に好意的なご来館理由を直接お伺いできたことで、これまでの取り組みが、少しずつ実を結んでいることを実感した。

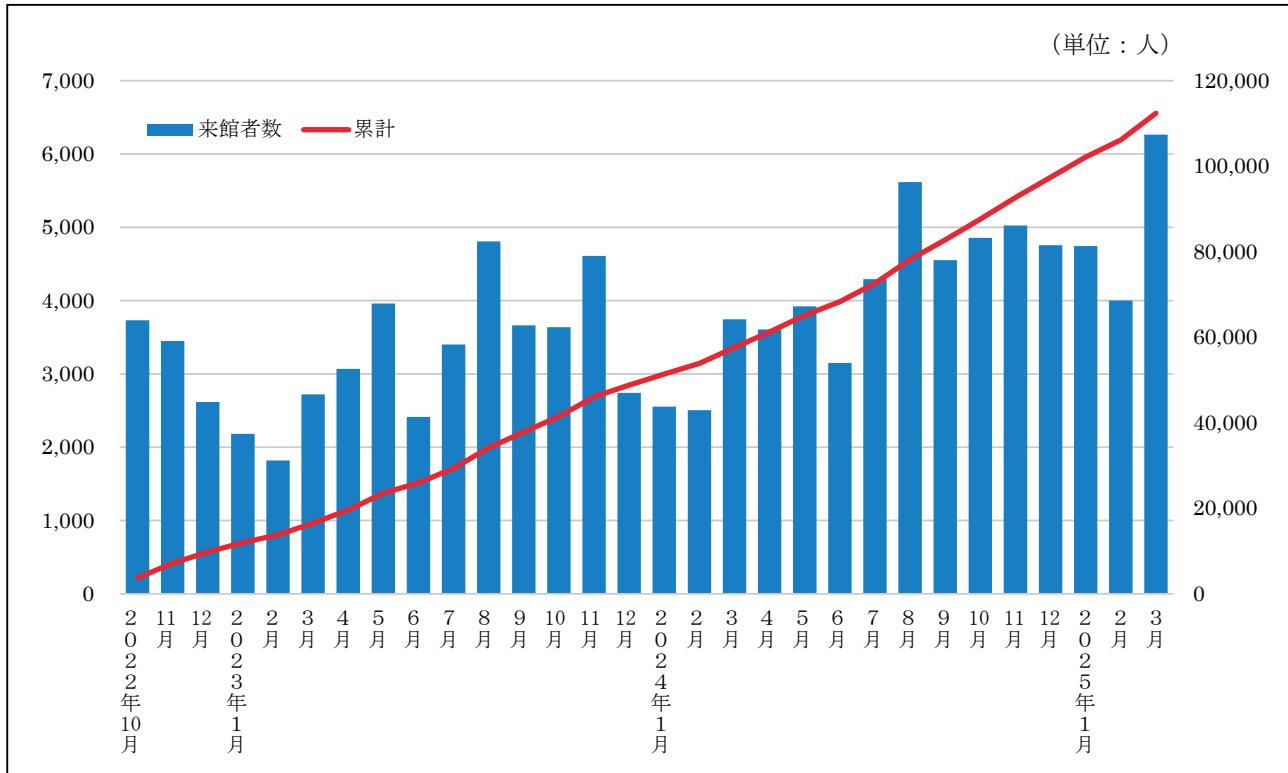
これからも、持続的成長を掲げるミュージアムとして、このようなお客様との対話、コミュニケーションの場を大切にして、次への活動のヒントを導き出し、お客様が「楽しかった。また来たい」と思っていただけるミュージアムを目指していきたい。

企画統括：稻富 克彦(富士モータースポーツミュージアム)

運営支援：FMMスタッフ

来館者データ(開館から2024年度)

①月別来館者データ(開館から2024年度)



②2024年度の月別 形態別 来館者数

(単位: 人)

月	24年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	25年1月	2月	3月	24年度計	23年度計
個 人	2,171	2,774	1,858	2,932	4,271	3,406	3,737	3,210	3,433	3,438	2,898	5,044	39,172	26,094
団 体 大 人	505	269	476	289	229	493	335	983	306	215	183	238	4,521	5,409
団 体 高 中 学	7	41	36	34	1	6	0	1	1	0	10	0	137	237
団 体 小 学	7	0	0	21	4	20	0	3	3	0	11	2	71	64
宿 泊	917	837	779	1,016	1,111	627	783	827	1,013	1,091	898	979	10,878	9,300
計	3,607	3,921	3,149	4,292	5,616	4,552	4,855	5,024	4,756	4,744	4,000	6,263	54,779	41,104

③2024年度の月別 客層別 来館者数

(単位: 人)

月	24年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	25年1月	2月	3月	24年度計	23年度計
大 人	3,127	3,436	2,746	3,507	4,396	4,077	4,324	4,552	4,176	4,135	3,553	5,495	47,524	35,964
中高生	124	176	133	261	375	117	108	93	195	200	105	264	2,151	1,477
小 学 生	200	158	142	316	543	171	209	206	237	218	157	259	2,816	1,978
未 就 学	156	151	128	208	302	187	214	173	148	191	185	245	2,288	1,685
年度累計	3,607	3,921	3,149	4,292	5,616	4,552	4,855	5,024	4,756	4,744	4,000	6,263	54,779	41,104

車両貸与者(2024年度)

展示方法	貸与月	貸与者名	車両名()は年式	写真
常設展示	2024. 6	GR	ミノルタトヨタ 90C-V (1990年)	
	2024. 7	三菱自動車工業(株)	三菱スタリオン4WD ラリー (1986年香港・北京ラリー参戦車)	
	2024. 8	GR	スープラ GT-LM (1995年)	
	2025. 1	GR	レクサス LFA (2007年)	
企画展示	2024. 5	Racing Gear Collection	マーチ 74S (1974年)	
	2024. 5	Racing Gear Collection	紫電77 (1977年)	
	2024. 5	Racing Gear Collection	MCS バーダル (1979年)	
	~2024.7 2024.12~ 2025.4 再貸与	(株)エッチ・ケー・エス	HKS スカイラインGT-R (1992年)	
	2024. 9	個人オーナー 様	フェラーリ 166 インテルツーリング (1949年)	
	2024. 9	個人オーナー 様	フェラーリ 288GTO (1984年)	
	2024. 9	(有)浅野自動車商会	浅野自動車 KP61 スターレット (1982年)	
	2024. 9	(有)浅野自動車商会	浅野自動車 AE92 レビン (1989年)	

展示方法	貸与月	貸与者名	車両名()は年式	写真
企画展示	2024. 10	志村 一寿 氏	B310 トライサニー(1989年)	
	2024. 10	コシミズモータースポーツ	TRD AE86 N2 レビン(1985年)	
	2024. 10	個人オーナー 様	インヴィクタ 4 1/2(1929年)	
	2024. 10	(株)ティーシーコレクション	トヨタ2000GT 第3回日本グランプリ #17仕様車(1966年)	
	2024. 11	ジーノ・マカルゾ財団	ミニ クーパS(1966年)	
	2024. 11	ジーノ・マカルゾ財団	フィアット X1/9 アバルトプロトティーボ(1974年)	
	2024. 11	ジーノ・マカルゾ財団	ランチア ストラトス(1976年)	
	2024. 11	ジーノ・マカルゾ財団	フィアット 131 アバルト Gr4(1978年)	
	2024. 11	ジーノ・マカルゾ財団	ルノー サンク ターボ(1981年)	
	2024. 11	ジーノ・マカルゾ財団	アウディ クワトロ(1981年)	
	2025. 1	日産自動車(株)	日産 R382 #21(1969年)	
	2025. 3	東都運業 河野 義和 氏	ローラ T70 Mk.III(1968年)	

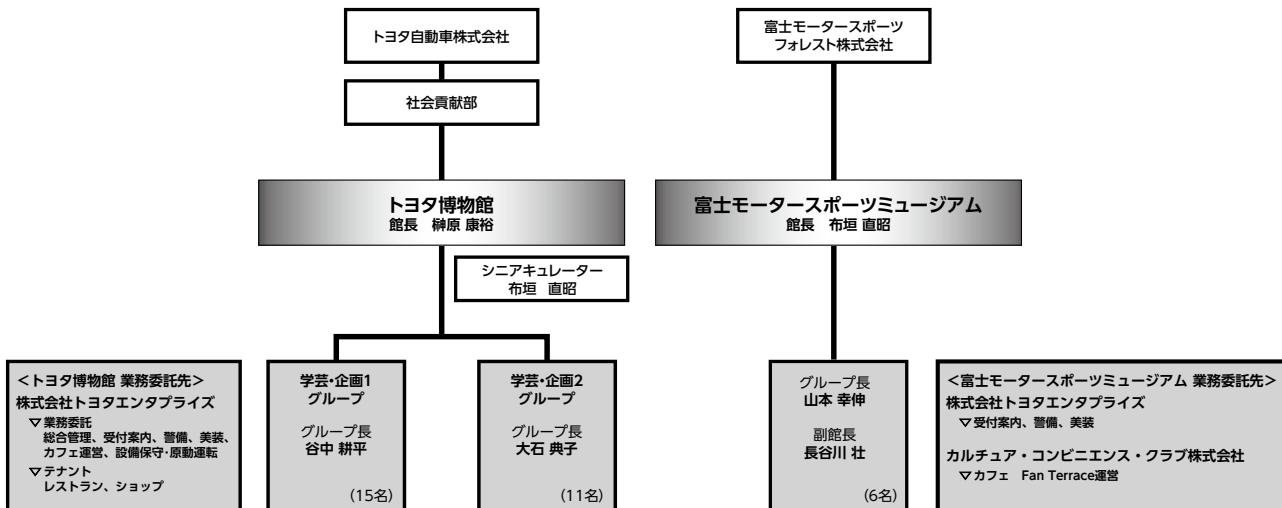
活動年表(2024年度)

2024年 4月	18日	木	ミュージアムチケット販売機(KIOSK)の稼働開始
	25日	木	ガイドブック&展示車両カードの販売開始
5月	1日	水	富士グランチャンピオン(GC) レースシリーズ特別展 開始(マーチ74S、紫電77、MCSバーダル)
	2日	木	レジェンドドライバートークセッション(鈴木田氏・長谷見氏・J-Sports撮影)開催
	11日	土	
	18日	土	富士ファンクルーズ「小粋なフランス車でサーキットクルーズ」開催
6月	1日	土	ミノルタトヨタ90C-V展示開始
			バスタ新宿⇒富士スピードウェイホテル間の直通バス運行開始(小田急バス2往復/日)
			カルソニックGT-R展示開始
	18日	火	はとバス日帰りツアー開始(富士スピードウェイバス走行+ホテルランチ+ミュージアム)
7月	29日	土	小山町少年野球教室と連動したガイドツアー開催(スタッフによる小中学生向け説明とクイズ実施)
	2日	火	ブガッティ52展示開始
	3日	水	セリカTA64展示開始
	5日	金	スタリオン4WDラリー展示開始
	13日	土	夏休み特別企画 で小学生入館料無料を開始 更に20日よりスープラーボAでの子供乗込み体験開始(～8月31日で1,133名体験)
	20日	土	
	27日	土	「小山町夏祭り」にセリカTA64を出展
8月	2日	金	オリジナルモデルカー販売開始
	3日	土	「御殿場市夏祭り」にセリカTA64を出展
	5日	月	富士GC特別展示に合わせた、松浦 賢氏と由良 拓也氏の公開取材・トークショーを開催
	29日	木	Supra GT-LM(1995年ル・マン参戦車)を展示開始
	31日	土	台風10号影響により終日臨時休館(8/31～9/1)
9月	2日	月	フェラーリとモータースポーツ特別展 開始(フェラーリ 166 インテルツーリン、フェラーリ 288GTO)
	11日	水	イーグルMk.III/トヨタTS020 リアカウルを開けた展示開始
	12日	木	富士ツーリングカー特別展 開始(浅野自動車 KP61 スターレット・浅野自動車 AE92 レビン)
	15日	日	2024年度 最多来館者703名(富士スピードウェイでWEC 決勝日)
	18日	水	ホテルとミュージアム合同での全館合同の防災訓練を実施
10月	6日	日	開業2周年記念、展示車両のエンジン始動を初開催 富士スピードウェイイベント広場で2000GT・トヨペットレーサーのエンジン始動
	9日	水	富士ツーリングカー特別展示にB310 トライサニー 追加展示 アジアのモータースポーツ ゾーンにインヴィクタ 41/2展示開始
	11日	金	富士ツーリングカー特別展示にTRD AE86、N2 レビン 追加展示
	18日	金	トヨタ2000GT 日本グランプリ #17 展示開始
	20日	日	「ごてんば線まつり」にトヨタF1ショウカーを出展
11月	1日	金	世界自動車博物館会議対応で富士スピードウェイサーキット走行体験やFMM見学会など実施し、締めのイベントとしてフェア ウエルパーティーを開催 並行してFIVA(Fédération Internationale des Véhicules Anciens)自動車殿堂を開催
	2日	土	世界自動車博物館会議と連携した富士ファンクルーズ「60年代～90年代の日本の名車編」開催 トヨタのモータースポーツエンジン設計・開発を担当した岡本 高光氏によるエンジン特別開設 開催
	3日	日	富士スピードウェイ「ハチマルミーティング2024」にセリカTA64とスープラーボAを出展
	16日	土	ガイドツアー内容をリニューアル(一部展示車のボンネット/ドアを開けて解説実施)
	19日	火	Mr. Hiro World Party 内で、稻田 大二郎氏・谷口 信輝氏・長谷川 壮副館長とのトークセッション等を開催
	27日	水	The Golden Age of Rally in Japan 特別展 開始(同日プレスカンファレンス実施)
12月	8日	日	富士ファンクルーズ 女性ドライバー編を代官山T-site「モーニングクルーズ」と初コラボレーション
	15日	日	「1929年 インヴィクタと日本のモータースポーツの夜明け」講演(小林 大樹氏) 開催
	22日	日	展示車両の走行イベント初開催 富士スピードウェイ パドック内広場にて、インヴィクタ走行
2025年 1月	17日	金	LEXUS LFA 展示開始
	18日	土	富士を彩ったツーリングカー 特別講演(浅野 武夫氏・影山 正彦氏)開催
	25日	土	The Golden Age of Rally in Japan 特別展示車両のエンジン始動実施
2月	8日	土	来館者数10万人達成 達成記念WEEK を開催
	20日	木	The Golden Age of Rally in Japan 特別展記念 ラリー名車10選 フォトカード販売開始
	22日	土	パシフィコ横浜「ノスタルジック2デイズ」にトヨタ7日本カンナムとセリカTA64を出展
	23日	日	
3月	15日	土	The Golden Age of Rally in Japan 特別展示車両の走行テスト実施
	22日	土	The Golden Age of Rally in Japan 特別講演(勝田 照夫氏) 開催

運営組織・施設概要

1 運営組織

(2025年3月31日現在)



2 施設概要

(1)トヨタ博物館

■所 在 地 〒480-1118 愛知県長久手市横道41番地100
電話 : 0561-63-5151、FAX:0561-63-5159

■ホームページ <https://toyota-automobile-museum.jp/>



■展 示 概 要 トヨタ博物館はトヨタ自動車(株)の創立50周年(昭和62年)記念事業の一環として、1989年(平成元年)にオープン。開館10周年の1999年(平成10年)には、新館(現・文化館)を併設し、開館30周年の2019年(平成31年)には、文化館2階を「クルマ文化資料室」としてリニューアルオープンした。「クルマ館」では19世紀末のガソリン自動車誕生から現代までの自動車の歴史を日米欧の代表的な車両約140台で紹介しており、「クルマ文化資料室」では「移動は文化」をテーマに、ポスターや自動車玩具、カーマスコットなど自動車にまつわる文化資料、約4,000点を展示している。

■建 築 概 要

	クルマ館	文化館
開館日	1989年4月16日	1999年4月17日
敷地面積	46,700m ² (約14,000坪)	
建築面積	4,800m ² (約1,500坪)	2,700m ² (約820坪)
延床面積	11,000m ² (約3,300坪)	8,250m ² (約2,500坪)

※2019年4月、本館→「クルマ館」、新館→「文化館」に施設名称を変更

(2)富士モータースポーツミュージアム

■所 在 地 〒410-1308 静岡県駿東郡小山町大御神 645
すんどうぐん おやまちょう おおみか
電話 : 0550-78-2480

■ホームページ <https://fuji-motorsports-museum.jp/>



■展 示 概 要 「富士モータースポーツミュージアム」は、国内外の自動車メーカーが協力した世界的にも珍しい「モータースポーツ展示館」として、富士スピードウェイ隣接地に2022年(令和4年)10月にオープンした。
「モータースポーツが車を鍛え、進化させた熱い歴史をたどる」ことをコンセプトに、約40台の車両展示をとおして、約130年のモータースポーツの歴史を紹介している。

■建 築 概 要

開 館 日	2022年10月7日
展示面積	3,400m ² (約1,000坪)

※富士スピードウェイホテルの1階、2階が「富士モータースポーツミュージアム」のため、展示面積のみ掲載

**トヨタ博物館／富士モータースポーツミュージアム
年報 2024年度版**

発行日 2025年6月30日

編集・発行：トヨタ自動車株式会社 トヨタ博物館

〒480-1118 愛知県長久手市横道41番地100

Tel. 0561-63-5151 Fax. 0561-63-5159

レイアウト：株式会社トヨタエンタプライズ

印刷・製本：トヨタループス株式会社

トヨタ博物館

TOYOTA AUTOMOBILE MUSEUM

富士モータースポーツミュージアム

FUJI MOTOSPORTS MUSEUM



トヨタルーブス



[加工製本]

トヨタルーブスは、障がいのある方により多くの働く機会を提供するためにトヨタ自動車が設立した重度障がい者多数雇用事業所で、特例子会社に認定されています。トヨタ自動車の中で行っていた社内印刷、社内郵便物の受発信などの業務を受託業務として行っています。本冊子の印刷・製本はトヨタルーブスが行いました。